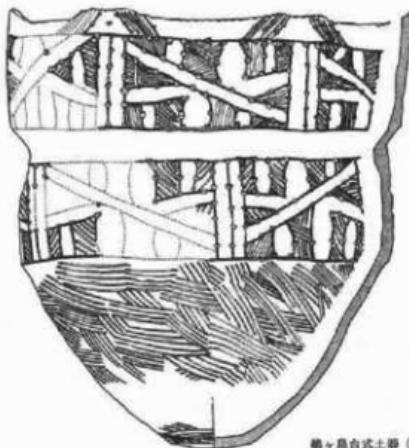


柳久保遺跡群 V



楓ヶ島式土器（複数土器）

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

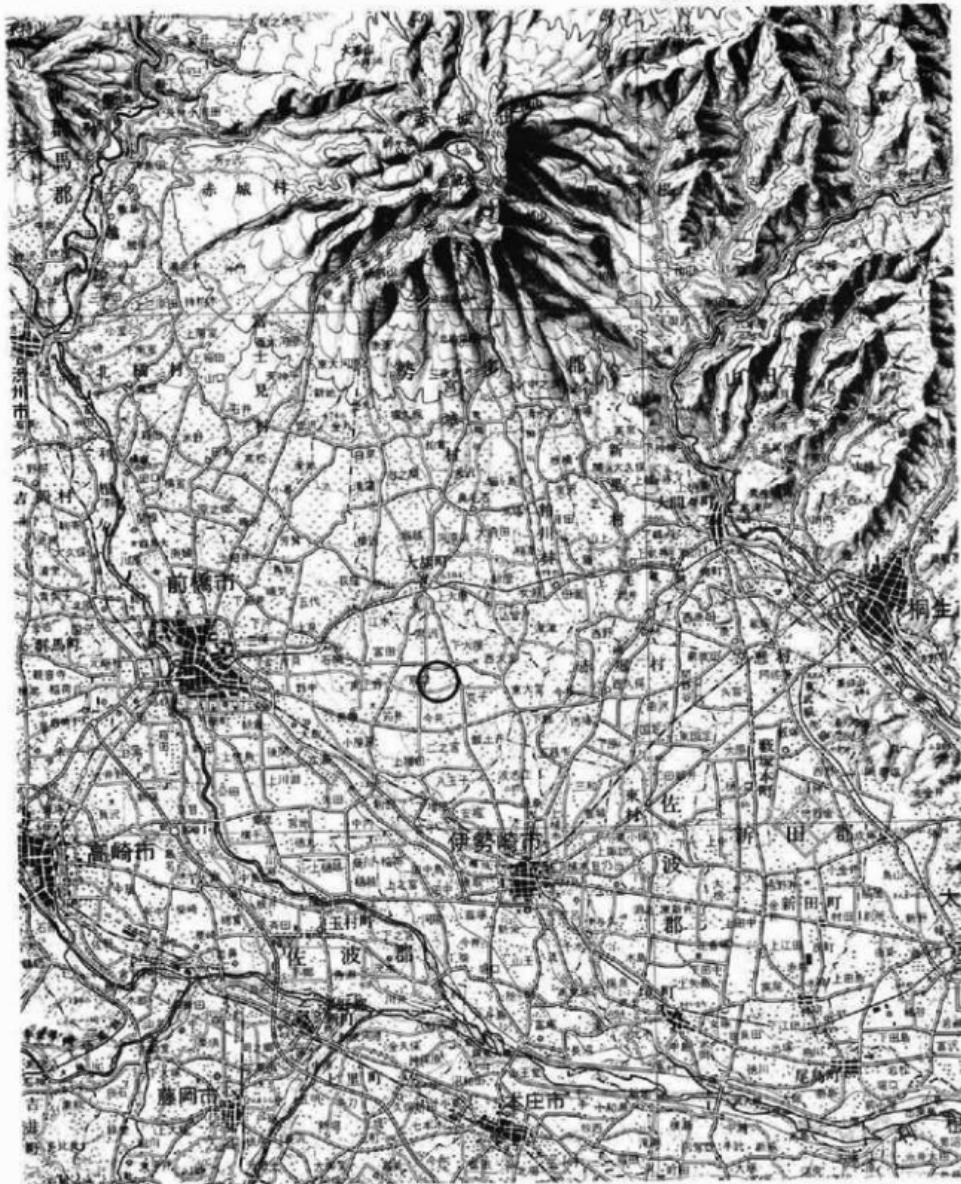


1. 赤城山と柳久保遺跡群



2. 下鶴谷遺跡出土の鶴ヶ島台式土器

柳久保遺跡群の位置（九印）



1:200,000 宇都宮

0 5 10 15 20 キロメートル

例　　言

1. 本報告書は、前橋工業団地造成組合（管理者　清水一郎）が造成する城南住宅団地に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は下記の通りである。

柳久保遺跡群（やなぎくぼいせきぐん）下鶴谷遺跡（しもつるがいせき）
群馬県前橋市荒子町字下鶴谷1480-2他
3. 発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が前橋工業団地造成組合と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。

昭和60年度 担当者 関根和夫、福田瑞穂、関根吉晴、前原 豊
期　間 昭和60年7月15日～昭和60年11月5日

昭和61年度 担当者 千田幸生、肥田順一
期　間 昭和61年5月12日～昭和61年12月15日
4. 本書の作成は以下の通りである。

編　　集 関根吉晴・前原 豊

本文執筆 関根吉晴…Ⅰ章、前原 豊…Ⅱ～Ⅷ章

レイアウト 前原 豊

挿図作成 阿部シゲ子 石田博子 小管将夫 高橋キヨ子 渡木秋子 巾子恵子
茂木 順 本木みのる 吉田松江 株式会社バスコ 株式会社せらび企画

遺物写真 小椋写真事務所 株式会社せらび企画

空中写真 国際航業株式会社

遺跡測量 株式会社 調設

5. 石器石材の同定は飯島静男氏（群馬地質研究会員）の手をわざらわせた。
6. 発掘調査後の遺物、図面整理は昭和61年1月5日から昭和61年3月25日まで断続的に行い、報告書の作成は昭和62年5月1日から昭和62年9月30日まで行った。
7. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護室収蔵庫で管理されている。
8. 本発掘調査ならびに本書の作成にあたり、下記の機関、諸氏よりご助言をいただきました。
ここにお礼を申し上げます。（敬称略）

群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋工業団地造成組合

井川 達雄 石井 克巳 石坂 茂 市毛三津子 植田 真 大塚 昌彦
織笠 昭 川島 雅人 小島 純一 小管 将夫 小林 達雄 坂爪 久純
大工原 豊 武田 耕平 手塚 孝 中東 耕志 能登 健 松村 和男
松本 保 増田 修 巾 隆之 若月 省吾

凡　　例

1. 本調査は遺跡全体に 4×4 m グリッドを設定し、南北を X 軸とし、東西を Y 軸として X100、Y100 といった呼称を用いた。各グリッドの名称は北西隅をあてた。また、X100、Y175 グリッドの国家座標上の位置は次のとおりである。

座標系番号 IX X 軸+42.2km

Y 軸-60.0km

2. 採図中に使用した方位は座標北である。

3. 口絵は、建設省国土地理院発行の20万分の1地形図(宇都宮)と採図に5万分の1地形図(前橋)をそれぞれ使用した。

4. 本遺跡の略称は次の通りである。

下鶴谷遺跡…60・61E 1

5. 各造構の略称は次の通りである。

J…縄文時代の住居址・JD…縄文時代の土坑・S…集石・D…土坑・W…溝跡
T…竪穴状造構・B…掘立柱建物址

6. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　集石…1/30、焼土跡…1/40、住居址・土坑…1/60、掘立柱建物址…1/80、
溝跡…1/400、全体図…1/1,000

遺物　　土器・石器…1/3、一部の石器…2/3、1/2、1/6、一部の土器…1/2、1/4

7. スクリートーンの使用は次の通りである。

遺構平面図　　焼土…点

遺物実測図　　繊維含有土器断面…点、石器使用痕…斜線、石器磨減痕…淡点

目 次

I 調査の概要	頁
1 調査目的	1
2 調査経過	1
3 遺跡の要約	1
4 層序	2
II 旧石器時代の遺物	3
III 縄文時代の遺構	
1 住居址	4
2 集石	7
3 焼土跡	8
4 土坑	8
IV 縄文時代の遺物	
1 土器	13
2 石器	21
V その他の時代の遺構と遺物	
1 土坑	29
2 掘立柱建物址	29
3 竪穴状遺構	30
4 溝	30
VI まとめ	
1 遺構	31
2 遺物	31
3 遺物分布	34
4 石器石材	35

図 版

卷首図版 1 赤城山と柳久保遺跡群

- PL. 1 下鶴谷遺跡全景
 3 J - 9号住居址
 5 J - 11号住居址
 7 J - 12号住居址
 9 J - 14号住居址
 11 J - 9・10号住居址出土の土器
 13 VII群土器
 15 J - 9・10・12~14号住居址出土の土器
 17 I・II群土器
 19 III群土器
 21 VII・VIII群土器
 23 IX群土器
 25 J - 9~13号住居址出土の石器
 27 尖頭器・石鏃
 29 打製石斧・磨製石斧
 31 スタンプ形石器

卷首図版 2 下鶴谷遺跡出土の縄文式土器

- PL. 2 住居址と土坑
 4 J - 10号住居址
 6 J - 11号住居址の壙設土器
 8 J - 13号住居址
 10 住居址・集石・土坑・包含層
 12 J - 11号住居址出土の土器
 14 IX群土器
 16 J - 11号住居址・土坑出土の土器
 18 II・III群土器
 20 IV・V・VI群土器
 22 VII群土器
 24 X・XI群土器
 26 J - 13・14号住居址・土坑出土の
 石器、ビエス・エスキュー
 28 スクレイバー・打製石斧・その他
 30 三角錐形石器
 32 磨石・特殊磨石・石皿

挿 図

	頁		頁
口絵1 柳久保遺跡群の位置		口絵2 柳久保遺跡群の位置図	
Fig. 1 下鶴谷遺跡標準土層図	2	Fig. 2 柳久保遺跡群調査経過図	38
3 柳久保遺跡群調査区域図	39-40	4 柳久保遺跡群周辺図	41
5 下鶴谷遺跡古墳時代~平安時代 遺構全体図	42	6 下鶴谷遺跡縄文時代 遺構全体図	43
7 J - 9・12号住居址	44	8 J - 10・13号住居址	45
9 J - 11・14号住居址	46	10 集石・焼土跡・掘立柱建物址	47
11 土坑	48	12 土坑	49
13 土坑	50	14 土坑	51
15 土坑・竪穴状遺構	52	16 溝跡	53
17 J - 9・10号住居址出土の土器	54	18 J - 11号住居址出土の土器	55

Fig. 19 住居址出土の土器	56	Fig. 20 J-11号住居址・土坑出土の土器	57
21 I・V・VI群土器	58	22 II群土器	59
23 II群土器	60	24 III群土器	61
25 III群土器	62	26 IV群土器	63
27 VII群土器	64	28 VIII群土器	65
29 VIII群土器	66	30 IX群土器	67
31 IX群土器	68	32 X群土器	69
33 X・XI群土器・土製円盤	70	34 住居址出土の石器	71
35 住居址出土の石器	72	36 住居址出土の石器	73
37 住居址・土坑出土の石器	74	38 尖頭器・石鏃	75
39 石鏃	76	40 石鏃	77
41 ピエス・エスキーユ	78	42 スクレイバー・その他	79
43 石匙	80	44 打製石斧類	81
45 打製石斧類	82	46 打製石斧類	83
47 打製石斧・磨製石斧・その他	84	48 三角錐形石器	85
49 三角錐形石器	86	50 三角錐形石器	87
51 三角錐形石器	88	52 三角錐形石器	89
53 三角錐形石器	90	54 三角錐形石器	91
55 三角錐形石器	92	56 スタンプ形石器	93
57 スタンプ形石器	94	58 磨石・凹石・敲石	95
59 磨石・敲石・特殊磨石	96	60 特殊磨石・スタンプ形石器	97
61 縄文時代包含層分布図	98	62 縄文時代包含層分布図	99
63 石器法量相関図	100	64 石器法量相関図	101

表

	頁		頁
Tab. 1 縄文式土器一覧	14	Tab. 2 住居址別縄文式土器一覧	14
3 縄文時代石器一覧	22	4 住居址別石器一覧	23
5 II・III群土器胎土の結晶片岩粒		6 主要石器の石材	34
含有率	32		
7 刺片の石材	35		

I 調査の概要

1 調査目的

本遺跡は、柳久保遺跡群の南西部に位置し、南東方向に緩やかに張り出す台地上に存在する。中央部を市道が横切っている。調査地は、市道北側で台地の東側部分である。台地の東側は、宮川の本谷があり、急な傾斜を呈し、北側は、宮川の支谷があり、崖となっている。頂上部は、南東方向に緩やかに傾斜している。昭和59年度に、城南住宅団地造成事業に伴い、試掘調査を実施した。その結果、本遺跡では、縄文時代前期を中心にして、早期・中期の遺物が多數検出され、集落跡の存在も予想された。また、奈良・平安時代の遺物も検出され、住居址等が存在すると考えられた。このことに基づき、昭和59年度、幹線道路部分を調査し、旧石器時代の石器、縄文時代早・前期の包含層を確認した。昭和60年度には、縄文時代の集石・草創期から後期にわたる包含層、歴史時代の住居址・土坑・溝・掘立柱建物址を確認した。昭和61年度には、縄文時代前期の住居址・集石・土坑・早期～後期の包含層、歴史時代の住居址・土坑・炭窯を確認した。

2 調査経過

遺跡群全体にわたる公共座標に基づく植杭を昭和58年度に実施してあるため、前回の調査方法と同様に遺跡の北西に原点を据えて全体を4mの碁盤目に区切るグリッド方式でおこなった。

調査は、バックフォーを用いて表土の除去を行い、軟質ローム上面を出した。この時点で古墳時代以降の遺跡を確認し、調査を実施した。また、縄文時代の遺物包含層は、土層観察用の畦を残し、移植ゴテ、ショレン等を使い人力で、硬質ローム上面まで掘り下げた。検出された遺構、遺物は、平面図、分布図等の記録を作成し作業を進めた。

発掘調査は、昭和60年7月～11月までと、昭和61年5月から6月、9月から12月まで行い、遺物整理は昭和61年1月から3月まで断続的におこなった。昭和62年5月から9月までの期間、本報告書の作成にあたった。

3 遺跡の要約

本遺跡で検出された遺構、遺物は、旧石器時代から歴史時代までである。要約すれば次の通りである。旧石器時代の遺物は尖頭器が2点検出されただけである。続く縄文時代の遺構には、前期前半の住居址3、同後半の住居址3、早期の集石3、早期～後期後半の土坑多数、がある。遺物には、表裏縄文、撚糸文、無文、条痕文、繊維縄文、諸磯式、藤坂式、加曾利E式、曾谷式、安行I式等の土器とそれらに伴う石器類がある。特に北関東の色彩を持つ草創期後半の三角錐形石器が量的にも多く検出された。弥生時代の遺構・遺物は確認されなかった。歴史時代における奈良・平安時代の遺構には、住居址6、炭窯7、溝3、竪穴状遺構1、掘立柱建物跡1・土坑8

I 調査の概要

があり、遺物には土師器、須恵器が検出されている。歴史時代の遺構・遺物の報告については、大半が『柳久保遺跡群IV』(1986)に掲載されている。

4 層序

1の冒頭に記した様に、本遺跡は、頂上部から東側中腹までは緩やかに傾斜し、中腹から裾部にかけて急な傾斜をする地形である。この台地の沖積地との比高差は、6~7mであり、遺跡地は、110~103mの標高を測る。頂上部から傾斜地にかけて全体的に縄文時代包含層が確認された。

表土を剥ぐと、軟質ローム層が現われ、歴史時代に構築された住居址、土坑、溝等が検出される。縄文時代の遺構・遺物は、この段階で軟質ローム層上面で確認されるものも若干あるが、軟質ローム層~硬質ローム層にかけての間に存在するものが殆んどである。特に、遺構においては軟質ローム層上面での存在の確認は困難である。このため、遺構の検出は、硬質ローム層上面まで掘り下げて確認調査をした。遺跡の地層は、比較的わかりやすく堆積している。層序は次の通りである。

- I 層 にぶい黄褐色粗砂層。耕作土層。As-A、As-Bを主体的に含む。
- II 層 黒褐色粗砂層。粘性を僅かに有し、軟らかいが縮まっている。As-Cを20~30%含む。
- III 層 褐色細砂層。粘性を有し、軟らかいが縮まる。テフラは入らない。ローム土が50%以上含まれる。
- III a 層 黄褐色軟質(ソフト)ローム層。粘性を有し、軟らかいが縮まっている。均一な層である。縄文時代包含層であるが、時期別に層位で分離できない。古墳時代以降の遺構はこの層で確認されるが、縄文時代の遺構はIV層まで下げないと確認できない。
- III b 層 黄褐色軟質ローム層。粘性を有し、軟らかいが縮まっている。暗褐色土のブロックを半分近く含む層である。この層からは、殆んど縄文時代の遺物は出土しなくなる。
- IV 層 黄褐色硬質(ハード)ローム層。上部にAs-YPと思われるブロック、層中にAs-SPを霜降り状含む。粘性、縮まりともあり。
- V 層 黄褐色硬質ローム層。As-BPが全体的にはいるが、下部に純層をブロックで含む。
- VI 層 黄褐色硬質ローム層。

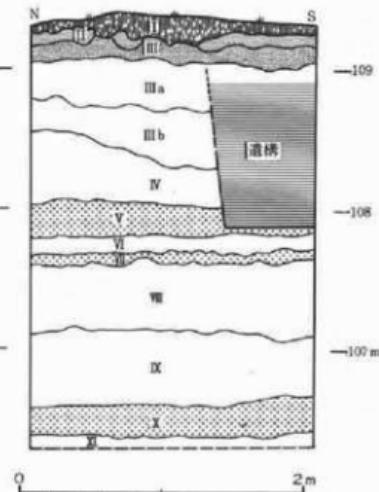


Fig. 1 下鶴谷遺跡標準土層図

- VII 層 明黄褐色微砂層。風化土壤。粘性を有し、締まりは弱い。広域テフラATが入るものと考えられる。
- VIII 層 暗褐色ローム層。暗色帶。粘性が強く、締まりあり。
- IX 層 明黄褐色硬質ローム層。粘性、締まりとも極めて強い。
- X 層 明黄褐色軽石層。Hr-HP。テフラは3層に分けられる。
- XI 層 深褐色粘土層。マンガン、鉄分塊が入る。非常に粘性の強い締まっている土層。

II 旧石器時代の遺物

本時期に該当すると考えられる石器はすでに「柳久保遺跡群Ⅰ」で報告した硬質頁岩の「植刃」と考えられるものと、今回報告する尖頭器1点のあわせて2点だけである。

尖頭器 (Fig. 38)

先端部と基部を僅かに欠損している。残存長3.7cm、幅2cm、厚さ0.8cm、重さ4.9gを計る。表面全体に調整剝離を行った後に周縁に細部調整を施し、木葉形の形態に整えている。石材は縞状を呈した乳白色の黒曜石製で、気泡のない良質な素材を用いている。X102、Y165グリッド、III a層出土。

III 繩文時代の遺構

本遺跡の全体図はFig. 5、6に示した。Fig. 5の遺構全体図は歴史時代を中心とした時期の所産であり、「柳久保遺跡群Ⅳ」に大方の部分が報告されている。残っている遺構に関してはV章で取り扱った。

繩文時代の遺構全体図はFig. 6であり、Fig. 61、62に土器・石器の包含層遺物分布図を掲載したので両者を併せて参照していただきたい。遺構の検出面であるが、繩文時代の遺構とその後の時代のものでも全体層序 (Fig. 1) I・II層が薄いためIII層面直上で確認がなされる。強いて説明すれば、繩文時代より新しい遺構がII層最下部からIII層直上面で検出でき、繩文時代の遺構がソフトローム層であるがIII a～III b層で確認でき、なかにはIV層面まで達しないと検出できないものも存在する。ソフトローム層であるIII a層が赤城南麓では繩文包含層となっており、この層位から繩文時代の各時期の遺物が混在した状態で検出される。

調査の結果、本遺跡からは繩文時代に所属する、数多くの遺構と遺物が発見された。遺構は、住居址6軒、集石3基、土坑62基、焼土跡2基が検出された。遺構分布をみると住居址はY170ラインより南の平坦な面に集中している。土坑は大きく6ブロックにまとまる。住居址周辺に2ブロックの集中をみるほか、北側2ブロック、南に張り出した部分に2ブロック存在する。

また、南端ブロックからはいわゆる「陥し穴」といわれる土坑や、炉穴と類似する土坑が出土

III 繩文時代の遺構

しており、注意を要する。

集石の分布は109~110mの高所に3遺構がまとまって存在する。また焼土跡2基は南側突出部に認められた。これらの遺構分布と土器分布図を見比べてみると多くの部分で一致をみている。

1 住居址

検出された6軒の住居址の名称は歴史時代の住居址が8軒存在していたため9号から名称を付けた。このうちJ-9~11号住居址の3軒からはⅣ群土器の竹管文系土器群がまとまって出土している。また、J-11~13号住居址の3軒からはⅦ群土器である繊維繩文系土器群がみられる。このことから前者が諸磯a式期、後者が花積下層式期に位置づけられ、大きく2時期に分けられる。

J-9号住居址

拵 図 Fig. 7 写 真 PL. 3・10
位 置 X103・104, Y176・177 グリッドに所在する。

確認面 全体層序Ⅲa層の面で検出された。
形 状 南北に長軸をもち、隅の深い長方形を呈する。四壁はやや膨らみながら、壁は傾斜をもって立ち上がる。長軸4.3×短軸3.8mを測る。

面 積 14.3m² 方 位 N-21° -W
床 面 ローム土を50~60cm掘り込んで床面としている。ほぼ平坦に形成されており、踏み固めが全体にわたって認められた。

炉 址 中央部の北壁寄りに位置する。長径77×短径62cmの楕円形を呈する。北端にfig. 17のJ-19、2の口辺と底部を欠損した深鉢形土器を正位に埋設して炉に利用している。

掘り方の規模は径45×深さ45cmである。炉内からは焼土・炭化物は南側にまとまっており埋設土器の中からはあまり検出されなかった。

柱 穴 4個検出された。全体的にその配列に規則性がみられ、壁際に設置されている。各柱穴の規模は、P₁・径42×深さ60cm, P₂・径35×深さ48cm, P₃・径27×深さ52cm, P₄・径27×深さ52cmである。

遺 物 Fig. 17で示した2点のうち2は炉内埋設土器である。1はほぼ完形となった深鉢形土器で北壁中央の位置から床面上15cmで出土している。この他の遺物はFig. 19・34・38・41に示した。量的には土器122点、石器78点と少ない。

備 考 出土遺物から本住居址の所属時期はⅣ群土器である諸磯a式期に位置づけられる。

J-10号住居址

拵 図 Fig. 8 写 真 PL. 4・10
位 置 X93・94, Y177~179グリッド。

確認面 繩文時代遺物包含層である全体層序Ⅲa層中で検出された。

形 状 コーナー部に丸味を持ち、東壁が張り出す方形プランを呈する。長軸4.7×短軸4.6mを測る。壁は傾斜をもって立ち上がる。
面 積 17.3m² 方 位 N-62° -W

床面 ローム層を40~50cm掘り込んで床面としている。平坦で踏み固めは全体に認められた。

炉址 確認されなかった。

柱穴 5個検出された。その配列に規則性が認められ、P₁を中心と線対象に並ぶ。各柱穴の規模はP₁・径30×深さ48cm、P₂・24×深さ38cm、P₃・径21×深さ59cm、P₄・径29×深さ29cm、P₅・径30×深さ48cmでP₆を除いて他は40cmを超す深さを有するしっかり

J-11号住居址

挿図 Fig. 9 写真 PL. 6・10
位置 X93.94、Y179.180グリッド。

確認面 繩文時代遺物包含層である全体層序IIIa層中である。

形狀 西壁が広がる方形プラン。四壁は直線的に延び、コーナーが円く作出される。壁は緩い傾斜でもって立ち上がる。長軸4.7×短軸4.4mを測る。

面積 17.8m² 方位 N-3°-E

床面 ローム層を40~50cm掘り込んで床面として形成されている。埋設土器と炉址付近を中心に踏み固めが認められた。

炉址 北壁中央寄りに地床が確認された。長軸70×短軸30cmの範囲から焼土が検出された。

柱穴 6個検出された。北側と南側にそれぞれ3個ずつに分かれる。各柱穴の規模は、P₁・径36×深さ22cm、P₂・径44×深さ15cm、P₃・径55×深さ19cm、P₄・径24×深さ30cm

J-12号住居址

挿図 Fig. 7 写真 PL. 7

位置 X103.104、Y170.171グリッド。

確認面 繩文時代包含層の下面である全体層

したものである。

埋設土器 北端に1個検出された。[Fig. 17-J-10、1]の深鉢形土器で底部を欠損した口径22cmを測る。正位に埋設されており、口縁部をわずかに欠損している。

遺物 本住居址からは土器片が781点出土した。これらの内訳はⅧ群土器9点、残りの771点とⅨ群土器が占めている。

備考 出土遺物から本住居址はⅨ群土器である諸磯a式期に位置づけられる。

P₅・径20×深さ10cm、P₆・径40×深さ15cmである。

埋設土器 北西部に三個体が縦列して認められた。北西より1~3号とし、1号には自然石が1個置かれており、径21cmの底部と欠いた深鉢形土器(Fig. 18-3)が埋設される。2号も同様に底部を欠いた深鉢形土器(Fig. 18-2)が用いられ、3号には底部方向から焼成後の穿孔を受けた台付鉢形土器(Fig. 18-1)が正位で用いられていた。

遺物 出土した土器点数は総数で586点である。Ⅸ群土器が569点、Ⅷ群土器が17点と圧倒的にⅨ群で構成されている。石器は総数53点と少なく、石蹴1、打製石斧2と構成される器種も少ない。

備考 出土遺物からみて本住居址の所産時期はⅨ群土器である諸磯a式期に位置づけられる。

序IIIb層であるソフトローム層で検出。

形狀 コーナーが円く作出される長方形プラン。壁は緩く傾斜をもって立ち上がる。長

III 繩文時代の遺構

軸4.7×短軸3.7mを測る。

面積 16.1m² 方位 N-63° - W
床面 ローム層を20~30cm掘り込んで西から東へ16cmほどの傾斜をもつ床面を形成している。踏み固めは炉址付近に若干認められたが、他は軟質であった。

炉址 中央部に位置する。径36cmの円形を呈する地床炉である。炉の掘り込みは5cmであり、炉内から焼土、炭化物がわずかに認められた。

柱穴 7個検出された。各柱穴の規模は、P₁・径29×深さ38cm、P₂・径32×深さ24cm、P₃・径25×深さ24cm、P₄・径26×深さ26cm、P₅・径31×深さ24cm、P₆・径36×深さ58cm

J-13号住居址

挿図 Fig. 8 写真 PL. 8

位置 X98-99、Y175-176グリッドに所在する。

確認面 本住居址とJ-14号住居址はIIIa、IIIb層面での検出は困難であったためハードローム層であるIV層上面で確認できた。

形状 コーナーが円く作出され北壁がやや突出する長方形プランを呈する。壁は緩く傾斜をもって立ち上がる。長軸4.0×短軸2.9mを測る。

面積 9.7m² 方位 N-78° - E
床面 ローム土を20~30cm掘り込んで床面としている。西から東へ約10cmの傾斜をもち東側が低くなっている。全体にわたって堅ちは存在せず、軟質な床であった。

炉址 存在しなかった。

J-14号住居址

挿図 Fig. 9 写真 PL. 9

位置 X100-101、Y176-177グリッドに所

P₇・径28×深さ22cmである。各柱穴は全体的に配列に規則性は見られないが、P₁、P₃、P₅、P₇の組み合わせはやや規則性が認められる。

遺物 土器の総点数はⅤ群土器26点と少ない。それに比べ石器点数は136点と前記の住居に比べると倍近い点数である。器種別の内訳を見ると石鎚1、ビエス・エスキーエ5、石匙1等があげられる。

備考 出土遺物からみて本住居址の所属時期はⅤ群土器であり、Fig. 19、J-12、1~3の土器から前期初頭花植下層式期に位置づけられる。

柱穴 5個検出された。全体的に規則的な配置は認められず、深さも一様でなかった。各柱穴の規模はP₁・径55×深さ29cm、P₂・径28×深さ16cm、P₃・径28×深さ23cm、P₄・径33×深さ59cm、P₅・径40×深さ27cmであった。

遺物 土器は総数16点と少なく、絶てⅤ群土器であった。Fig. 19に図示した3点が主だったものである。石器は総数106点と多い。主だった器種は、ビエス・エスキーエ3、打製石斧1、凹石2、磨石2があげられ、押型文土器に特有とされる特殊磨石が3点出土している事は注目に値する。

備考 出土遺物からみて本住居址の所産時期はⅤ群土器であり、図示した遺物から前期初頭花植下層式期に位置づけられる。

在する。

確認面 J-13号住居址と同様にソフトロー

ム層面での検出は困難であったためハードローム層であるIVの層上面で確認された。

形 状 コーナーが円く作出され各辺がやや張り出した長方形プランを呈する。壁は緩く傾斜をもって立ち上がる。長軸3.4×短軸2.6mを測る。

面 積 7.7m² 方 位 N-66° -W
床 面 ローム土を30~40cm掘り込んで床面としている。ほぼ平坦に形成されており、北側部分に座敷面が認められた。

炉 址 存在しなかった。

柱 穴 2個検出された。それぞれの柱穴の規模は、P₁・径32×深さ27cm、P₂・径35×

深さ32cmであった。

遺 物 本住居址から出土した土器もJ-12・13号住と同様に少なく総数24点である。内訳をみるとIV群土器1、Ⅴ群土器18、Ⅵ群土器5であり、Fig.19に表示したものが主だったものである。石器は総数183点と住居址の中では最も多い。主だった器種は、石鏃3、ビエス・エスキュー8、石匙1、打製石斧2、石皿1、凹石2、磨石2であった。

備 考 本住居址の所産時期からみてⅣ群土器であり、図示した遺物から前期花積下層期に比定できる。

2 集 石

集石は、本遺跡において3基検出された。3基とも調査区の中央西側にまとめて所在し、標高109~110mの等高線内の平坦で高まった位置に立地している。Fig.61で示した土器分布図のIV群あるいはIII群土器の集中分布と一致をみることから早期前半無文系土器の時期との関連窓がえる。礫は拳大から人頭大まで様々で、集中の度合、赤化の状態にも、かなりの多様性が見られている。下部に土坑が検出されたのはS-3号集石だけであるが、構築層位がIII a層であるソフトローム土であるため、板に縦てに掘り方があったとしても検出が困難なため見落としている事も考えられる。

3基のうちS-1号集石については、「柳久保遺跡群I」すでに報告している。

S-2号集石 (Fig. 10)

位 置 X96、Y177グリッドに所在。

形 状 蝉石安山岩(粗粒)円礫5個で構成される。礫は径15cm程で礫表面に赤化が認められた。

掘り方 下部を精査したが、認められなかつた。

遺 物 認められなかった。

S-3号集石 (Fig. 10、PL. 10)

位 置 X93、Y167グリッドに所在。

形 状 蝉石安山岩(粗粒)の円礫37個で構成されている。礫は径7~30cm程の大きさで赤化しており、破碎礫は少なくなかった。

掘り方 磬に伴って楕円形の浅い土坑が存在する事が判明した。規模は長径227×短径187cm、深さ36cmであり、礫のまとまりと一致。

遺 物 出土はみられなかった。

III 繩文時代の遺構

3 焼土跡

調査区の南に突出した区域から2ヶ所焼土跡が検出された。他の遺構に付随するものと考えられないため焼土跡として扱った。包含層の遺物分布からみるとII・III群あるいはVII・IX群の時期のいづれかに該当しよう。

1号焼土跡 (Fig. 10)

位置 X113、Y182グリッドに所在。

形状 楕円形を呈し長径59×短径52cm、深さ15cmを測る。

2号焼土跡 (Fig. 10)

位置 X133、Y186-187グリッド。

形状 楕円形を呈し長径44×短径31cm、深さ15cmを測る。

4 土坑

検出された土坑の総数は62基と多数にのぼる。大きく6ブロックに分かれ、他の遺構と同様に包含層の遺物分布と関連が認められる。北端に位置するJD-17-19号土坑はX群土器の分布域と一致し、19号からは18点のIX群土器が出土している。また、南端突出部に所在するJD-45-46号土坑からはII・III群土器が出土しており包含層の遺物分布とも一致をみている。JD-45号土坑は「陥し穴」と称されるものであり、JD-46号土坑は焼土の堆積がみられることから「炉穴」と考えられる。住居址周辺から検出された土坑からはVII・IX群土器が認められた。以上のことから時期断定できるものは少ないが、大まかにII・III群、VII・IX群、XI群土器の時期、すなわち早期前半、早期末葉から前期前半、後期後半の時期に多くが形成されたことといえる。また、62基の土坑が總て人為的行為に基づくものとは肯定できない。一つには、土層判別の困難なことに帰因している。

JD-1号土坑 (Fig. 13)

位置 X116、Y178-179グリッド。

形状 不整形。長軸135×短軸53cm、深25cmを測る。

遺物 認められなかった。

JD-3号土坑 (Fig. 11, PL. 10)

位置 X93-94、Y178グリッドに所在。

形状 円形。長径126×短径97cm、深さ45cm。壁は、西側が袋状を呈する。J-10号住居址と重複する。重複するか新旧関係は不明。

JD-5号土坑 (Fig. 11)

位置 X101-102、Y170-171グリッド。

形状 円形。長径115×短径103cm、深さ55

JD-2号土坑 (Fig. 13)

位置 X111、Y176グリッドに所在する。

形状 楕円形。長径63×短径49cm、深さ20cmを測る。

遺物 認められなかった。

JD-4号土坑 (Fig. 11)

位置 X93-94、Y177-178グリッド。

形状 楕円形。長径179×短径100cm、深さ125cmを測る。J-10号住居址により切られている。

JD-6号土坑 (Fig. 11)

位置 X101-102、Y117-178グリッドに所在する。

cm。

遺 物 VII群土器 7 点、IX群土器 2 点出土。
この他にスクリイバー 1、剥片 6、自然砾 1
が出土した。

J D - 7号土坑 (Fig. 11)

位 置 X101・102、Y175グリッド。

形 状 円形。長径 88×短径 86cm、深さ 35cm
を測り、平面形・断面形とも整備な形である。
備 考 歴史時代住居址 H-6 に切られる。

J D - 9号土坑 (Fig. 11)

位 置 X105、Y176グリッド。

形 状 円形。長径 106×短径 104cm、深さ 34
cm。傾斜を有する底面をもつ。

遺 物 認められなかった。

J D - 11号土坑 (Fig. 11)

位 置 X106、Y175グリッド。

形 状 不整形。長径 110×短径 87cm、深さ 44
cm。

遺 物 VII群土器 4 点、剥片 1、自然砾 1。

J D - 13号土坑 (Fig. 11)

位 置 X101、Y175グリッド。

形 状 楕円形。長径 106×短径 91cm、深さ 67
cm を測る。西側にむかって開いており、底部
には段がみられる。

遺 物 検出されなかった。

J D - 15号土坑 (Fig. 11)

位 置 X95、Y167グリッドに所在。

形 状 楕円形。長径 164×短径 110cm、深さ
36cm。

遺 物 III群土器 1 点出土。

J D - 17号土坑 (Fig. 11)

位 置 X104、Y163グリッドに所在。

形 状 円形。長径 69×短径 59cm、深さ 35cm。
遺 物 IX群土器 1 点出土。

形 状 不整形。長径 241×短径 161、深さ 24
cm。

遺 物 VII群土器 1 点、IX群土器、この他に
剥片 22 点が出土。

J D - 8号土坑 (Fig. 11)

位 置 X103、Y174グリッド。

形 状 円形。長径 94×短径 84cm、深さ 39cm。
底面は平坦に作出される。

J D - 10号土坑 (Fig. 11)

位 置 X105、Y175グリッド。

形 状 円形。長径 104×短径 90cm、深さ 34
cm。底面は凹凸を有する。

遺 物 認められなかった。

J D - 12号土坑 (Fig. 11)

位 置 X102、Y175グリッド。

形 状 楕円形。長径 72×短径 53cm、深さ 17
cm を測り、西側が直線的に延びている。比較的、
平坦な底面をもつ。

遺 物 認められなかった。

J D - 14号土坑 (Fig. 11)

位 置 X97-98、Y169-170グリッド。

形 状 不整形。長径 200×短径 178cm、深さ
55cm。

遺 物 VII群土器 2 点、IX群土器 3 出土。こ
の他に剥片が 1 点出土。

J D - 16号土坑 (Fig. 11)

位 置 X101、Y167グリッド。

形 状 円形。長径 80×短径 72cm、深さ 31cm
を測り、壁は急傾斜をもって立ち上がる。

遺 物 認められなかった。

J D - 18号土坑 (Fig. 11)

位 置 X104、Y162-163グリッド。

形 状 円形。長径 91×短径 90cm、深さ 26cm。
遺 物 認められなかった。

III 繩文時代の遺構

JD-19号土坑 (Fig. 11, PL. 10)

位置 X104、Y164グリッド。
形状 円形。長径106×短径91cm、深さ62cm。
遺物 XI群土器18点出土。

JD-21号土坑 (Fig. 12)

位置 X109、Y174グリッドに所在する。
形状 不整形。長径116×短径93cm、深さ36cm。
遺物 石皿が1点出土。

JD-23号土坑 (Fig. 12)

位置 X100・101、Y175グリッド。
形状 楕円形を呈する袋状。長径140×短径124cm、VII群土器3点出土。

JD-25号土坑 (Fig. 12)

位置 X103・104、Y178グリッド。
形状 円形。長径153×短径131cm、深さ46cmを測る。
遺物 VII群2点、VIII群16点、IX群1点出土。

JD-27号土坑 (Fig. 12)

位置 X101、Y174グリッド。
形状 円形。長径99×短径97cm、深さ47cmを測る。
遺物 VIII群土器1点を出土。

JD-29号土坑 (Fig. 12)

位置 X99・100、Y171グリッドに所在。
形状 円形。長径78×短径72cm、深さ19cmを測る。

JD-31号土坑 (Fig. 12, PL. 10)

位置 X95、Y175グリッド。
形状 袋状を呈する円形プラン。長径102

JD-20号土坑 (Fig. 12)

位置 X94・95、Y177グリッド。
形状 楕円形。長径196×短径83cm、深さ50cm。
遺物 記載されなかった。

JD-22号土坑 (Fig. 12)

位置 X101、Y178・179グリッド。
形状 楕円形。長径158×短径104cm、深さ41cm。
遺物 VII群土器1点出土。

JD-24号土坑 (Fig. 12)

位置 X102、Y178グリッドに所在する。
形状 楕円形。長径105×短径75cm、深さ28cmを測る。
遺物 記載されなかった。

JD-26号土坑 (Fig. 12)

位置 X103、Y178グリッドに所在する。
形状 楕円形。長径153×短径121cm、深さ43cm。
遺物 IV群2点、VII群土器1点出土。この他に石鏡3、ビエス・エスキュー5、スクレイバー1、剝片120、自然礫1点が出土。

JD-28号土坑 (Fig. 12)

位置 X99、Y173グリッドに所在する。
形状 円形。長径85×短径64cm、深さ22cmを測る。
遺物 スクレイバー(石匙)1点出土。

JD-30号土坑 (Fig. 12)

位置 X101、Y171グリッドに所在する。
形状 楕円形。長径100×短径80cm、深さ41cmを測る。

JD-32号土坑 (Fig. 12)

位置 X101、Y176グリッド。
形状 円形。長径92×短径90cm、深さ50cm

×短径90cm、深さ33cmを測る。

遺 物 刺片3点出土。

J D - 33号土坑 (Fig. 12)

位 置 X94、Y178グリッドに所在する。

形 状 円形。長径55×短径43cm、深さ40cmを測る。

遺 物 認められなかった。

J D - 35号土坑 (Fig. 12)

位 置 X104、Y177グリッド。

形 状 楕円形。長径138×短径120cm、深さ35cmを測る。

遺 物 III群土器1点、IV群土器2点出土。

この他に石鎌2、ピエス・エスキユ2、スクレイバー1、刺片45点が出土。

J D - 37号土坑 (Fig. 12)

位 置 X102・103、Y176グリッド。

形 状 円形。長径113×短径95cm、深さ33cmを測る。

遺 物 IV群土器1点刺片1点が出土。

J D - 39号土坑 (Fig. 13)

位 置 X112、Y175グリッドに所在する。

形 状 柱穴状の小円形土坑。長径29×短径27cm、深さ30cmを測る。他と比べて規模的に小さいため、疑問視される。

遺 物 認められなかった。

J D - 41号土坑 (Fig. 13)

位 置 X112、Y174グリッドに所在する。

形 状 柱穴状の小円形土坑。長径33×短径30cm、深さ23cmを測る。

遺 物 認められなかった。

J D - 43号土坑 (Fig. 13)

位 置 X114、Y186グリッド。

形 状 円形。長径103×短径87cm、深さ34cmを測る。

を測る。

遺 物 認められなかった。

J D - 34号土坑 (Fig. 12)

位 置 X94、Y178・179グリッド。

形 状 円形。長径74×短径69cm、深さ50cmを測る。

遺 物 IX群土器11点出土。

J D - 36号土坑 (Fig. 12)

位 置 X103・104、Y176グリッド。

形 状 長方形。長軸122×短軸66cm、深さ41cmを測る。底面に一段下がった円形の掘り込みを有する。

遺 物 認められなかった。

J D - 38号土坑 (Fig. 13)

位 置 X112、Y178グリッドに所在する。

形 状 柱穴状の小さな円形土坑。長径39×短径33cm、深さ43cmを測る。

遺 物 認められなかった。

J D - 40号土坑 (Fig. 15)

位 置 X116、Y185・186グリッド。

形 状 不整形。長軸378×短軸142cm、深さ57cmを測る。

遺 物 II群土器1点、III群土器11点の他に細片が7点、刺片が7点出土。

J D - 42号土坑 (Fig. 13)

位 置 X113、Y186グリッドに所在する。

形 状 柱穴状の不整形プラン。長軸59×短軸41cm、深さ24cmを測る。

遺 物 認められなかった。

J D - 44号土坑 (Fig. 13)

位 置 X111、Y175グリッドに所在する。

形 状 柱穴状の不整形プラン。長軸45×短軸43cm、深さ28cmを測る。

III 繩文時代の遺構

JD-45号土坑 (Fig. 13)

位置 X133、Y185グリッドに所在する。
形状 楕円形を呈する、いわゆる「陥し穴」と呼ばれる土坑。規模は長径220×短径109cm、深さ118cmを測る。底面からは柱穴状の小ピットは検出されなかった。

遺物 II群土器1点、III群土器7点、VII群土器1点が出土し、このうち主だったものをfig. 20に図示した。他に石器としては、剥片3点、自然礫2点が出土した。

備考 出土遺物の上限は早期前半にとらえられる。

JD-47号土坑 (Fig. 13)

位置 X110、Y175・176グリッド。
形状 楕円形。長径134×短径113cm、深さ28cmを測る。

JD-49号土坑 (Fig. 14)

位置 X112、Y117グリッド。
形状 円形。長径66×短径65cm、深さ21cmを測る。

JD-51号土坑 (Fig. 14)

位置 X113・114、Y117グリッド。
形状 楕円形。長径92×短径74cm、深さ21cmを測る。

JD-53号土坑 (Fig. 14)

位置 X113、Y180グリッドに所在する。
形状 円形。長径41×短径36cm、深さ32cmを測る。

JD-55号土坑 (Fig. 14)

位置 X113、Y180グリッド。
形状 柱穴状の楕円形プラン。長径50×短径37cm、深さ24cmを測る。

JD-46号土坑 (Fig. 14)

位置 X112、Y187グリッドに所在する。
形状 楕円形。規模は長径203×短径151cm、深さ12cmを測る。W-3号溝に切られている部分に焼土が溝54×厚さ2~3cm程見られた。焼土のあり方から炉穴と考えられる。

遺物 II・III群土器がそれぞれ1点づつ出土し、打製石斧1点の他、剥片が37点ほどまとめて認められた。

備考 出土遺物から早期前半の所産といえる。

JD-48号土坑 (Fig. 14)

位置 X112、Y175・176グリッド。
形状 楕円形。長径231×短径119cm、深さ18cmを測る。

JD-50号土坑 (Fig. 14)

位置 X113・114、Y176グリッドに所在する。
形状 不整形プラン。長軸211×短軸76cm、深さ58cmを測る。

JD-52号土坑 (Fig. 14)

位置 X112、Y178グリッドに所在する。
形状 不整形プラン。長軸166×短軸157cm、深さ63cmを測る。

JD-54号土坑 (Fig. 14)

位置 X113、Y180グリッドに所在する。
形状 不整形。規模は長軸59×短軸50cm、深さ18cmを測る。

JD-56号土坑 (Fig. 14)

位置 X114、Y181グリッド。
形状 円形。長径50×短径47cm、深さ37cmを測る。

JD-57号土坑 (Fig. 14)

位置 X113・114、Y181グリッド。

形状 不整形。長軸144×短軸71cm、深さ33cmを測る。

JD-59号土坑 (Fig. 14)

位置 X115・116、Y181グリッド。

形状 不整形。長軸66×短軸41cm、深さ47cmを測る。

JD-61号土坑 (Fig. 14)

位置 X122、Y185グリッド。

形状 円形。長径92×短径87cm、深さ33cmを測る。

JD-58号土坑 (Fig. 14)

位置 X113、Y182グリッドに所在。

形状 楕円形アラン。長径89×短径67cm、深さ27cmを測る。

JD-60号土坑 (Fig. 14)

位置 X115、Y181・182グリッド。

形状 楕円長方形。長軸101×短軸96cm、深さ32cmを測る。

JD-62号土坑 (Fig. 14)

位置 X113、Y187グリッドに所在する。

形状 円形。規模は長径76×短径66cm、深さ29cmを測る。

IV 繩文時代の遺物

1 土 器

本遺跡から出土した縄文式土器は草創期から後期にわたる次のようない11群がある。

I群土器 草創期表裏縄文系土器群

II群土器 草創期後半撚糸文系土器群

III群土器 早期前半無文系土器群

IV群土器 早期前半無文纖維系土器群

V群土器 早期前半貝殻沈線文系土器群

VI群土器 早期前半押型文系土器群

VII群土器 早期後半条痕文系土器群

VIII群土器 早期末葉～前期前半纖維縄文系土器群

IX群土器 前期後半竹管文系土器群

X群土器 中期、勝坂式土器群、加曾利E式土器群

XI群土器 後期、曾谷式土器、安行I式土器群

調査された12,000m²の区域からの出土総数は9,583片で、そのうち包含層からは、7,829片、遺構覆土内から1,754片が出土している。包含層から出土したもののうち出土量が多いのは、IX群土器とIII群土器で、分類不能な細片などを除いた6,640片の内訳では、IX群土器が3,130片(47.1%)、III群が1,161片(17.5%)、を占めている。

一覧表に示した集計は3ヶ年次にわたる調査によって検出されたものであり、第1年次につい

では、すでに「柳久保遺跡群I」に報告されているので、併せて御覧いただきたい。

また、「柳久保遺跡群I」での1群を本報告書ではV群、2群をIII群、IV群、VI群に分け、3群をVII群として集計した。

(1) 遺構出土の土器

J-9号住居址 (Fig. 17-19, PL. 11-15)

本住居址からは122片の縄文式土器が出土した。内訳はV群土器2片、VII群土器27片、IX群土器78片、不明15点である。このうち、図上復元できたのは、深鉢2点である。

17-1はIX群土器の深鉢である。器形は4単位の大波状口辺で構成される。口辺の頂部には刻みが各々施される。文様は単節斜行縄文RLが施される。橙色をなし、4/5残存。

17-2もIX群の深鉢土器である。文様は単節斜行縄文RLによって構成される。炉内埋設土器として使用された。色調は淡赤橙で3/5残存。胴部中位に煤の付着がみられる。

このほかに図示したものは19-1と3がVII群2類、2がVII群7類、4がVII群5類、5がIX群3類である。

J-10号住居址 (Fig. 17,

PL. 11-15)

本住居址からは合計803点の縄文式土器が検出された。内訳はV群土器1点、VII群土器9点、IX群土器771点、不明22点である。

17-1はIX群6類の深鉢である。

平口縁で、口辺に間隔をおいて二条

連続爪形文が施文される。それ以下はRLの細縄文が横位に施文される。爪形文の間には縄文は施文されない。橙色の内面研磨の行き届いた土器であり、2/3残存。埋設土器。

17-2はIX群6類の浅鉢である。平口縁を呈し、口辺に間隔をおいて二条連続爪形文が施される。胴部にはRLの縄文が横位に施文される。明黄橙の色調であり、1/2残存。

Tab. 1 縄文式土器一覧

分類	包含層 点数	遺構 点数	合計	割合
I群 表裏縄文	24	0	24	0.3
II群 然舟文	303	7	310	3.2
III群 無文	1,161	33	1,194	12.48
IV群 無文縦縫	447	6	453	4.7
V群 沈縫文	54	0	54	0.6
VI群 円型文	2	0	2	0.02
VII群 斜痕文	346	9	355	3.7
VIII群 織維縄文	766	159	925	9.7
IX群 竹管文	3,130	1,454	4,584	47.8
X群 縄文中期	86	0	86	0.9
XI群 縄文後期	321	19	340	3.5
不明	1,189	67	1,256	13.1
合計	7,829	1,754	9,583	100%

Tab. 2 住居址別縄文式土器一覧

分類	J-9	J-10	J-11	J-12	J-13	J-14	合計
V群 無文縦縫	2	1				1	4
VII群 織維縄文	27	9	17	26	16	8	113
IX群 竹管文	78	771	569			5	1,423
不明	15	22	20		1		58
合計	122	803	606	26	17	24	1,598

17-3~5は縄文施文の土器である。IX群の深鉢である。3はRLの縄文が施文され、淡黄をなし、2/5残存する。4は単節斜行縄文RLが施文される。色調は黄色で1/2残存。5もRLの縄文によって構成される。本土器の大部分は包含層出土のものであり、J-10号住居址・1片、J-11号住居址・5片、JD-34号土坑・4片、包含層63片の73片で構成される。赤色をなし2/5残存。

このほかに図示したものはほとんどはIX群土器であるが、1・20がVII群土器である。1はVII群6類に分類した土器で繊維を含み櫛齒状工具によって刺突文と条線が描かれる。交点上に円孔が施される。3・16は円形刺突文が口縁に平行して連続的に施文される。6・7・9・10は木の葉文が施文される。4・8・11・14・15は口縁に平行する連続爪形文がみられる。17・18は竹管文でユニオンジャック状に文様が施文される。19は横走する平行線文である。21には円孔がみられる。2・12・13・20・22~25は縄文施文の土器である。20はVII群土器であり繊維混入がみられ0段多条の縄文が羽状構成をとり、円形竹管文がみられる。

J-11号住居址 (Fig. 18-20, PL. 12)

本住居址からは总数606点の縄文式土器が検出された。内訳はVII群土器17点、IX群土器569点、不明20点である。このうち図上復元できたのは、6点である。

18-1はIX群の台付鉢である。無文であり、内外面とも横位の窪磨きが施される。赤橙色なし7/8残存。埋設土器であり、底部に焼成後に内面方向からの穿孔がある。

18-2はIX群の深鉢である。口唇部の刻みは半截竹管を外側から内側に刺突して作出。文様はRLの縄文。色調はよい橙色で3/5残存。埋設土器であり、底部を欠損している。

18-3はIX群の深鉢である。4単位の緩い波状口縁をなし、RLの縄文が施文される。色調は淡黄緑色で2/5残存。埋設土器として使用された。

18-4はIX群の平口縁の深鉢で、LRの縄文が横位に施される。色調は赤橙色で1/6残存。

18-5はIX群の深鉢である。口辺と底部に櫛状工具による集合条線が入る。縄文はRLが乾燥の進んだ段階に施文される。口縁に浅い刻みが入る。色調は明赤褐色で3/5残存。

18-6はIX群の深鉢で波状口縁を呈すると考えられるが、不明。文様はRLの縄文が横位に施文される。色調は橙色で2/5残存。

このほかに図示したものにはJ-10と同様なVII群6類の土器が5点ある。それらは1~4と11である。11から類推すると櫛齒状工具で刺突文、条線がみられ肋骨文に似た文様構成が考えられる。交点上には円孔がはいる。5と7は連続爪形文、10・12は円管文が施される。6・8・9は縄文施文の土器である。

J-12号住居址 (Fig. 19, PL. 15)

本住居址からは合計26点の縄文式土器が検出された。内訳はVII群土器26点である。このうち図示したものは3点である。1・2は0段多条の2段の縄文が施文される。3は底底であり、条痕文がみられる。

J-13号住居址 (Fig. 19, PL. 15)

本住居址からは合計17点の縄文式土器が検出された。内訳はⅦ群土器16点、不明1点である。1・2は0段多条の縄文がみられる。3は条痕文である。

J-14号住居址 (Fig. 19, PL. 15)

本住居址からは合計24点の縄文式土器が検出された。内訳はⅣ群土器1点、Ⅷ群土器8点、Ⅸ群土器5点である。1は繊維がわずかに混入されるⅦ群5類の土器である。肋骨文が直線的に描かれる。2は縄文が施文された尖底土器である。内面は丁寧な撫でによって仕上げられている。

土坑 (Fig. 20, PL. 16)

土坑からは次の様な土器が出土している。

- J D-5号土坑 9点 (Ⅶ群7、Ⅸ群2)
- J D-6号土坑 3点 (Ⅶ群1、Ⅸ群2)
- J D-11号土坑 4点 (Ⅷ群4)
- J D-14号土坑 5点 (Ⅷ群3、Ⅸ群2)
- J D-15号土坑 1点 (Ⅲ群1)
- J D-17号土坑 1点 (Ⅺ群1)
- J D-19号土坑 18点 (Ⅺ群18)
- J D-22号土坑 1点 (Ⅶ群1)
- J D-23号土坑 3点 (Ⅷ群3)
- J D-25号土坑 19点 (Ⅶ群2、Ⅷ群16、Ⅸ群1)
- J D-26号土坑 3点 (Ⅳ群2、Ⅷ群1)
- J D-27号土坑 1点 (Ⅷ群1)
- J D-34号土坑 11点 (Ⅸ群11)
- J D-35号土坑 3点 (Ⅲ群1、Ⅷ群2)
- J D-37号土坑 1点 (Ⅷ群1)
- J D-40号土坑 19点 (Ⅱ群1、Ⅲ群11、不明7)
- J D-45号土坑 9点 (Ⅱ群1、Ⅲ群7、Ⅷ群1)
- J D-46号土坑 2点 (Ⅱ群1、Ⅲ群1)

以上のうちJ D-5号土坑の1・3・4は縄文施文の土器である。2は条痕文と縄文が併用される。J D-11号土坑の1は繊維が混入され表裏とも撫でによって仕上げられている。J D-14号土坑の1は0段多条の縄文が羽状構成に施文される。J D-19号土坑の1は無文である。表裏とも丁寧な磨きによって仕上げられている。2は斜めの沈線が描かれる。2点ともⅨ群土器である。J D-22号土坑の1は0段多条のR Lの縄文と原体押捺の縄文で羽状構成をとる。2は表が縄文と条痕が施文され、裏には条痕文がみられる。J D-25号土坑の1は突帯を有し縄文が施文

される。2は口唇に縄文が施文される。JD-34号土坑の1は単節斜行縄文がみられ、2には円管文がみられる。JD-35号土坑の1は口唇から口縁にかけて斜めの割みがはいる縄文施文の土器である。JD-45号土坑の1はRの捺糸文がみられ、2~5は無文土器である。2~5には丁寧な磨きがはいり、3~4は擦痕がみられる。

(2) 包含層出土の土器

I 群土器 草創期表裏縄文系土器 (Fig. 21, PL. 17)

本群は24点検出された。柳久保遺跡からも本群が検出され、柳久保遺跡では、統く井草式土器の出土もみられる。2を除いた他は、同一個体と考えられる。器形は平口縁の深鉢と考えられる。また、5の突起の存在から平縁に何単位かの小突起が付される。縄文は2段のLRと思われるが、3段の捺りもどしか太さの違う原体を捺り合わせていることも考えられる。口唇部にも2のように縄文が施文されるが、1~5・13はやや尖り施文されていない。内面は口縁下に一条のLRの縄文が横位に施文されている。それ以下は顕著に指頭圧痕がみられる。2の胎土に僅かに結晶片岩がみられた。色調は赤褐色を基調とし、明赤褐色、にぶい赤褐色である。

分布 ほとんどが同一個体に帰属し、南東部の径10m程の範囲にまとまって分布。

II 群土器 草創期後半捺糸文系土器群 (Fig. 22, PL. 17~18)

本群は303点検出された。器形を復元できるものが無いため口縁形態を中心に3類に分類した。

1類 口縁断面形態が肥厚するもの。(1~9・11~13・15・17・18・20・22・27・28)

2類 口縁断面形態が丸頭棒状のもの。(19~21・25・29)

3類 口縁断面形態が角頭棒状のもの。(10・14・16・23・24・26)

これら3類は文様施文でおのおの次ぎの2種に分けられる。

A種 単輪絡状体を回転施文するもの(2~4・11・15・16・20~22・25・27~29)

B種 単輪絡状体で条痕文とするもの(1・5~10・12~14・17~19・23・24・26)

器形は尖底で深鉢を呈する。文様は捺糸文Rで占められ、Lは存在しない。胎土に結晶片岩粒を含有するものが見受けられる。色調は明赤褐色、にぶい黄褐色、橙色、黒褐色、明黄褐色と多岐にわたるが、にぶい黄褐色と赤褐色をなすものが大部分を占める。

分布 多くは南端突出部に集中する。その中でも調査区段南端に著しい集中をみせている。

III 群土器 早期前半無文系土器群 (Fig. 24~25, PL. 18~19)

本群は1,161点とII群土器に次いで多く検出された。復元できるものが無いためII群土器と同様に口縁断面形態で3類に分類でき、他に沈線を1条有するものが4類に分けられる。

1類 口縁断面形態が肥厚する。(3~7・14・22~27・31・33・35・37~39・

44・46・47・48・50・53~55)

2類 口縁断面形態が丸頭棒状のもの。(1・9・11・13・36・41・42・45・52)

3類 口縁断面形態が角頭棒状のもの。(2・8・10・12・28・29・30・32・34・40・43・49・51)

4類 口縁に1条沈線を有する。(15・16)

器形は深鉢で尖底を有する。II群の底部に比べやや先端が乳頭状に突出する。文様は無文を呈するが、調整に丁寧な施でかはいるものと、入らないものが存在する。胎土に結晶片岩を含有するものがII群土器よりも多くみられる。色調は、にほい黄橙色、赤褐色をなすものが大部分を占める。

分 布 1,161点出土しており、南端突出部に濃密分布がみられる。また、北側にも小範囲での集中がみられ前二者に比べ分布域の拡大が認められる。

IV群土器 早期前半無文繊維系土器群 (Fig. 26, PL. 20)

本群は447点と比較的まとまって出土している。文様のないことや口縁部片がないため一括して説明する。器形は深鉢と考えられる。「柳久保遺跡群I」の報告例から尖底と考えられる。口縁部に刻みが入るもの(5・8・9)、刺突が施されるもの(7・9)や丸棒状の断面形態をもつ(4)、尖る形態のもの(1・3・6)がみられる。文様は無文であるが、繊維の束を用いた様な擦痕状の条痕文がみられる。また、沈線も稀にみられる。胎土には大粒の砂や結晶片岩粒の混入がみられ繊維の混入が極めて僅か認められる。色調は明赤褐色を基調とし、赤褐色やにほい赤褐色がみられる。

分 布 I～III群土器とは全く分布域が異なり、西側中央部に著しい集中をみせる。集中地点は径15m程の狭い範囲である。集石との関連がみられる。

V群土器 早期前半貝殻沈線文系土器群 (Fig. 21, PL. 20)

本群は54点と量的に少ない。胎土、文様から次の2類に分けられる。

1類 口唇内面に刻みを有し、2本同時沈線で施文されるもの。(16～22・24・26・28・29)
口縁部の内面に刻み(16～19)を持ち口縁断面は尖り、やや外削ぎ状を呈する。文様は竹管や2本同時沈線でもって描出される。26は沈線による疑似貝殻腹縁文が施文される。28・29には円形の刺突がみられる。胎土は粗砂の混入はなく、緻密な胎土が用いられ器壁は3～5mmと薄く仕上げられている。色調で灰白色や明黄褐色を呈する。

2類 貝殻腹縁文と沈線文で構成される。(23・27)

23は貝殻腹縁文がみられる。沈線は2本構成されず1本引きの沈線と貝殻腹縁文で構成される。

2点ともわずかに繊維を含み、大粒の赤褐色鉱物を混和材としている。色調は2点とも暗赤褐色を呈する。

分 布 西側中央部と中央部にまとまりがみられる。IV群の分布域に似る。

VI群土器 早期前半押型文系土器群 (Fig. 21, PL. 20)

本群は2点検出されたにとどまる。いずれも横円押型文土器である。30は口縁部片であり、若干外傾している。口唇部に原体押捺がみられ、角頭状を呈する。色調は30が橙色、31は明褐色。

分 布 中央部と北東部にそれぞれ1点ずつ出土。

VII群土器 早期後半条痕文系土器群 (Fig. 27・28, PL. 13・21)

本群は346点検出された。有文土器と条痕文のみ施文された土器の2つに大きく分けられる。

1類 有文土器。(1・2~11)

A種 微隆起帶で文様構成されるもの。(27-1・7・9・10)

27-1は丸底の底部から胴部に明晰な段を有する大形の深鉢である。口縁部に6単位の突起がみられる。文様は胴部の段を境に上下2段の文様構成をとる。口唇部は中央くぼみ、やや外削ぎ状である。文様施文は貝殻条痕→微隆起帶→沈線→竹管による斜め下からの半円形刺突=口唇刻みという順序をとる。文様はAとAの反転文様であるBの2種で構成される。上段の構成が『A・A・B・A・A・B』の6区画である。下段区画は上段の1区画の1/2ずらした位置に構成され『A・B・A・B・A・B』文様区画が交互に配置される。それ以下は貝殻条痕文が施される。内面には全面にわたって貝殻条痕文が施文される。胎土は纖維を含むが量は少ない。硬い焼きの土器である。色調は明赤褐色を呈し、4/5残存。

7・9・10は基本的には1と同様な文様構成をもつ。胎土に金雲母を多量に混入する。

B種 沈線区画で文様構成されるもの。(2~5・8)

C種 沈線区画だけで構成されるもの。(6)

2類 条痕文が全面施文されるもの。(12~30)

A種 太い貝殻条痕文で構成されるもの。(12~25)

19は口縁部片であり口唇に範状工具で刻みがはいる。また、14・20も口縁部であるが刻みはみられない。明赤褐色を呈し、纖維の混入も少なく焼きが良くfig.27-1の個体に類似する。

B種 細い貝殻条痕文で構成されるもの。(26~30)

26~30は、同一個体である。口唇の外側に刻みが入る。纖維の混入は少なく、焼きが良く、黄褐色を呈する。

分布 346点の出土点数であるが、ほぼ完形となる深鉢が出土した。分布は中央部に径28mの空間を取り囲むかのようにみられる。空間を取り囲んで3ヶ所の濃密な集中地点がみられる。

VIII群土器 早期末葉~前期前半繩維縄文系土器群 (Fig. 29・30, PL. 21・22)

本群は766点検出された。纖維の混入量が増える点や縄文施文の有無によってVII群土器と区別した。

1類 表裏とも条痕文が施文されるもの。(1~5・8)

多量に纖維を含む点でVII群土器と区別されるが、一部はVII群土器との関係も考えられる。

2類 表に縄文が施文され、裏に条痕文がみられるもの。(6・7・10・13~15・19)

多量に纖維を含んでおり、質感は1類と共通する。縄文は0段多条が多用される。表には条痕文と縄文が併用されるものも存在する。

3類 表裏とも縄文が施文されるもの。(9・17・18)

表裏とも0段多条の縄文が多用され、羽状構成をとる。

4類 突帶を有するもの。(25~36)

基本的に内面は撫でによって仕上げられるが、条痕文が施文されるもの(25)もある。突帶上には刻みかはいるが、30・32はL.Rの単節斜行縄文が施文されている。

5類 有文土器 (52・53・55・56)

いずれも肋骨文が施文される。52・53は原体押捺で、55・56は6本歯の櫛齒状工具によって描出される。

6類 櫛齒状工具によって文様構成がなされるもの。(60~63)

4本歯の櫛齒状工具を器面にあてて4点1組の刺突文を描出する。この工具を引きずると細い条線ができる。刺突と条線で文様構成されている。

7類 縄文施文の土器(11・12・16・20~24・37~51・55・57~59・64)

織維多量にはいる分厚い土器と織維混入の少ない土器に分けられる。前者は0段多条が多用され羽状縄文がおおく、後者は無筋や單節斜行縄文が施文される。

分 布 766点出土の大部分は中央南側の径30mに集中する。分布はほぼ全域にわたるが、南側中央は当該時期の住居址3軒の分布と重複をみせる。

IX群土器 前期後半竹管文系土器群 (Fig. 31・32, PL. 14-23)

本群は検出された縄文式土器の中でも最も多く、3,130点を数え47.1%を占めている。本群は竹管文系土器群を扱ったが大部分は縄文施文の土器である。「柳久保遺跡群I」によれば有文：縄文は1:13の割合になる。ただ、有文土器の地文に縄文が施文されるため、厳密には区分できない。

1類 円管文を持つ深鉢である。(18・19・26)

円管文を持つもの(19)と円孔を持つ(18・26)に分けられる。

2類 いわゆる肋骨文を持つ深鉢である。(31-2・9・10・12・17・20-22・28・38)

竹管を用い肋骨文が直線気味に描かれるもの(28)と肋骨文が曲線的な構成をとるもの2種がある。後者のモチーフは櫛齒状工具で描かれる(9・10・12・17)と竹管によって描くもの(31-2・20・21・38)がある。

3類 半截竹管により英國旗であるユニオンジャック状の文様構成をとるもの。(13・15)

4類 竹管の平行線文や爪形文により鋸歯文や格子目の構成をとるもの。(31-3・3・6・7・8・11・13・15・23・27・30・36)

5類 木の葉文を持つ深鉢である。(5・15)

5は爪形文により文様構成をとり円形刺突文が施される。15は竹管による平行線文により構成。

6類 口縁部に2~3条の平行線間連続爪形文で文様構成。(31-1・1・2・4・24・34・40)

平行線間に地文のはいるものとはいらないものがある。波状口縁と平口縁のものがある。

7類 口縁部に竹管による横走平行線文を描く。(14・25)

8類 櫛齒状工具により平行線文や波状文を描く平口縁の深鉢である。(32)

9類 繩文施文の土器を一括する。(29・31・33・37・39)

単節斜行繩文R Lでもって大半が占められるが、撚糸文や結節もみられる。

分 布 全域に分布するが、大きく2地点に集中する。西側中央部の径30mの範囲と南側西部の径20mの範囲の分布である。南側西部の分布は同時期の住居址3軒と一致をみると、西側の分布は遺構との関係は認められない。

X群土器 中期、勝坂式土器群、加曾利E式土器群 (Fig. 33, PL. 24)

本群は86点検出された。大きく勝坂式土器と加曾利E式土器の2つに分けられる。文様を中心には4類に分類した。

1類 隆帯で文様区画する。勝坂式土器終末期。(1~5)

1~5は胎土・色調から同一個体である。いずれも明赤褐色を呈し、隆帯と沈線で文様構成され地文は無文である。

2類 隆帯で文様区画し、地文に繩文を持つ。加曾利E 3式土器。(7~12)

3類 沈線で文様区画し、地文に繩文を持つ。加曾利E 3式土器。(13)

4類 口縁に平行する沈線を有し、口縁部無文帶を持つ。加曾利E 3式土器。(6)

分 布 北側と南東部の2地点にまとまって分布する。1類は南地点にまとまるが2・3類は両地点に分布をみる。

XII群土器 後期、加曾利B式土器、曾谷式土器、安行I式土器群 (Fig. 33, PL. 24)

本群は321点と比較的まとまって出土した。文様で大きく5類に分類した。

1類 平行沈線による磨消繩文を持つ。加曾利B式土器。(17)

2類 口縁に平行する沈線とボタン状の貼付をもつ。加曾利B式~曾谷式土器。(14~17)

14~17とも同一個体。口縁がくの字状に内湾し、体部はほとんど直線的に底部に移行する鉢形。

3類 帯繩文を持つもので、波状の頂点に2個の突起を有する。安行I式土器。(18~20)

4類 羽状沈線文を持つ。(22~25)

22と24は同一個体の可能性もある。24の網代は「4本越え、4本潜り、2本送り」である。

5類 無文土器を扱う。(21~23・24)

6類 注口土器。(26)

分 布 北東部の径10mに著しい集中をみせる。本群に所属するJD-17~19号土坑の分布と一致。土製円盤 (Fig. 33, PL. 24) 3点検出された。いづれもIX群土器を用いたものである。

2 石 器

本遺跡から出土した石器は、旧石器時代のものを除いて、8,215点出土している。Tab. 3に示したが、このうち遺構覆土から1,063点出土しており、残り7,152点が包含層から出土した。今回、組成表をつくる上で器種認定の検討不足を否めない。例えば剥片としたものの中には、使用痕、

細部加工のある剥片や三角錐形石器の底面部の再生剥片や調整剥片が目立ったが分類を行っていない。

(1) 遺構出土の石器

J-9号住居址 (Fig. 34・38・41、PL. 25-27)

本住居址からは、石鏡1、ビエス・エスキュー7、礫器3、石核1、剥片65、自然礫1の合計78点が検出された。このうち図示したものは6点である。

石鏡は1類で重さ1.7gのチャート製である。Fig. 41-1~4はビエス・エスキューである。この中で1はビエス・エスキューというより付随する剥片と言ったほうが良いと思われる。3がメノウで他はチャートである。

Fig. 34-1・4・5は礫器であり、1が黒色頁岩、4が頁岩、5が黑色安山岩を用いている。2は黒色頁岩製のスクレイバー、3は黑色安山岩製の石核である。

J-10号住居址 (Fig. 38-41、PL. 25-27)

本住居址からは、石鏡1、スクレイバー1

礫器1、凹石1、多孔石1、剥片54、自然礫2の合計61点が出土した。石鏡は2類で重さ1.2gの黒曜石製である。

Fig. 34-1は黒色頁岩製の礫器、2も黒色頁岩製のスクレイバー、3が多孔石、4が凹石とともに輝石安山岩製である。

J-11号住居址 (Fig. 34-35-38、PL. 25-27)

本住居址からは、石器類は合計53点と少ない。その内訳は石鏡1、スクレイバー1、打製石斧2、礫器1、敲石1、石皿1、剥片29、自然礫16である。石鏡は黒曜石製で、深いえぐりがある。重さ0.7gである。石鏡2類に分類される。

Fig. 34-1は頁岩製の両刃の打製石斧であり、2は黒色頁岩製の打製石斧であり、刃部を欠損している。3は珪質頁岩製のスクレイバーである。4は輝緑岩製の敲石で周縁は敲き痕により磨滅している。表面とも敲痕が顕著に認められる。5は石皿と多孔石、6は礫器である。石材は

Tab. 3 縄文時代石器一覧

器種	区分	包含屑	遺構	合計	割合
		点数	点数		
石鏡		84	15	99	1.2
尖頭器		2	0	2	0.02
ビエス・エスキュー		148	37	185	2.3
スクレイバー		254	27	281	3.4
筆		58	1	59	0.7
打製石斧		67	8	75	1.0
磨製石斧		6	0	6	0.1
礫器		48	5	53	0.68
凹石		22	6	28	0.3
磨石		102	7	109	1.3
敲石		13	6	19	0.2
スタンブ形石器		27	1	28	0.3
特殊磨石		21	3	24	0.3
三角錐形石器		55	2	57	0.7
多孔石		1	1	2	0.02
石皿		8	3	11	0.1
石核		42	4	46	0.6
剥片		5,240	865	6,105	74.3
自然礫		1	1	2	0.02
ストーンリッチャード		2	0	2	0.02
礫		3	0	3	0.04
自然礫		948	71	1,019	12.4
合計		7,152	1,063	8,215	100%

5が輝石安山岩で、6が黒色安山岩製である。

J-12号住居址 (Fig. 35-38)

41-42、PL. 25-28)

本住居址からは石鎚1、ピエス・エスキーユ5、スクレイバー4、凹石1、磨石3、敲石2、石核1、剥片112、自然礫7の合計136点が出土した。石鎚は1類の平基無茎式チャート製、1.2gを計る。Fig.41のピエス・エスキーユはチャート製で4.0gを計る。Fig.42-1は黒色頁岩製のスクレイバーで表裏面から刃部の作出がなされている。Fig.35-1は黒色頁岩製のスクレイバー1、2も黒色頁岩製の石核、3・6が磨石、4・5が敲石、7が凹石、8が磨石と敲石である。3・4・6・8の石材は輝石安山岩であり、5・7は変質安山岩である。

J-13号住居址 (Fig. 36-37-41)

42、PL. 25-28)

本住居址からは、ピエス・エスキーユ3、スクレイバー6、打製石斧2、凹石2、磨石2、敲石1、特殊磨石3、石核1、剥片75、台石1、自然礫10の合計106点が検出されている。

Fig.41のピエス・エスキーユは2点ともチャート製で重さは1が3.8g、2が5.4gである。Fig.42のスクレイバーは黒色頁岩製である。

Fig.36-1・2・4・6がスクレイバー、3が石核、5は刃部欠損の打製石斧、7は片刃の打製石斧であり8・10・13が特殊磨石、9が敲石、11が凹石、15が磨石、12・14が磨石と凹石に利用されたものである。石材は黒色頁岩(1・3~7)、輝石安山岩(9・11・14)、石英閃綠岩(8)、黒色安山岩(2)、変質安山岩(10・12・13)である。

J-14号住居址 (Fig. 37-38-41、PL. 26-27)

本住居址からは石鎚3、ピエス・エスキーユ8、スクレイバー5、打製石斧2、凹石2、磨石

Tab. 4 住居址別石器一覧

器種	遺構	J-9 J-10 J-11 J-12 J-13 J-14						合計
		J-9	J-10	J-11	J-12	J-13	J-14	
石 鎚	頭	1	1	1	1		3	7
尖 頭 器					5	3	8	23
ピエス・エスキーユ		7						
ス ク レ イ バ ー			1	1	4	6	5	17
核	器					1		1
打 製 石 斧				2		1	2	5
磨 製 石 斧								
礫 器		3	1	1				5
凹 石			1		1	2	2	6
齊 石					3	2	2	7
敲 石				2	2	1		5
ス タ ン プ 形 石 器						3		
特 殊 磨 石								3
三 角 僧 形 石 器								
多 孔 石			1					1
石 磨 穀				1			1	2
石 核	片	1			1	1		3
剥 片		65	54	29	112	75	151	486
台 石						1		1
ストーンリタッチャー								
砥 石								
自 然 理		1	2	16	7	10	9	45
合 計		78	61	53	136	106	183	617

2、石皿 1、剥片151、自然礫9の合計183点が検出されている。

Fig. 38-1・2は石鏃であり、2点ともチャート製である。1は欠損しているが、2例とも1類の平基無茎式である。1が7.7g、2が5.1gを計る。Fig.41-1～6はチャート製のピエス・エスキーユである。Fig.37に図示したものは1がスクレイバー(石匙)の欠損品と考えられる。3・4が片刃の打製石斧、5が凹石である。石材は、黒色頁岩(1～4)、輝石安山岩(5)である。

土 坑 (Fig.37・38・41・42、PL. 26～28)

土坑からは次の様な石器が出土している。

J D-5号土坑 8点(スクレイバー1、剥片6、自然礫1)

J D-6号土坑 22点(剥片22)

J D-8号土坑 2点(敲石1、剥片1)

J D-11号土坑 2点(剥片1、自然礫1)

J D-14号土坑 1点(剥片1)

J D-17号土坑 1点(石鏃1)

J D-21号土坑 1点(石皿1)

J D-25号土坑 94点(石鏃2、ピエス・エスキーユ7、スクレイバー1、石核1、剥片83)

J D-26号土坑 130点(石鏃3、ピエス・エスキーユ5、スクレイバー1、剥片120、自然礫1)

J D-27号土坑 1点(剥片1)

J D-28号土坑 1点(スクレイバー1)

J D-31号土坑 3点(剥片3)

J D-35号土坑 50点(石鏃2、ピエス・エスキーユ2、スクレイバー2・うち石匙1、剥片44)

J D-37号土坑 1点(剥片1)

J D-40号土坑 17点(剥片7、自然礫10)

J D-45号土坑 3点(剥片3)

J D-46号土坑 38点(打製石斧1、剥片37)

以上のうち石鏃6点(Fig.38)、ピエス・エスキーユ6点(Fig.41)、スクレイバー1点(Fig.42)打製石斧1点(Fig.37)、敲石1点(Fig.37)の15点を図示した。

石鏃はJ D-17、1が凹基無茎式で1.4g、J D-25、1が平基無茎式で2.0g、2が凹基無茎式で1.4g、J D-26、1が平基無茎式で1.0g、2が凹基無茎式2.3gである。以上の石材はチャートである。J D-35、1は珪質頁岩製で凹基無茎式でやや欠損するが、1.0gを計る。

ピエス・エスキーユはJ D-25、J D-26、1～4でいづれもチャート製である。4はピエス・エスキーユに付随して作出された剥片といえよう。J D-35の1もチャート製のピエス・エスキーユである。

スクレイバー(Fig.42)はJ.D.-25より出土。1側縁にスクレイバー・エッジが作出される。黒色安山岩製である。

敲石(Fig.37)はJ.D.-18より出土しており、閃緑岩製で上下両端に顕著な敲痕が認められる。J.D.-16、1は両刃の打製石斧であり、黒色頁岩を用いている。

(2) 包含層出土の石器

尖頭器 (Fig. 38, PL. 27)

形態 2・3とも基本的には左右対称に作られるが、細部において左右が異なる。

製作・調整技法 調整は素材の主要剥離面を残しており、椎揃であり、特に2の裏面にはヒンジフラクチャーが著しくみられる。

大きさ・重量 2は長さ3.1cm、重さ2.8gであり、3が長さ7.5cm、重さ23.7gである。

石材 2は黒色安山岩、3は黒色頁岩である。

時期 遺物分布は2点と少ないため、共伴関係はとらえられない。また、石材や調整からみても旧石器時代の尖頭器とは考えられない。

石鎌 (Fig. 38~40, PL. 27)

本石器は84点出土している。このうち図示したのは59点である。

1類 平基無茎 (20・23・33~37・45・47・48)

2類 四基無茎 (1~8・10~15・17・22・24・28~32・38~44・46・47・48・50・59)

3類 平基有茎 (9・56)

4類 凸基有茎 (49・52・53)

製作・調整技法 押圧剥離が施される。なかには斜行剥離が平行に並ぶ優品もある。

大きさ・重量 長さ1.2cmから3.3cm、幅は0.9cmから2.5cmまでみられる。厚さは0.2cm~1.1cm、重さは0.2g~3.2gまで存在する。

石材 チャートが大部分を占めるが、黒曜石(5・6・13・17・30・38・42)、黒色頁岩(28・36・58)、黒色安山岩(21・24)、珪質凝灰岩(12・14)、頁岩(48・49)が用いられている。

ピエス・エスキュー (Fig. 41, PL. 26)

本石器は遺構と包含層の合計185点出土している。このうち図示したのは、29点である。

四角形を基本とし横長や縱長のものが存在する。三角形や紡錘状を呈するものもある。10やJ-9、1はピエス・エスキューに付隨的に作出される剥片であろう。

大きさ・重量 長さは2.1~4.1cm、幅は1.1~2.9cmに分布する。厚さは0.5~9.1cmとばらつきをみせるが5g近辺に集中する。

石材 3がメノウである以外全てチャートである。

分布・時期 急の長い石器で旧石器時代から縄文時代全般を通して使用されたことが知られてい

るが、本遺跡の場合、多時期にわたらずⅣ群との関連が認められる。

スクレイバー (Fig. 42, PL. 28)

出土点数は254点と石器の中で最も多い。不定形を呈し一側縁に刃部の形成されたものが殆どである。石匙として認識できたのは21点である。ここでは、石匙を取り上げて説明を行いたい。

1類 帳形。(42-1, 43-2~4)

表面全周に渡って調整が施され、裏面は右側縁に調整が施される。つまみは簡単につけられる

2類 横形。(42-4, 5, 43-1)

表裏面ともには全周に渡って調整が施される。つまみは1類にくらべると入念に作出される。

3類 中間的なもの。(42-3)

表裏面とも入念な調整が施される。

石材 黒色安山岩(42-5, 43-1)、チャート(42-1)のほかは黒色頁岩が用いられる。

分布 スクレイバー全体の分布図作成は行わなかったが、石匙21点の分布をみるとⅣ群との関連も考えられるがⅢ・Ⅳ群との関係を考えたい。

打製石斧類 (Fig. 44~47, PL. 29)

今後の検討により幾つかの器種に分類すべきと考えるがとりあえず打製石斧類と一括した。合計115点が出土している。

1類 両刃 ばち形に近い形態をとる。(4・15・16・21・22・23・24・26・34)

2類 片刃 片面に大きく確面を有し、確面から刃部の作出がなされる。(5・6・7・8・

9・10・12・13・14・17・18・19・20・25・27・28・29・30・31・32・33・35・37)

3類 直刃 (1・2・3・36)

石材 ほとんどが黒色頁岩を素材とする。

磨製石斧 (Fig. 47, PL. 29)

6点検出された。遺構出土は全くないため総数でも6点である。

1類 定角式 (42・43)

2類 乳棒状 (39~41)

大きさ 定形品である39は360gを計る。他のものはいづれも欠損品である。

石材 黒色頁岩(40・43)、かんらん岩(39・41・42)

分布 6点とも広く分布し、まとまりは見られなかった。いずれの群と関係を持つか把握できなかった。

石皿 (Fig. 47, PL. 32)

本遺跡では8点検出された。そのうち完形品2点を図示した。

石材 2点とも赤城山産出の輝石安山岩を使用している。45はFig. 59-11の磨石と組み合わさった状態で出土している。

三角錐形石器 (Fig. 48~55, PL. 30)

本石器は合計55点出土している。このうち図示したのは45点である。

用途・機能が明らかにされていない器種であるため、ここで便宜的に各部の名称を設定する。中心に図示した面を正面としその脇を右左側面とし裏側を背面と呼ぶ。下を底面とし上を先端部と呼ぶ。

1類 背面に平らな穂面もしくは剝離面が構成され、主に背面を打面として側面と底面が形成される。(1~36, 38, 40~43)

2類 スタンプ形石器との区別が明瞭でない。しかし、底面が数度の打撃によって作出されることから、本器種に分類した。上下両端に作業面(底面)が構成されるものも存在する。本類の場合、側面調整は殆ど行なわれない。(54~37, 39, 57~15, 16)

大きさ・重量 相関図と分布図を作成したが本来は600~700g程度の石器から底面調整がなされ100~200gの石器となると考えられる。

欠損部位 先端部と底面で二分割されるものが多く見受けられる。欠損方向は背面からの折れが殆どである。

石材 99%黒色頁岩である。

分布・時期 遺構からの出土は皆無であった。このことは、Ⅶ群土器、Ⅸ群土器との関連は無いことの蓋然性が高い。包含層の分布はⅡ・Ⅲ群土器である早期前半撫糸文土器、無文系土器群との共伴がみられ、それ以降の土器群との共伴は考えられない。

スタンプ形石器 (Fig. 56~60, PL. 31)

本石器は合計27点出土している。このうち図示したのは21点である。

1類 円盤を分割した状態のもの。(3・4・6~13・19・59~15・60~20~23)

2類 円盤を分割し右側縁の上端部にくびれを作出する。(1・2・5・14・17・18)

大きさ・重量 長さ7~13cm、幅は5~10cm大である。厚さは5cm前後であり、あまりばらつきは認められない。重量は200g~1,000gまでと幅広く存在するが、400g~700g台にまとまりをみせる。

石材 石英閃緑岩、輝緑岩、閃緑岩、変質安山岩、グラノファイバーが認められる。

使用痕 6・7・12・fig. 60~21に認められた。いづれも磨痕が認められる。また、底面から周間に向かって細かな剝離が観察できた。

分布・時期 遺構からの出土は皆無であった。このことは、Ⅶ群土器、Ⅸ群土器との関連は無いことの蓋然性が高い。包含層の分布はⅡ・Ⅲ群土器である草創期後半撫糸文土器、無文系土器群との共伴がみられ、それ以降の土器群との共伴は考えられない。

磨石・凹石・敲石 (Fig. 58~59, PL. 32)

本石器群は单一器種で構成されることが少ないため、一応磨石類にまとめて扱った。凹石22点、磨石102点、敲石13点が出土している。

IV 繩文時代の遺物

器種 磨石 (3・4・5・11・12・13)

磨石と凹石 (6・7・8・9)

凹石 (1・10)

敲石 (13・17・20)

特殊磨石と凹石(2)

大きさ いづれも橢円形の河原石を素材とする。幅7cm前後、長さ10cm前後、厚さは4cm前後で重さは200g~1,000g台に分布し、400~600gに集中する。

石材 輝石安山岩を主体とするが、石英閃緑岩(3・4)、麥質安山岩(9・13)もみられる。

特殊磨石 (Fig. 59・60, PL. 32)

本群は21点である。このうち図示したのは14点である。

形態 他の器種と併用して使われる以外は橢円形の穂の一稜線を使用しているが、多面的に用いるものもある。穂の断面形は四角形や三角形の棱をなすものを選択している。

大きさ 三角形や四角形と棱をなす河原石を素材にもちいている。長さ15cm程度であり、他の磨石に比べ重量が重く600~1,000gに分布する。

石材 スタンプ形石器と同様に石英閃緑岩(15・17・19・21・22・25・26)が多用されるが珪質頁岩(2)、麥質安山岩(14・24)、輝石安山岩(16・18・23)ももちいられる。

分布・時期 VII群もしくはVII群・V群との関係としてとらえたい。また、スタンプ形石器との両用石器とされること古くII群土器である早期前半燃系文系土器群の時期にも多用されていることといえる。

砥石 (Fig. 42, PL. 28)

砥石は3点検出されている。7は粗粒安山岩を用いており、両側面の中央がくびれている。石製品の可能性ものこす。

その他 (Fig. 42, PL. 28)

6の1点だけである。石匙に似るが両側縁の刃部には全周にわたって敲打痕がみられる。磨製石器の素材か。頁岩製。用途不明。

V その他の時代の遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は繩文時代以降のものとして歴史時代の住居址8軒、土坑7基、炭窯7基、掘立柱建物址1棟、竪穴式遺構1基、溝跡3条が検出されている。住居址8軒は奈良時代後半である8世紀第4四半期から平安時代である9世紀第1四半期に位置づけられている。土坑等の他の遺構は検出遺物に乏しいため概に時期の決定はできないが、出土遺物から断片的に4世紀代の古墳時代の土器や、6世紀代の古墳時代後期の土器もみられる。

すでに大方の遺構と遺物は『柳久保遺跡群IV』で紹介されているため、今回はそれに掲載できな

かった土坑5基、掘立柱建物址1棟、竪穴状遺構1基、溝跡3条について報告する。

1 土 坑

本遺跡から検出された新しい時代の土坑は7基である。D-1、2号土坑についてはIV集に報告されている。D-1号土坑からは出土遺物は認められなかったが、D-2号土坑からは石川式土器の台付腹形土器の副部破片の出土がみられた。今回報告するD-3~7号土坑とは距離的にも離れているため、直接的な関連は考えられない。D-3~7号土坑は南端部に突出した調査区に分散した状態で分布する。

D-3号土坑 (Fig. 13)

位 置 X115、Y180グリッド。

形 状 円形。長径141×短径128cm、深さ52cmを測る。断面形は緩やかな摺鉢状を呈する。

遺 物 繩文式土器(IX群)1点が混入。

D-4号土坑 (Fig. 13)

位 置 X112、X186グリッド。

形 状 円形。長径131×短径127cm、深さ50cmを測る。断面形はD-3と同様摺鉢状に立ち上がる。

遺 物 繩文式土器(II群)2点が混入。

D-5号土坑 (Fig. 13)

位 置 X114、Y175・176グリッド。

形 状 円形。長径134×短径122cm、深さ68

cmを測る。前記の土坑と同様に摺鉢状を呈するが、2段構成となっている。

遺 物 繩文式土器(IX群)1点が混入。

D-6号土坑 (Fig. 13)

位 置 X111、Y183・184グリッド。

形 状 楕円形。長径111×短径90cm、深さ38cmを測る。断面形は前記土坑と同様に摺鉢状である。

遺 物 認められなかった。

D-7号土坑 (Fig. 13)

位 置 X115、Y179グリッド。

形 状 楕円形。長径110×短径76cm、深さ34cmを測る。W-1号溝に西側をきかれている。

2 掘立柱建物址

検出された掘立柱建物址はB-1号建物址1棟だけである。本址に関連すると思われる柱穴は合計16個検出されたが、1棟の建物址が図上より復元できた。

B-1号建物址 (Fig. 10)

位 置 X110~112、Y172~174グリッドに所在する。

形 状 推定約17m²の床面積をもつ、3間×2間を原則とした建物であるが、南北方向には柱穴がなく、さらに北側においても柱間が不規則な並びを呈する。柱穴の平面形態は円

・楕円形である。柱穴の深さや各柱穴底の比較も一定性がない。柱間は東~西で約1.7m、南~北で1.7mを測る。H-1号住居址の方位がN-64°-Eであり、本建物址の方位がN-58°-Eであるから、方向的には一致をみる。

3 竪穴状遺構

竪穴状遺構は1基検出された。他の遺構と明確に区別する手立てはないが、規模、形態においていずれの遺構にも属さないため本名称のもとに扱った。

T-1号竪穴状遺構 (Fig. 15)

位置 X116-117、Y115-116グリッド。

形状 平面形は半円形を呈する。東側は沖積地となるため、これ以上東側に延びることは考えられない。規模は東西5.05×南北6.22m、深さ0.5mを測る。方位はN-91°-Wにとり斜面とはほぼ直交する形をとる。W-2号溝が南に隣接して存在するが、重複関係を有

していないため同時期存在と思われる。

遺物 摩耗した土器が数点認められたが時期判定を下せるまでに至っていない。

備考 立地の点で昭和62年度調査を実施した粘土探掘坑と類似するため、探掘坑の可能性も考えられる。

4 溝跡

溝跡は3条検出された。3条とも交点を持つが重複関係は認められなかった。このことから、3条の溝はほぼ同時期に存在していたことと考えられる。覆土の上層にA-s-Bの二次堆積土が入ることや出土遺物の上限から平安時代の所産と考えられる。

W-1号溝 (Fig. 16)

位置 X112~115、Y172~188ライン。

形状 南から北に向かい比高差20cmを有する。北側で幅30×深さ20cm、南側で幅40~75cm、深さ50cm前後である。断面形は逆台形を呈し底面は平坦に形成されている。底面は水の流れた痕跡は認められなかった。

遺物 混入の縄文式土器2点の他、土器片が4点検出された。このうち1点は石田川式土器の小片であり、他の3片は奈良時代後半の土器と考えられる。

W-2号溝 (Fig. 16)

位置 X111~117、Y181~182ライン。

形状 西から東に向かい比高差3m以上有する。西側で幅50×深さ30cm、東側で幅30×15cm前後である。底面上には比較的凹凸が見

られた。断面形態は2段に構築されたものである。W-1、2の交点の高さは同一レベルである。

遺物 混入の縄文式土器3点の他、土器片が10点検出された。いづれも平安時代の杯、甕の小片であり図示するまでに至らないものである。

W-3号溝 (Fig. 16)

位置 X112~116、Y182~188ライン。

形状 南から北へ20cmの比高を持ってのびる。南側で幅70×深さ110cm前後、北側で幅30×深さ30cm前後である。W-2との交点は同一レベルであるが、W-1との交点では95cmほど本溝の方が低い。断面形は薬研状を呈する。

遺物 混入の縄文式土器14点の他、土器片

が13点出土している。1点は石田川式土器、
2点鬼高式土器の杯が認められた。この他は

平安時代と考えられる破片である。

VI ま と め

今回の調査で検出された遺構は縄文時代前期の住居址6軒と縄文時代の土坑、集石、焼土跡である。この他に歴史時代の竪穴状遺構、掘立柱建物址、土坑、溝も検出されたが、この点に関しては先の『柳久保遺跡群IV』で触れているのでそれを参照していただきたい。遺物としては遺構に伴う土器、石器のはか旧石器時代の尖頭器、縄文時代草創期から後期にいたる遺物包含層が検出された。以上の成果をもとに下記の項目毎にいくつか気がついた点を中心に検討を行いまとめたい。

1 遺 構

今回検出された縄文時代の住居址は6軒であり、出土遺物から前期、花積下層式期3軒・諸磯⁽¹⁾a式期3軒にそれぞれ帰属する。市内の縄文時代住居址の調査例は芳賀団地遺跡群を除くと少ないので今後の分析に耐えうる資料が追加された点で評価されよう。群馬県内では近年の関越自動車道に伴う発掘調査で赤城西麓から北西麓、沼田、月夜野地区において多くの遺跡が検出された。

赤城南麓においても本市教育委員会で調査した芳賀団地遺跡群をはじめとして、宮城村市之間遺跡、柏川村大平遺跡、大林遺跡、大林II遺跡等が学史的にも著名であるが、近年、柏川村室沢、⁽²⁾月田地区からは黒浜期～諸磯⁽³⁾c期の住居址が70軒以上調査されている。また隣接する大胡町、新里村の調査でも前期の資料は増加している。本遺跡を含めたこれらの遺跡の立地をみた場合にいずれも丘陵性地形に前期の遺跡が選地されている。続く中期遺跡の立地は台地上に大集落が展開されるのと対照的である。このことは、市域において赤城火山性斜面には前期の遺跡分布は卓越するが、前橋台地においては中期以降の遺跡が増加することと符合する。⁽⁴⁾

また、住居址の形態も諸磯式期を境にして長方形から方形に変化することが指摘されているが、本遺跡事例でも認められた。

2 遺 物

土 器

縄文時代草創期から早期を考える上で良好な資料の出土に恵まれた。谷をはさんで隣接する柳久保遺跡でも井草式や無文系土器、田戸下層式土器がまとめて出土し、頭無遺跡においても押型土器、田戸上層式土器を始めとして早期後半の資料がまとまって検出されており、今後三遺跡を総合すれば、本地域における草創期から早期の土器群の変遷の実態解明に期待がもてる資料である。

I群土器は横須賀市馬の背山遺跡や千葉県権現山遺跡出土の土器と時間的な共通性を持つものと考えられる。口唇から内面にかけて縄文施文や、まくれた口唇は井草式との近接性が窺える。今後、表裏縄文と撚糸文土器をつなぐ土器群として位置づけられる可能性が大きいものといえる。器形は平口縁であるが、突起を有する。こういった例は埼玉県宮林遺跡、水久保遺跡に類似が求められ、普遍的な存在が予想できる。

II・III群土器については稻荷台、稻荷原式土器に比定されるものである。口縁形態や文様から大方、稻荷原式土器に帰属するもの

と考えられる。この中で結晶片岩粒⁽⁴⁾を顕著に含むものがみられた。II群土器の244点について結晶片岩の含有率を調べたところ15.6%にあたる38点にみられた。同様にIII群土器800点の土器について結晶片岩の含有について調べたところ、37.5%にあたる

300点にみられた。このようにII群よりIII群土器に結晶片岩の含有が多いことがいえる。このことが時間的経過を示すことなのかどうかについては、あくまでも破片数であるため、多くの資料で検証しなければならない。また、細かな数字は挙げられないが、IV群土器の胎土にも多く結晶片岩粒がみられた。「柳久保遺跡群I」で2群3類D₂種として分類したものがそれに該当し、2~5mm大の結晶片岩粒を含み100片近く出土している。IV群土器はV群2類である田戸上層式並行期の土器に類付きが似るため、時期的にも近接するものといえる。これらのことから、本遺跡において結晶片岩粒の混入は撚糸文土器から沈線文土器の時期に認められ、その後の条痕文土器群にもみられるが量的には少ない。このことは、胎土に纖維が混入され土器の大形化が開始される時期と軌を一にする点が興味深い点である。しかし、時期的に関係する押型文土器の胎土に金雲母と同様に結晶片岩が認められる点は注意を要する。

V群土器は東北南部や栃木県、新潟県に多く見られる常世I式土器である。類似は福島県常世遺跡、富作遺跡、道德森遺跡、栃木県出流原小学校内遺跡があげられる。

VI群土器は県内における鶴ヶ島台式土器の良好な資料として位置づけられる。VI群1類A種と2類A種の類似性は粗製土器との共伴の好事例となるものである。

VII群土器は有文土器が少ないとから時期的な細分ができなかった。しかし、1、2類は狭義茅山上層式の範疇にふくまれるものと思われる。3、4、7類は東北地方にみられる縄文尖底土器と花積下層式に大部分が比定でき5と7類のうち器面調整が良く無筋や単筋斜行縄文の土器は黒浜式と考えられる。6類の土器は県内の前期遺跡の資料をみても類似は少なく、渋川市空沢跡に1点認められただけである。胎土に纖維を含むことから、VII群土器に分類したのであるが、J-10・11号住居址から諸磯a式に伴出して出土している。本資料と類似する土器は新潟県泉龍

Tab. 5 II・III群土器胎土の結晶片岩粒含有率

	II群	III群	観察破片数
	15.6% (38点)	37.5% (300点)	244点
	84.4% (206点)	62.5% (500点)	800点

(結晶片岩粒を含有)

寺遺跡で第II群土器B類としたものが該当しよう。文様要素である櫛齒状工具による連続刺突文は神ノ木式や有尾式に特徴的なものであるが、条線文はIV群8類に共通するものと考えられる点からと同一であるため諸磯a式と関係するものであろう。⁶³

今回検出されたIV群土器は有文土器が少ないが1~8類まで諸磯a式の範疇でとらえられる土器である。

石 器

打製石斧類は刃部形態で3類に分類したが、大きさ、形態によって細分が可能である。とくに2類は「柳久保遺跡群I」の報告で「片刃形の石器」としたものと同一のものである。常世式土器と関連する時期のIV群土器に多くみられる事からも、東北地方の石窓と関係が考えられる。このような片面から刃部を中心にして丁寧な削離が施される小形の石器は早期から前期にわたって北関東地域で普遍的に認められる。石窓は東北地方において縄文時代全般にみられる普遍的な石器であるが、石斧と認定される石器は少ない。今後両地域を含めた視点で検討を進めなければならないといえる。

次に北関東地域の特有といえる三角錐形石器が60点近く検出されII・III群土器との共伴も認められた事は今後、三角錐形石器を検討する上でも示唆に富むものといえる。⁶⁴

三角錐形石器が固有の器種であるかについては、石坂 茂(1986)が積極的に独立する器種である考え方を発表している。石坂によると①製作上の相違、②石材の違い、③空間的分布の違いの3点を指摘し三角錐形石器とスタンプ形石器は別の器種であるとしている。しかし、製作上の相違をとってみても三角錐形石器のなかには西井幸雄(1985)が指摘したように2者の中間的要素を持つものもある。石材の違いについても群馬県内では石器石材として黒色頁岩が豊富であるが、他の北関東地域を含めた場合にそれはむずかしい。例をあげれば、茨城県水戸市内の遺跡では3例の三角錐形石器が検出されているが4例とも硬砂岩を用いるものである。また、スタンプ形石器に黒色頁岩が用いられることが本遺跡事例でもあり、2者の石材は産地との関係を考慮しなければならないものと考えられる。

三角錐形石器とスタンプ形石器の基本的な異なる点はスタンプ形石器が一度作成されればその大きさを変えることなく使われるのに対して三角錐形石器は最初は一定の大きさに作られその後底面調整され小さなものになっていく点である。また、スタンプ形石器の底面の多くは単打によって作出されるが、三角錐形石器の底面は背面を中心とした方向から数回の打撃によって作出され底面調整も背面側から頻繁に行なわれるという特徴をもつ点である。今回示すはしなかったが、底面調整剝片と言うべき剝片が多数存在することから、当初15cm以上の大きさに作られたものが、数回の底面調整を受け5cm以下の大きさとなるものと考えられる。

また、北への広がりは新潟県を越えて山形県米沢市柿ノ木遺跡を始め米沢市に4例存在する。⁶⁵ 南への広がりは、神奈川県早川天神森遺跡にも4例の報告がなされている。

3 遺物分布と各土器群の占地変遷

遺物分布図作成の目的は『柳久保遺跡群I』に述べたとおり、本県において縄文時代草創期、早期の資料は少ない。また、貝塚等の良好な層位的資料も少ないと認められ、インボルーションにより遺構の遺存状況も良くないため包含層の分析に頼らざるを得ない。また、縄文時代の石器群の変遷も具体的な事例になるとほとんど提示されていない状況である。

各時期の遺物分布を概観するとI群土器は南東部に小範囲で分布する。II・III群である撫糸文土器終末期の段階になると南側に大きく占地するようになる。特に南側に著しい集中があることから更に南に広がることも考えられるが、集中部が確実となっているため一種の土器捨て場的な場としても考えられる。IV群土器については、すでに石器と剥片の接合資料から石器製作場的な場が想定でき西側に偏在して位置する。V群土器については個体の属性からIV群との近時性について考えたが、遺物分布でも類似が認められる。VI・VII群土器については型式的連続がみられるもので南側に大きく占地する。VIII群の分布は中央に空間をもっており、完形ちかい土器の出土と合わせると遺構は検出されなかったが集落の存在も予想できる。VIII・IX群土器の時期は集落分布と土器分布が一致し広大な占地が認められる。ただIX群の分布は集落がない西側に遺物の集中がみられる点はVIII群のあり方とは異なっている。これ以後のX・XI群土器の分布は量的にも少なく衰退し点在したあり方をしめす。

これらの土器群と石器の関係であるが三角錐形石器はII・III群土器と分布の重複をみせる。スタンプ形石器の場合はII・III群土器と共にII・III群土器との関係もたらえられた。

ビエス・エスキーユは旧石器時代から縄文時代全般にわたって使われた石器であるが、本遺跡の場合VIII群土器との関係が見出せる。

このことはVIII群土器に帰属するJ-12～14号住居址の石器組成からも肯定できる。

特殊磨石についてはIV～VII群土器との分布が関連する。中部地方において押型文土器との関連性が指摘されているが、東日本に多く見られる石器である。スタンプ形石器との両用器種もみられるため草創期の後半から前期初頭まで使用されていた事が予想される。

以上のように土器と石器の分布は有機的関連を持って存在することが推察されるが、石器について全部の器種について分布図を作成しているわけではないため

Tab. 6 主要石器の石材

石材名 器種名	黒 色 質 岩	真 質 岩	珪 質 岩	チ 質 岩	珪 質 岩	黒 質 岩	輝 質 岩	輝 質 岩	石 英 質 岩	閃 質 岩	閃 質 岩	グラ ノフ ァイ ア	安 山 岩
石 楕	○	○	○	○	○	○							
ビエス・エスキーユ				○		○							
打 製 石 斧	○	○					○						
磨 製 石 斧	○			○									
三 角 錐 形 石 器	○						○						
stan d p t e r	○			○			○	○	○	○	○	○	○
四 石							○						
磨 石							○						

○本遺跡で好んで使われた石材

○本遺跡で使われた石材

多少問題をのこす。また、遺構と遺物分布についても住居址・土坑・集石から関連性がみられたこのように、遺構と遺物を考える上で情報の少ない本地域でもそれを交差させる場合に有效性がみとめられる。土壤が搅乱を受けている場合、微視的な見地からの分析はできないが遺跡全体からの視点での分析は遺構、遺物の型式細分と相俟つ必要と考えられる。

4 石器石材

主要石器の石材をTab. 6に示した。大まかに本遺跡での石器と石材の関係が把握できる。時間的な都合で石器8215点の全部にわたって石材同定は実施できなかつたため約30%程度について抽出して行った。剥片石器は主として黒色頁岩でしめられ、礫石器については輝石安山岩、石英閃綠岩等が用いられている。

石材の同定を進めると同時に石材産地の解明もなされなければならない。県内産出地と本遺跡の石器について限られた資料で動きを探ってみたい。剥片1512点の内訳はTab. 7の円グラフである。以下、中東・飯島(1986)をもとにして本遺跡の石器石材と産地を概観したい。

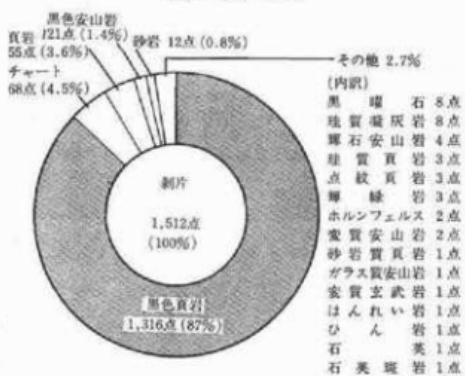
黒色頁岩 87%をしめる。本遺跡の代表的石材である。尖頭器、打製石斧、三角錐形石器、石匙、削器のほとんどは本石材によって作出される。また石鎌、磨製石斧などにも多く用いられ、スクランプ形石器にも時々みうけられる。

上越地方の新第3紀層、猪ヶ京層群の赤谷黒色頁岩層が該当し、法師温泉ならびに三国峠付近に産出するものが用いられるといふ。

チャート 4.5%を占める。黒色頁岩に比べると格段の差である。石鎌、ビエス・エスキューの大部分に使用され削器にも用いられる。いわゆる秋父古生層中に一般的に産出する岩石で足尾山地と関東山地に広く分布し、堅固な石であるため本遺跡の南5kmに流れていた旧利根川からも礫として入手できる。

本地域では輝石安山岩は赤城山から大量に流出しているため荒砥川や柏川の一般的な石材であり、磨石、石皿、敲石、凹石等に使われる。このほかに遠隔地からもたらされた石材として黒曜石、珪質頁岩が挙げられる。黒曜石は長野県産が殆どを占めるが神津島産のものも三後沢遺跡ではみとめられている。珪質頁岩は今のところ県内で確実な産出ではなく、北陸、東北の日本海側地域の産地が考えられる。結晶片岩は礫の状態で多々みられるが多野山地産と思われる。

Tab. 7 剥片の石材



註

- 1) 前橋市教育委員会が昭和48~56年まで調査を実施。西部工業団地遺跡からは岡山、諸磯式期の住居址7軒、東部団地遺跡からは岡山、黒浜、諸磯、一三番提、加曾利E、恵名寺式期の住居址64軒、北部団地遺跡からは前期、中期の住居址31軒などが検出されている。現在整理中であり、近く報告書の刊行が予定されている。
- 2) 黒岩文夫・富沢敏弘 1985「中標遺跡」昭和村教育委員会、茂木光徳・都丸 雅 1985「見立福井遺跡」赤城村教育委員会、柿沼恵介・右島和夫「分郷八幡遺跡」北橘村教育委員会、小野和之・谷藤保彦 1985「三原田城遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団、関根慎二 1986「糸井宮前遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団、中村富大・間庭 稔 1986「善上遺跡」三峰神社遺跡・太夫館遺跡「月夜野町教育委員会、菊地 実 1986「三後伊遺跡」一二原日遺跡「群馬県埋蔵文化財調査事業団、武部喜光・大賀 健 1986「関越自動車道(新潟側)水上町埋蔵文化財発掘調査報告書」水上町教育委員会などが挙げられる。
- 3) 尾崎喜左雄ほか 1964「市之間遺跡」宮城村教育委員会、岡山I式期の住居址1軒調査、室沢大平遺跡は1960年に群馬大学尾崎喜左雄により調査、諸磯式期の住居址1軒。大林遺跡は尾崎喜左雄 1967「群馬県勢多郡大林遺跡」日本考古学年報15号。大林II遺跡は尾崎喜左雄ほか「群馬県用水幹導水路地盤埋蔵文化財調査報告書」群馬県教育委員会に所収。黒浜、諸磯A式期の住居址3軒。
- 4) 小島純一ほか 1986「柏川村の遺跡」柏川村教育委員会に掲載の長田A~D遺跡、タカリI・II遺跡、近井I・II遺跡、月田3~10遺跡である。
- 5) 内田憲治ほか 1984「新里村の遺跡」新里村教育委員会、内田憲治 1981「武井・城遺跡」新里村教育委員会、山下康信 1988「上大屋・梯級地区遺跡群」大胡町教育委員会などが挙げられる。
- 6) 小野和之・谷藤保彦 1987「三原田城遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団による。
- 7) 関本 博 1959「三浦郡嵐山町の背山遺跡」横須賀市立博物館研究報告3、鈴木道之助 1974「根付遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書」房総資料刊行会
- 8) 結晶片岩は多野山地に産出し、旧石器時代・縄文時代の石器や石製品として広汎に用いられた石材である。県内では、多野の他に北木の原された地域に少量産出するが堅固で割がれにくいため多野のものと明らかに異なり、石材として利用されたものは認められていない。
- 9) 田中 敏ほか 1988「富作遺跡発掘調査概要」福島県教育委員会、中村五郎 1976「道徳森遺跡について」『磐梯町の禪波土器』磐梯町教育委員会、吉田 格 1964「富作遺跡2」『福島県史6、資料編1』、考古資料『福島県矢島遺跡』ほか 1986「出流原小学校遺跡発掘調査報告書」佐野市教育委員会。
- 10) 中村季三郎ほか 1963「新潟県中魚沼郡中里村泉鹿遺跡調査報告書」上代文化第33輯。
- 11) 石坂 広ほか 1986「荒砥北原遺跡・今井神社古墳・荒砥青柳遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団に所収。
- 12) 菊木秀雄ほか 1983「南浦遺跡」埼玉県熊谷町教育委員会の手で西井幸雄は三角彫形石器の分布について恐れ文化圏の内部で押型文土器との接触地域に分布する点とスタンプ形石器の変形態に組み入れられる可能性について説いています。三角彫形石器の時期的位置付けや分布に関する偏在性を意識づけた点は評価できる。
- 13) 水戸市立博物館市毛美津子氏の御好意で水戸市赤塚古墳群出土の三角彫形石器3点も実見させていただいた。また、川井正一 1986「大槻遺跡」茨城県教育財団でも石英斑岩製の三角彫形石器が数点出土。
- 14) 采米市教育委員会手原 孝氏の御好意で実見させていただいた。
- 15) 近畿・東海・中部・関東・東北地方といった広範囲から検出される磨石である。中部山岳地帯における押型文土器間に特有の石器であることが記されていました。鈴木 浩ほか 1976「長野県更級郡大岡村御久保遺跡の調査」長野県考古学会誌第23・24号で条文にも伴出することが指摘されている。特殊磨石の名称についても多面体磨石と称する提案(福島邦雄 1982「塙堀遺跡」長野県望月町教育委員会)がなされている。特殊ではないのであるから質問したい。
- 16) 中東耕志・飯島静男 1984「群馬県における田石器・縄文時代の石器石材」『群馬県立歴史博物館年報』第5号による。

参考文献

- 大塚昌彦ほか 1978「空沃遺跡」茨城県教育委員会
鈴木道之助 1979「白石城」埼玉県遺跡調査会
高橋正男ほか 1987「西堀遺跡」前橋市教育委員会
前原 豊 1984「城南住吉門地造り区域埋蔵文化財調査」『文化財調査報告書14集』前橋市教育委員会
前原照子ほか 1988「柳久保遺跡群I」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
新原洋一ほか 1985「柳久保遺跡群II」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
新原洋一ほか 1986「柳久保遺跡群III」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
千田幸生ほか 1987「柳久保遺跡群IV」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
遠藤和夫ほか 1986「宇喜多 柳久保遺跡群I」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
福田徳志ほか 1987「宇喜多 柳久保遺跡群II」前橋市埋蔵文化財発掘調査団

柳久保遺跡群の位置図



1:50,000 前橋

1000m 0 1000 2000 3000



No.	検出された時代と遺跡の種類						発載報告書名	No.	検出された時代と遺跡の種類						発載報告書名	
	石器	縄文	弥生	古墳	鉢~盤	水田			石器	縄文	弥生	古墳	鉢~盤	水田	古墳	
1								15	○	○						柳久保遺跡群Ⅴ
2								16	○							柳久保遺跡群Ⅳ・Ⅴ
3								17								柳久保遺跡群Ⅳ
4	○	○	○					18								柳久保遺跡群Ⅰ
5								19								柳久保遺跡群Ⅰ
6								20		○						柳久保遺跡群Ⅰ
7			○					21		○						柳久保遺跡群Ⅵ
8								22		○						柳久保遺跡群Ⅵ
9	○	○		○				23								柳久保遺跡群Ⅵ
10	○	○						24								柳久保遺跡群Ⅳ
11								25	○	○						柳久保遺跡群Ⅳ
12	○	○	○	○	○	○		26								柳久保遺跡群Ⅳ
13	○	○	○	○	○	○		27								柳久保遺跡群Ⅳ
14																柳久保遺跡群Ⅳ

注) 柳久保遺跡群Ⅱは試掘調査報告書である。

Fig. 2 柳久保遺跡群調査経過図 (1/4,000)

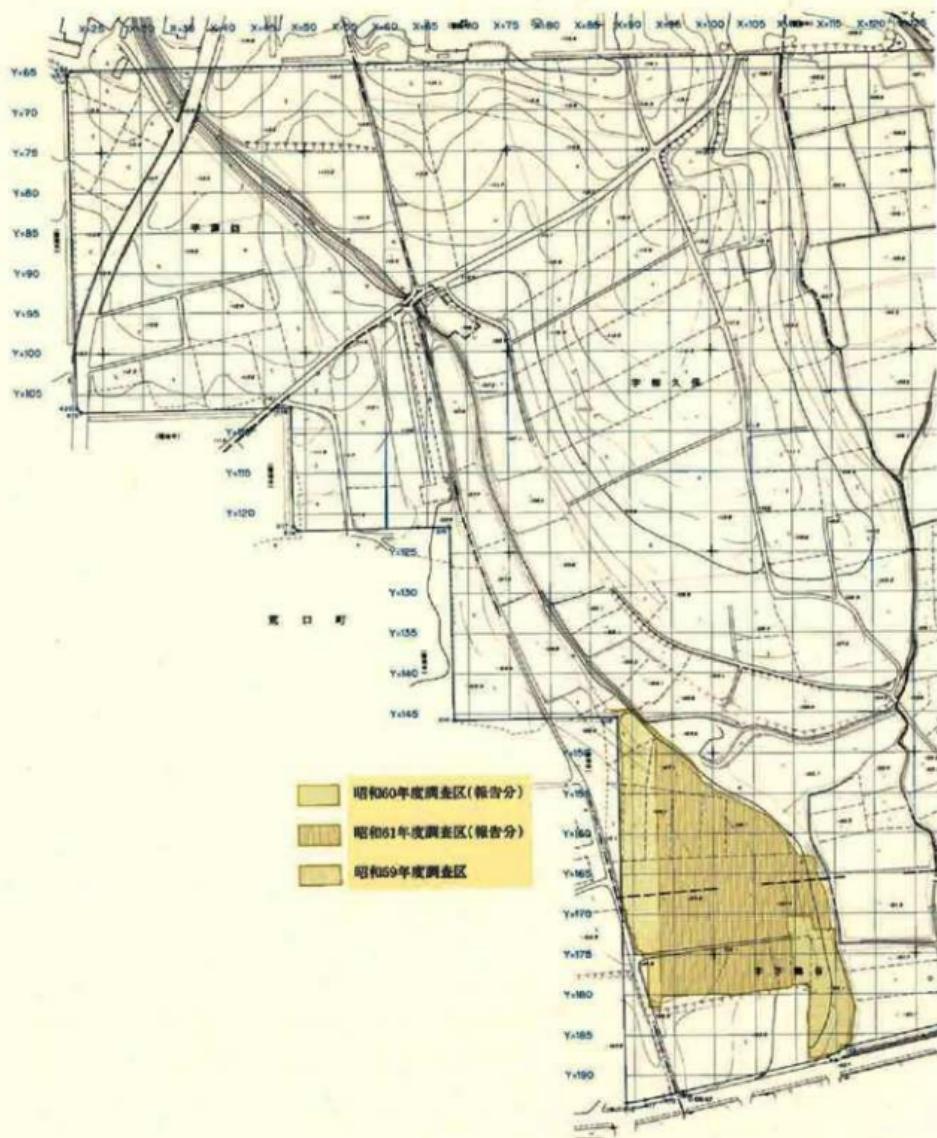


Fig. 3 柳久保遺跡群調査区域図 (1/2,700)



遺跡群名	遺跡名(ふりがな)	略称	調査年度	掲載報告書名
柳久保遺跡群 (やなぎくは いせきぐん)	下鍋谷遺跡(しもつるがやいせき)	E1	昭和59~61年度	柳久保遺跡群Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ(本報告分)
	柳久保遺跡(やなぎくはいせき)	E2	昭和59~61年度	柳久保遺跡群Ⅰ・Ⅳ
	諏訪遺跡(すわいせき)	E3	昭和60年度	柳久保遺跡群Ⅲ
	中鍋谷遺跡(なかつるがやいせき)	E4	昭和61・62年度	柳久保遺跡群Ⅵ
	頭無遺跡(かしらなしいせき)	E5	昭和62年度	柳久保遺跡群Ⅷ
	柳久保水田址(やなぎくはすいでんし)	E6	昭和59~61年度	柳久保遺跡群江・田・川・瀬

Fig. 4 柳久保遺跡群周辺図 (1:5,000)

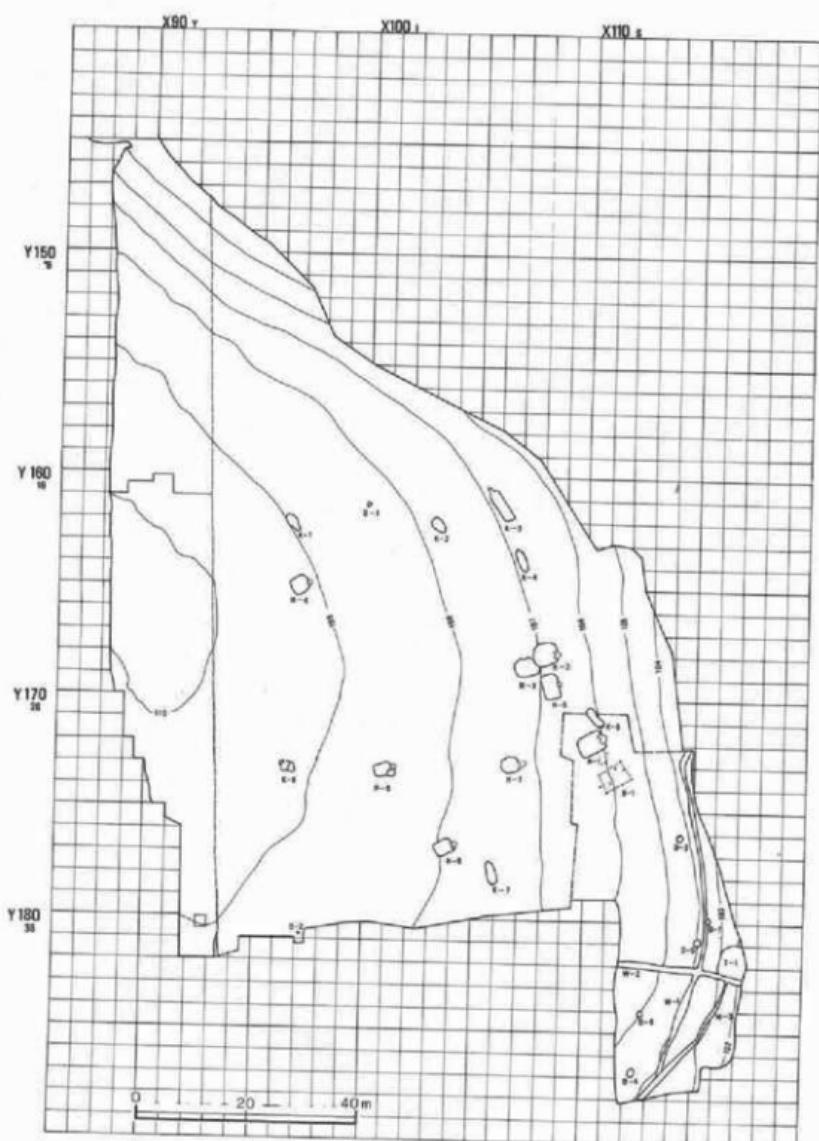


Fig. 5 下鶴谷遺跡古墳時代～平安時代遺構全体図 (1/1,000)

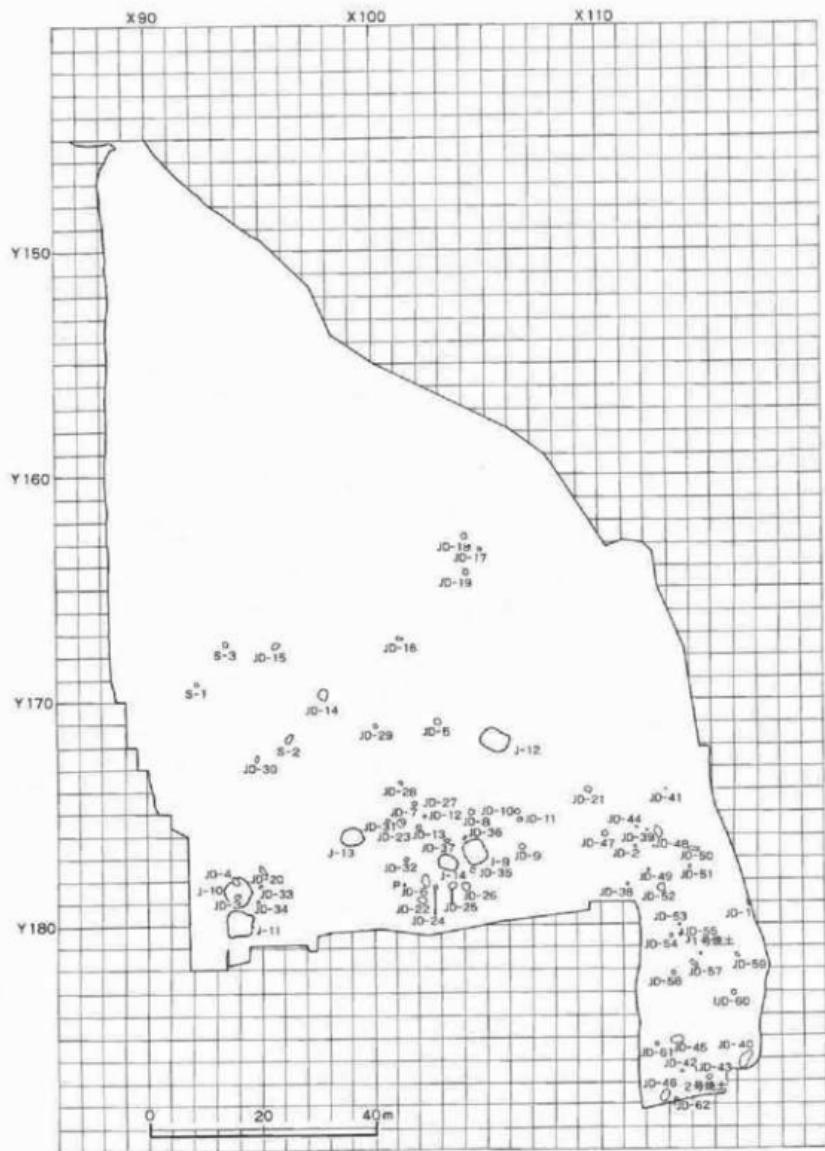


Fig. 6 下鶴谷遺跡縄文時代遺構全図 (1/1,000)

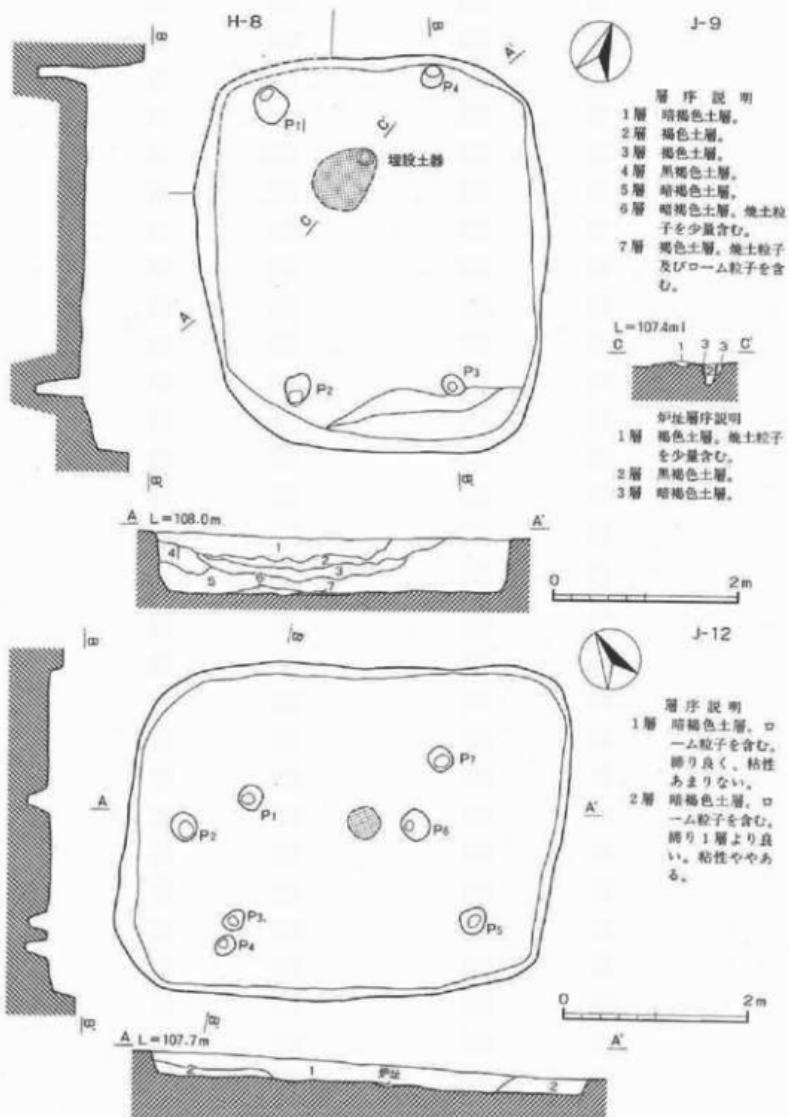


Fig. 7 J-9・12号住居址 (%)

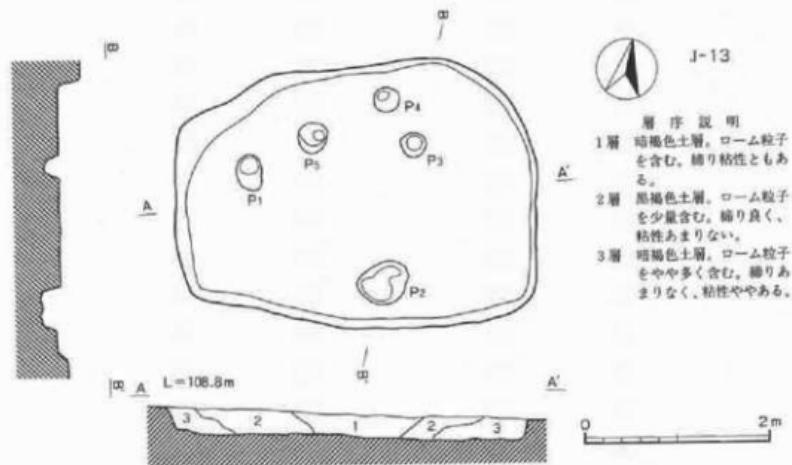
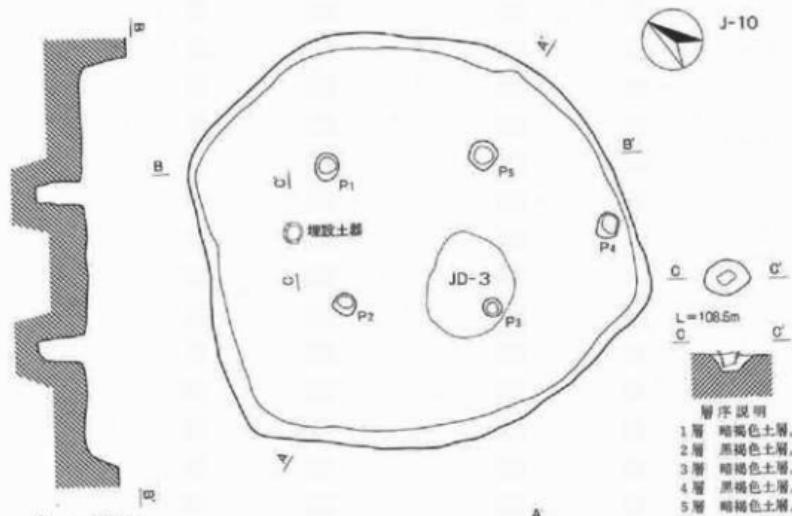


Fig. 8 J-10・13号住居址. (Yō)

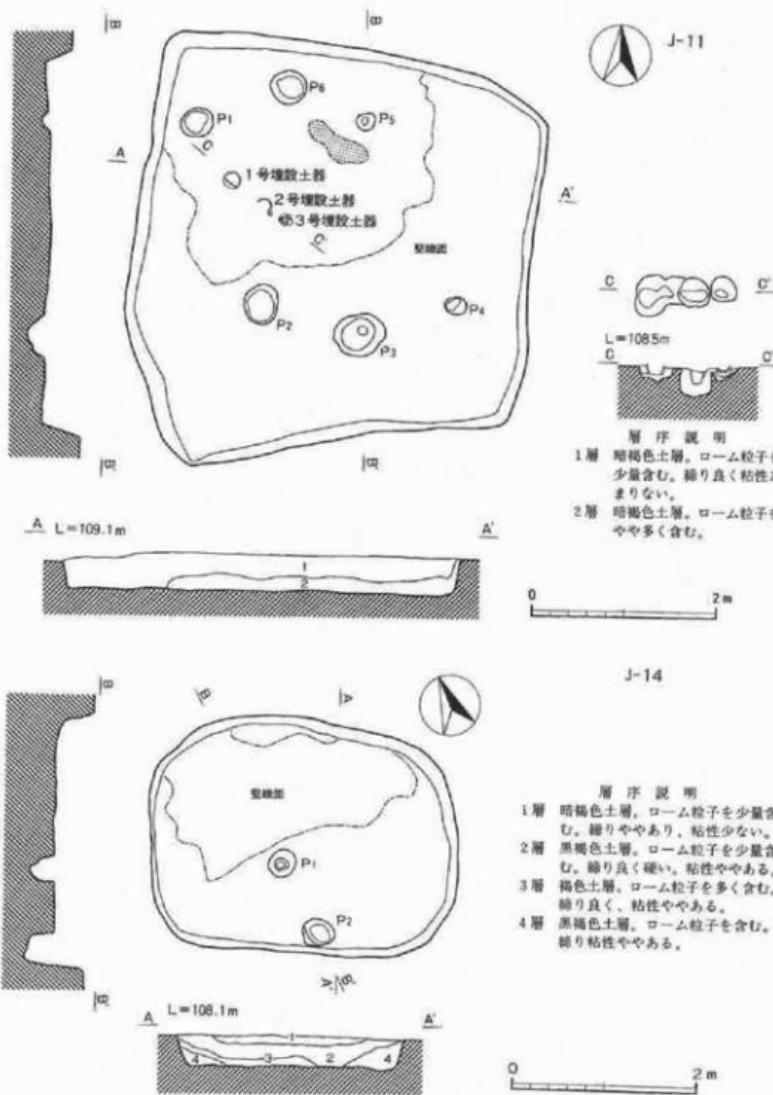


Fig. 9 J-11-14号住居址 (縦断)

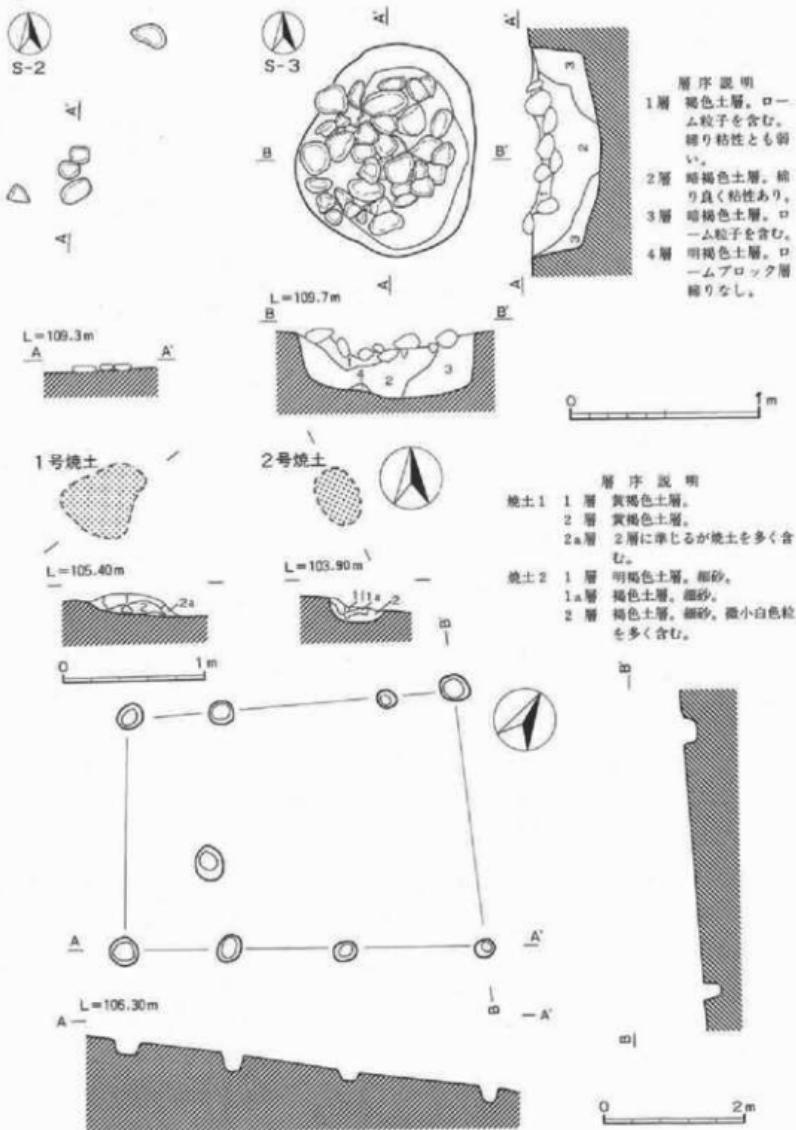


Fig. 10 集石 ($\%_{30}$)・焼土 ($\%_{40}$)・堀立柱建物址 ($\%_{40}$)

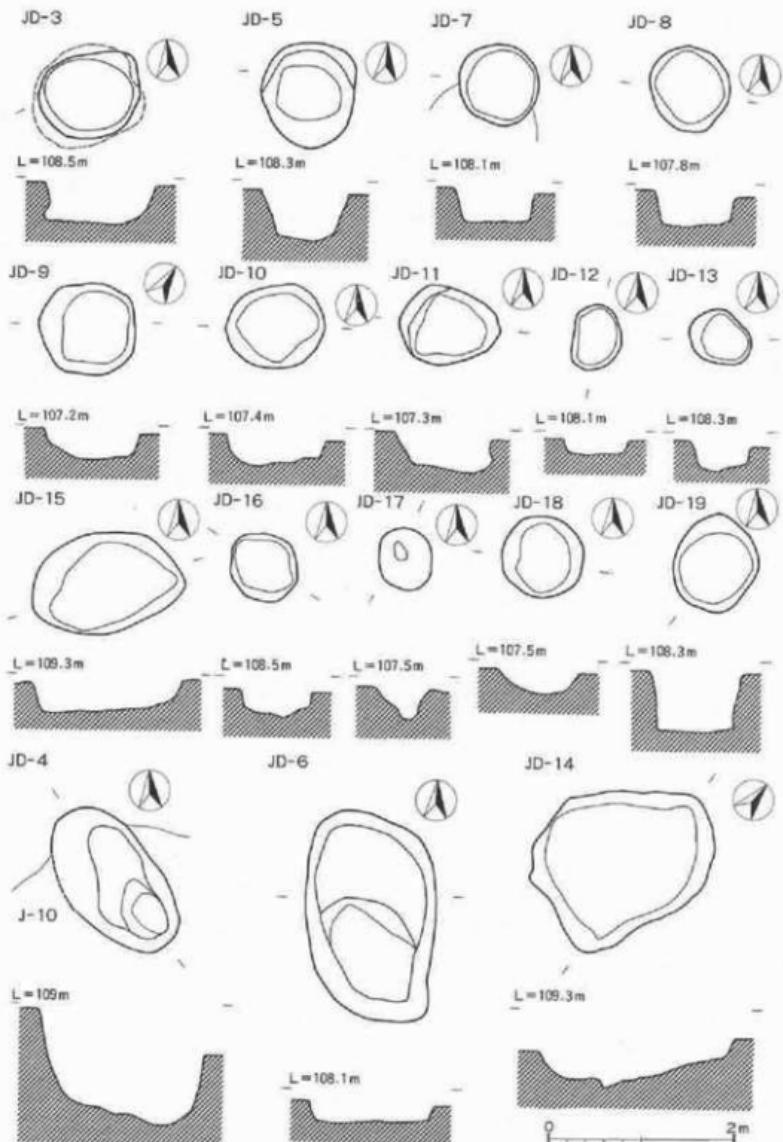


Fig. 11 土坑 (3/60)

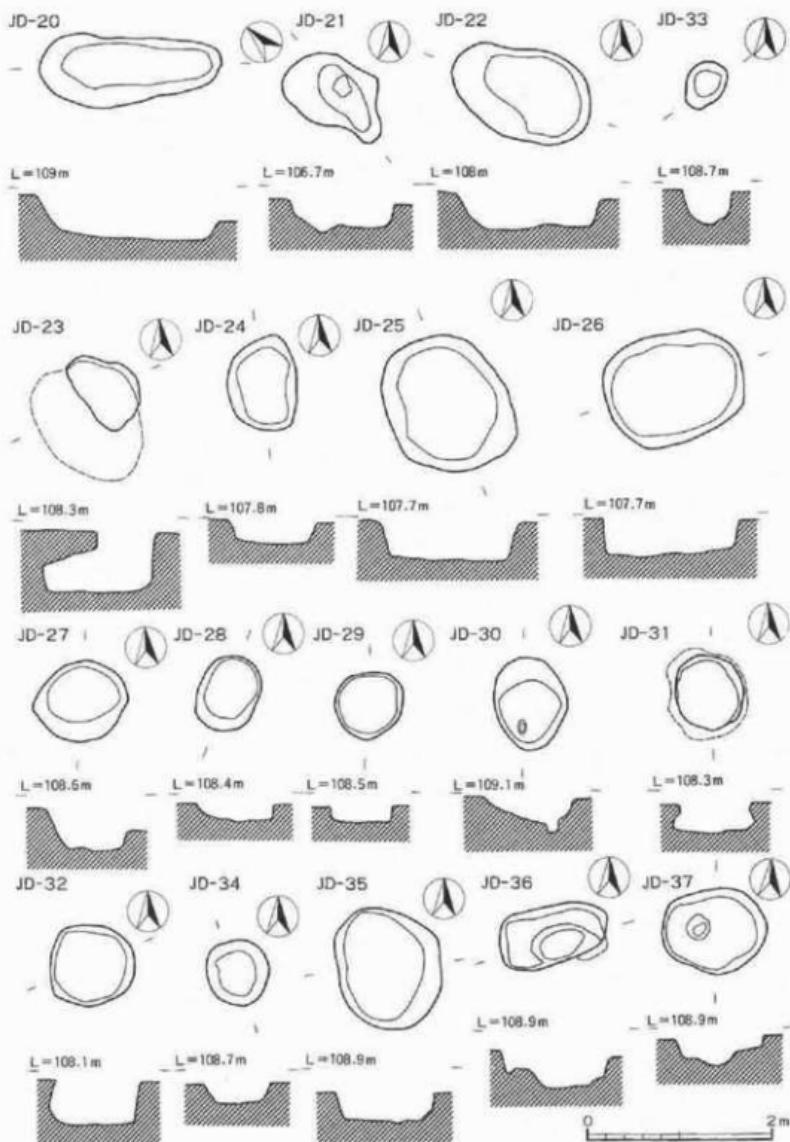


Fig. 12 土坑 (%)

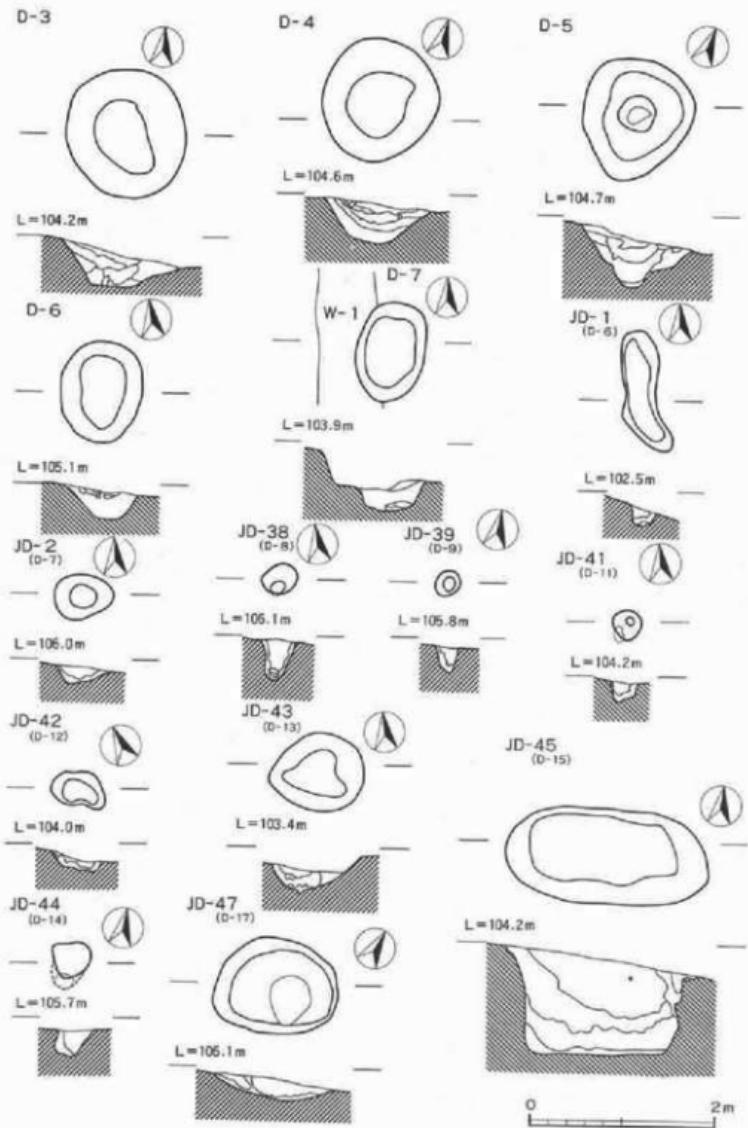


Fig. 13 土坑 (%)

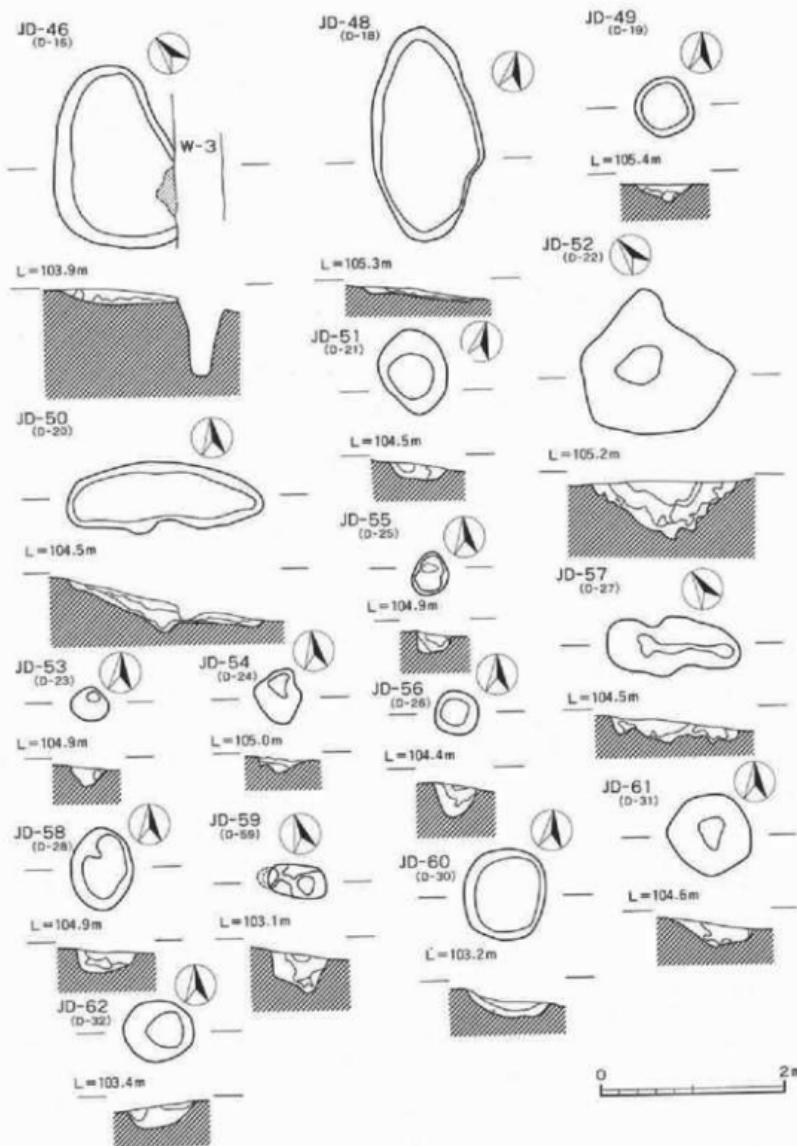


Fig. 14 土境 (%)

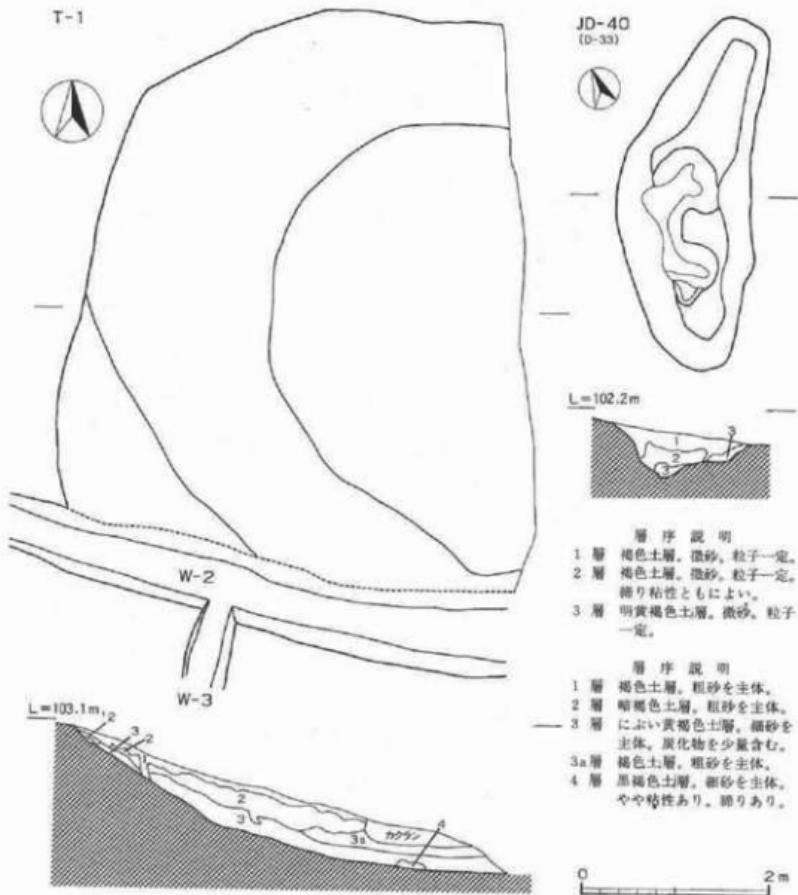


Fig. 15 土坑・竪穴状遺構 (1/60)

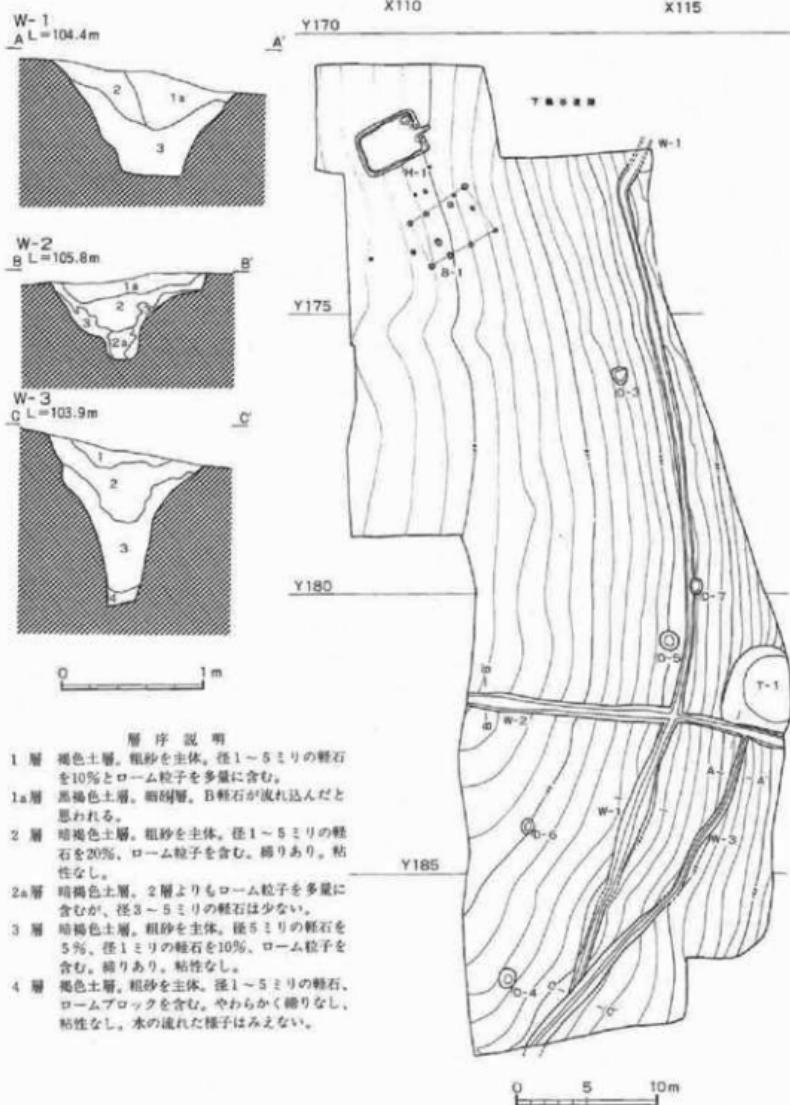


Fig. 16 溝跡 ($\frac{1}{400}$, $\frac{1}{400}$)

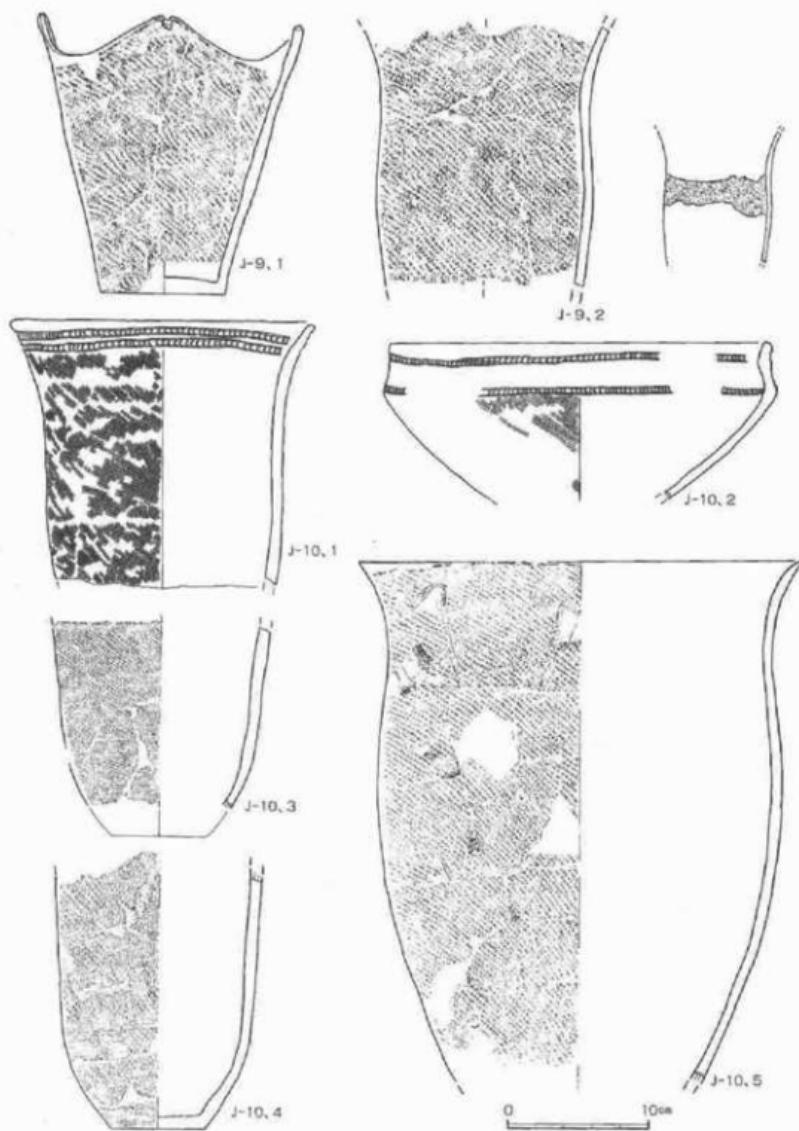


Fig. 17 J-9・10号住居址出土の土器 (34)

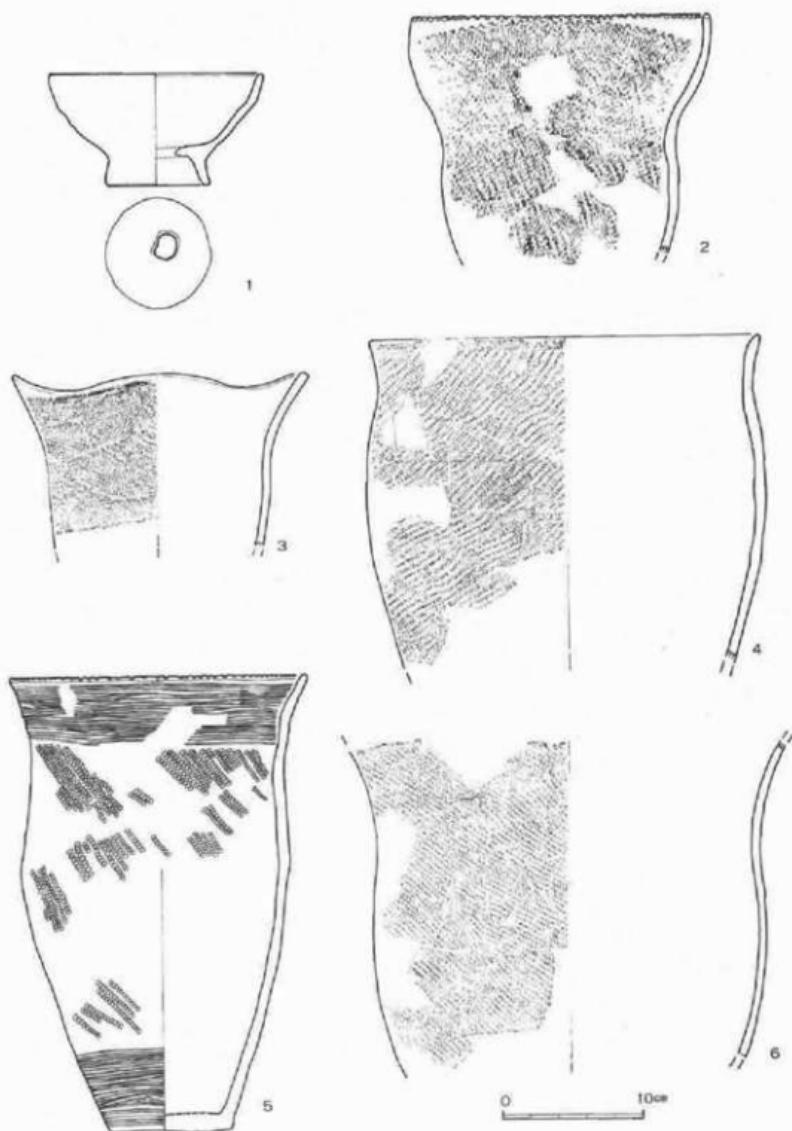


Fig. 18 J-11号住居址出土の土器 (1/4)

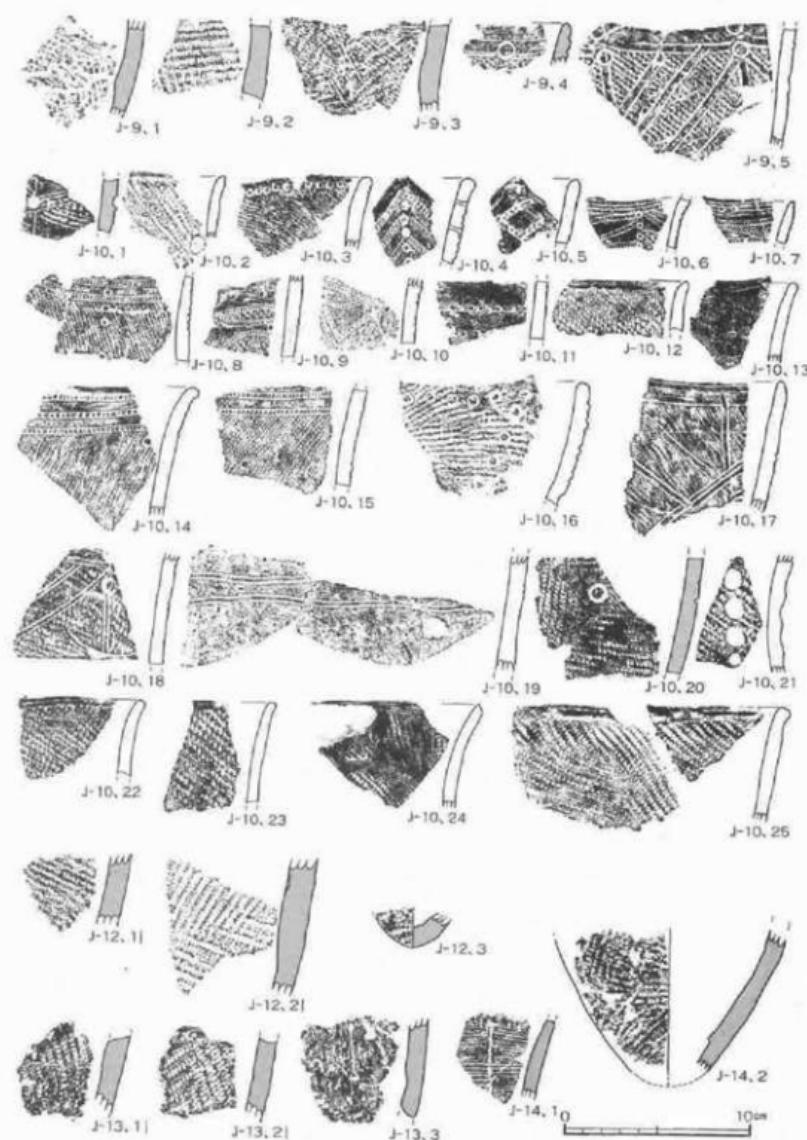


Fig. 19 住居跡出土の土器 (3/4)

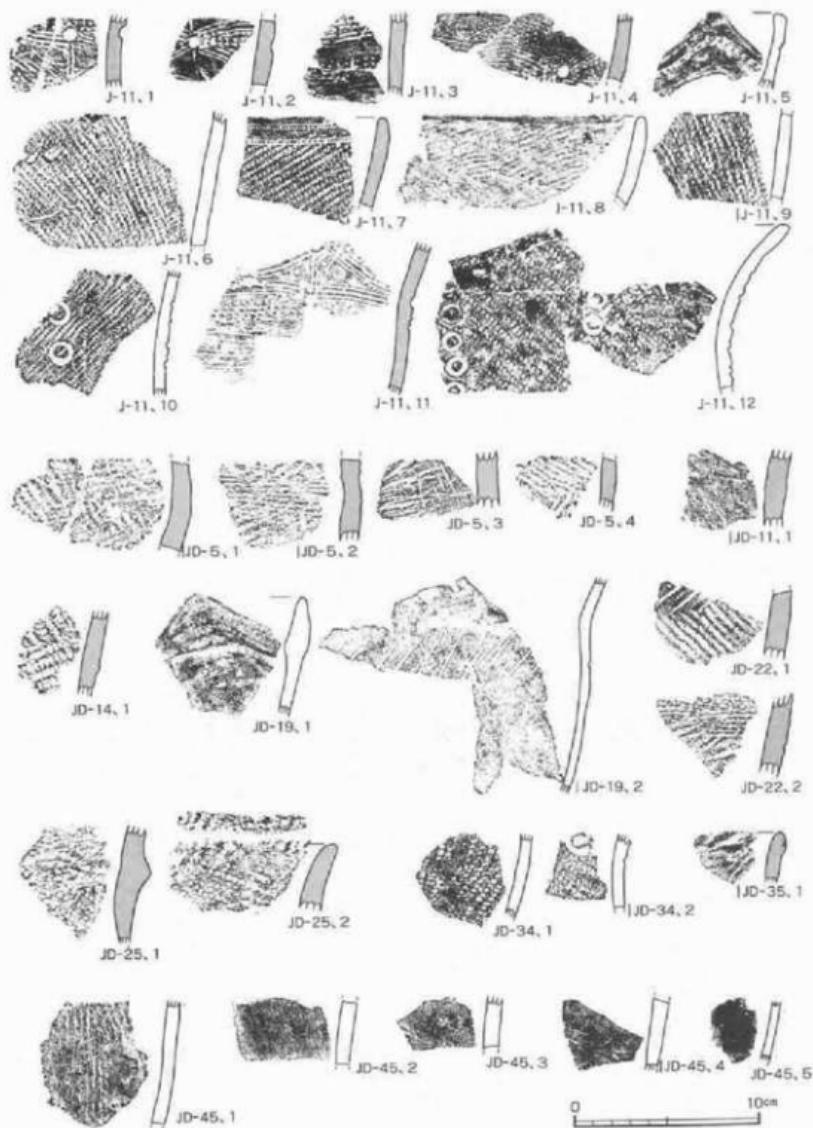


Fig. 20 J-11号住居址・土坑出土の土器 (1/2)

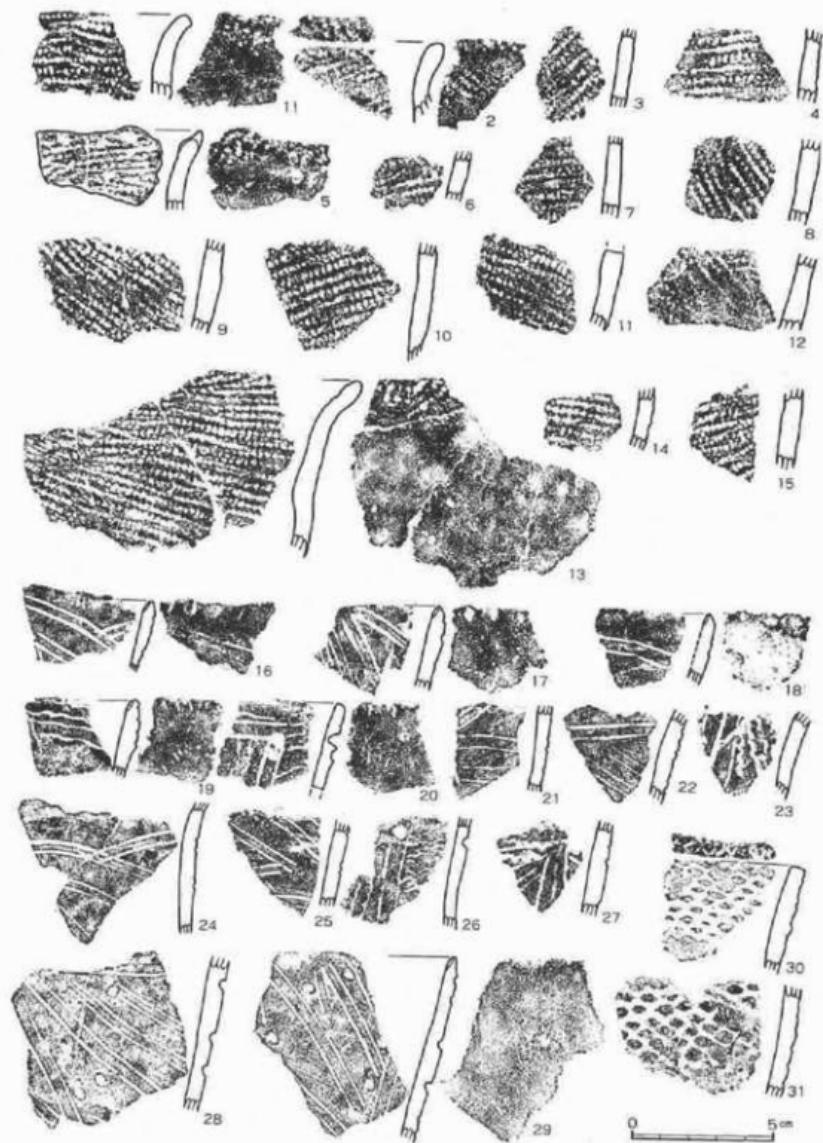


Fig. 21 I-V-VI群土28 (%)

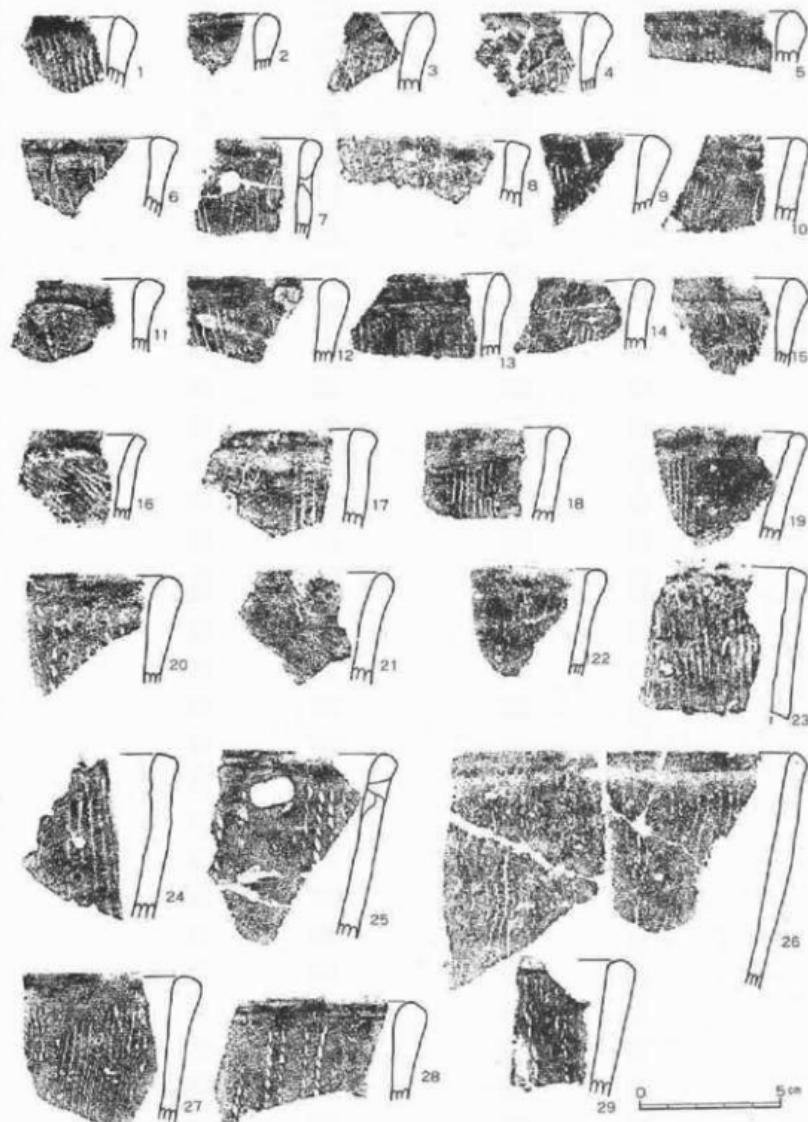


Fig. 22 II群土器 (1/2)

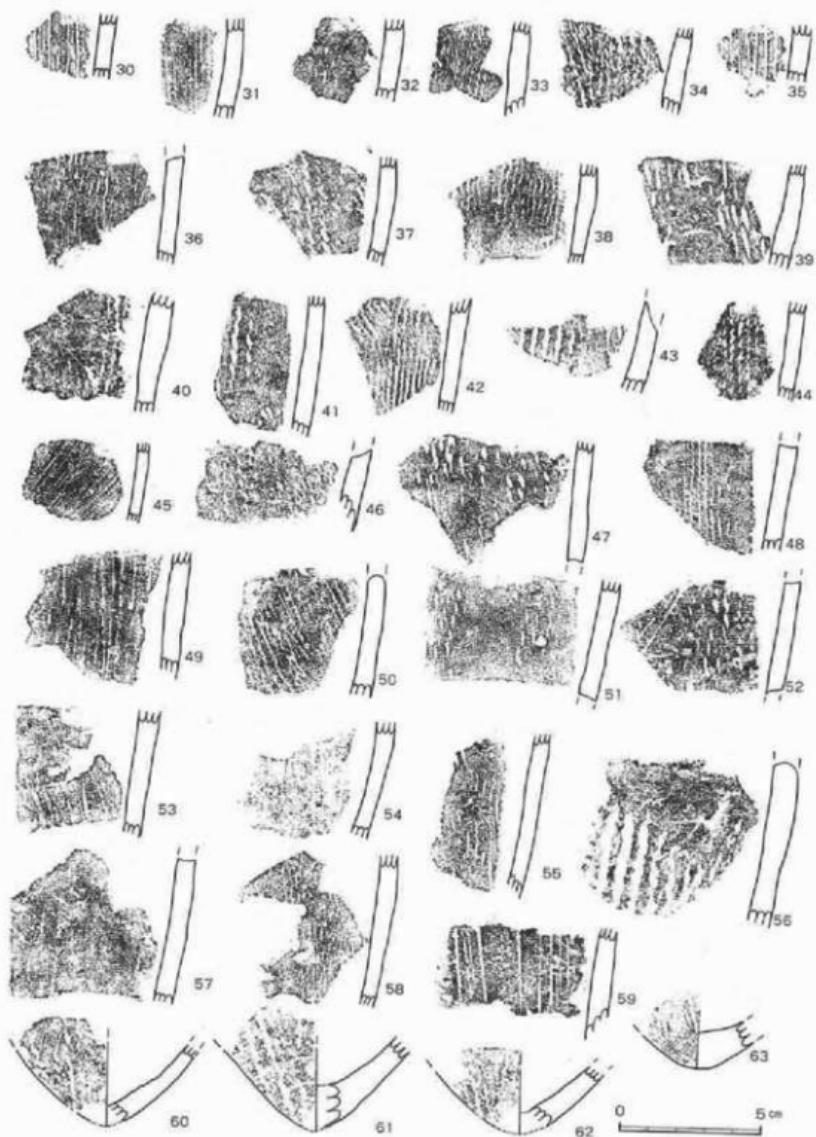


Fig. 23 II群土器 (36)

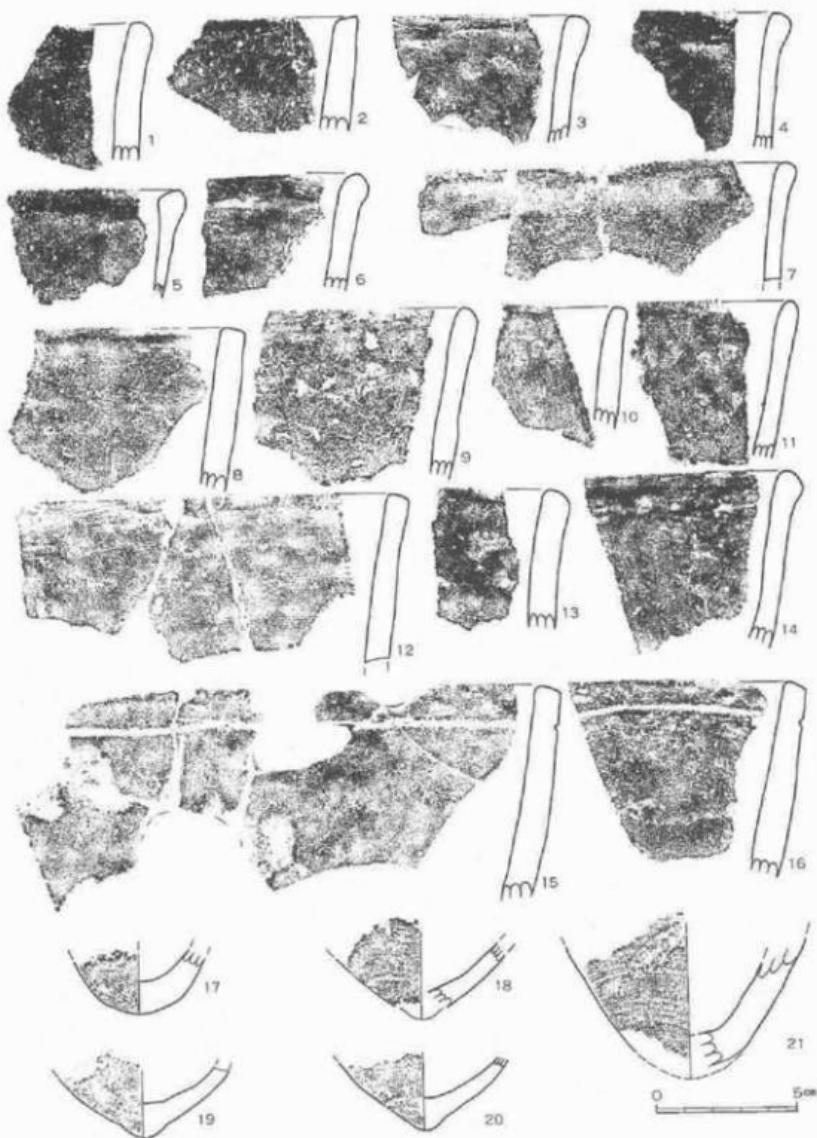


Fig. 24 田群土器 (1/2)

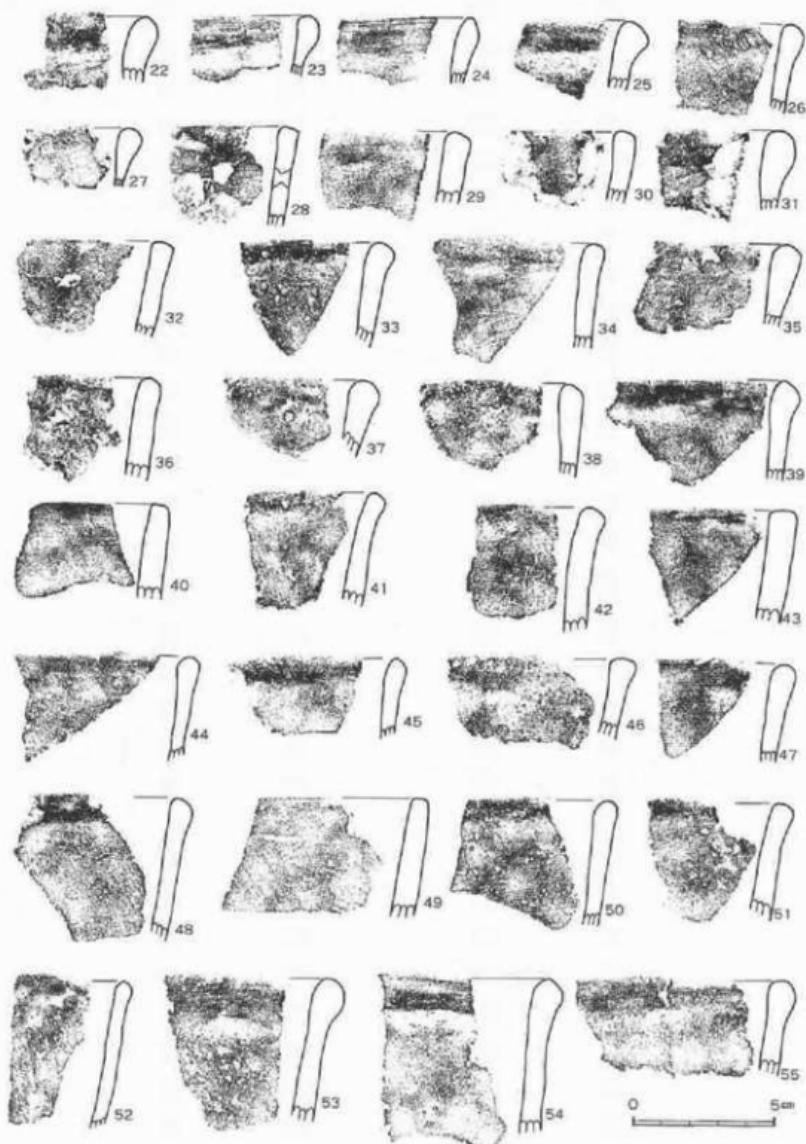


Fig. 25 田群土器 (1/2)

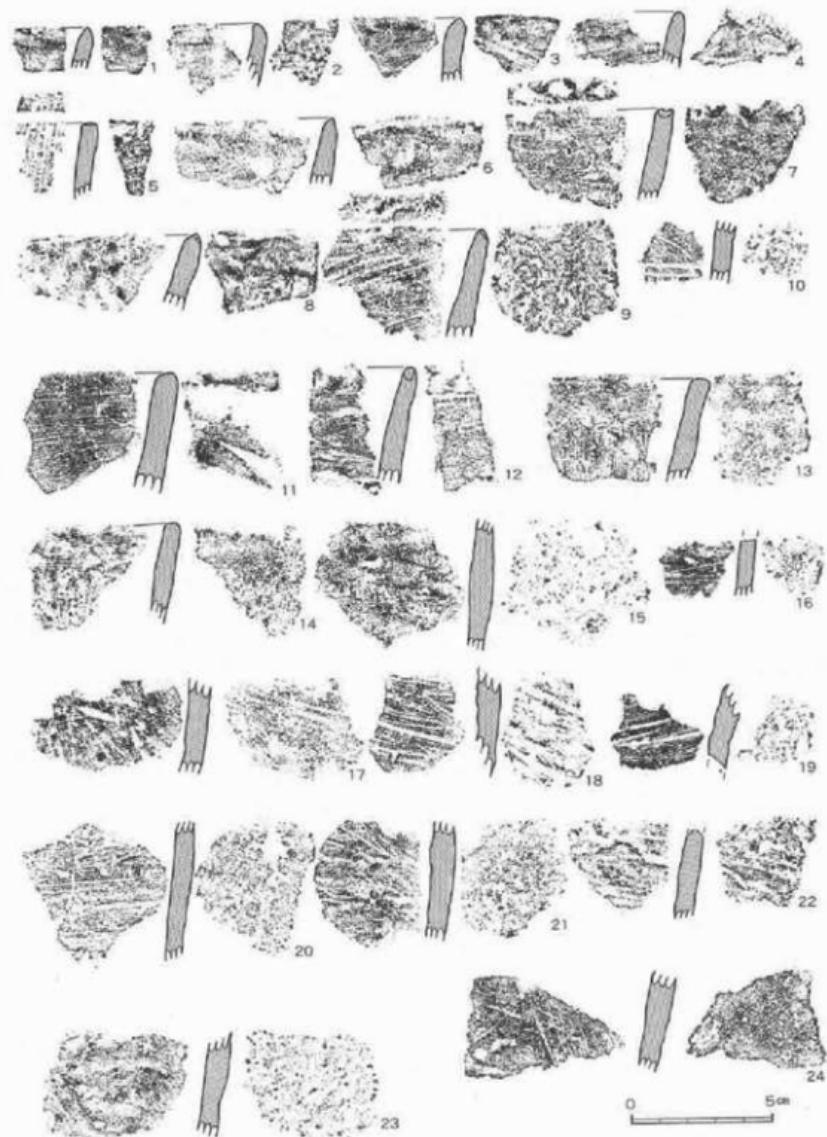


Fig. 26 N群土器 (2)

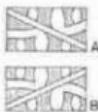
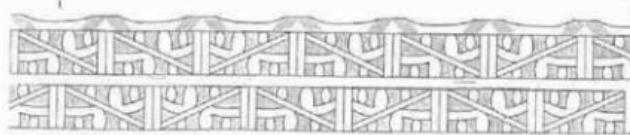
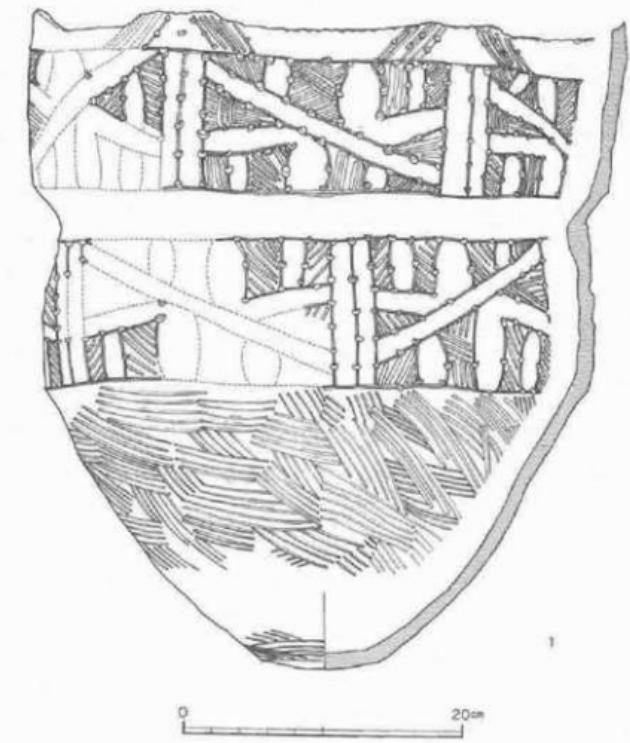


Fig. 27 青铜土器 (M)

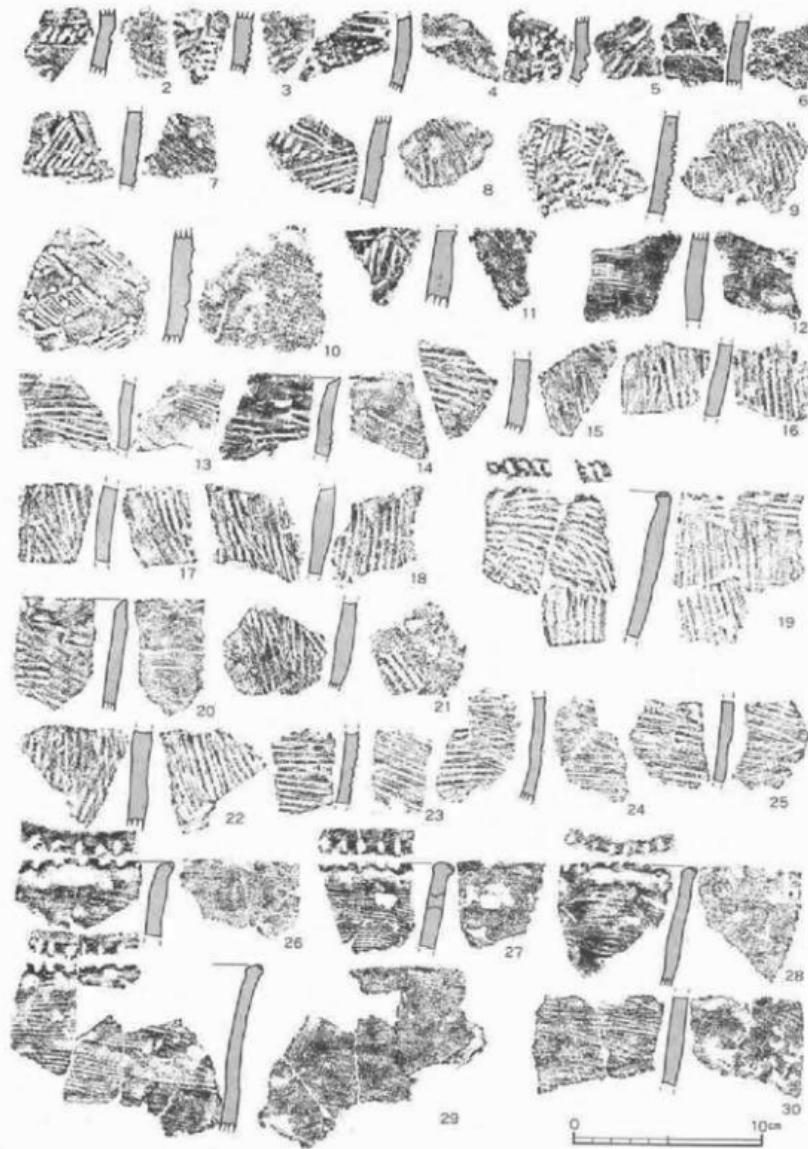


Fig. 28 VII群土器 (1)

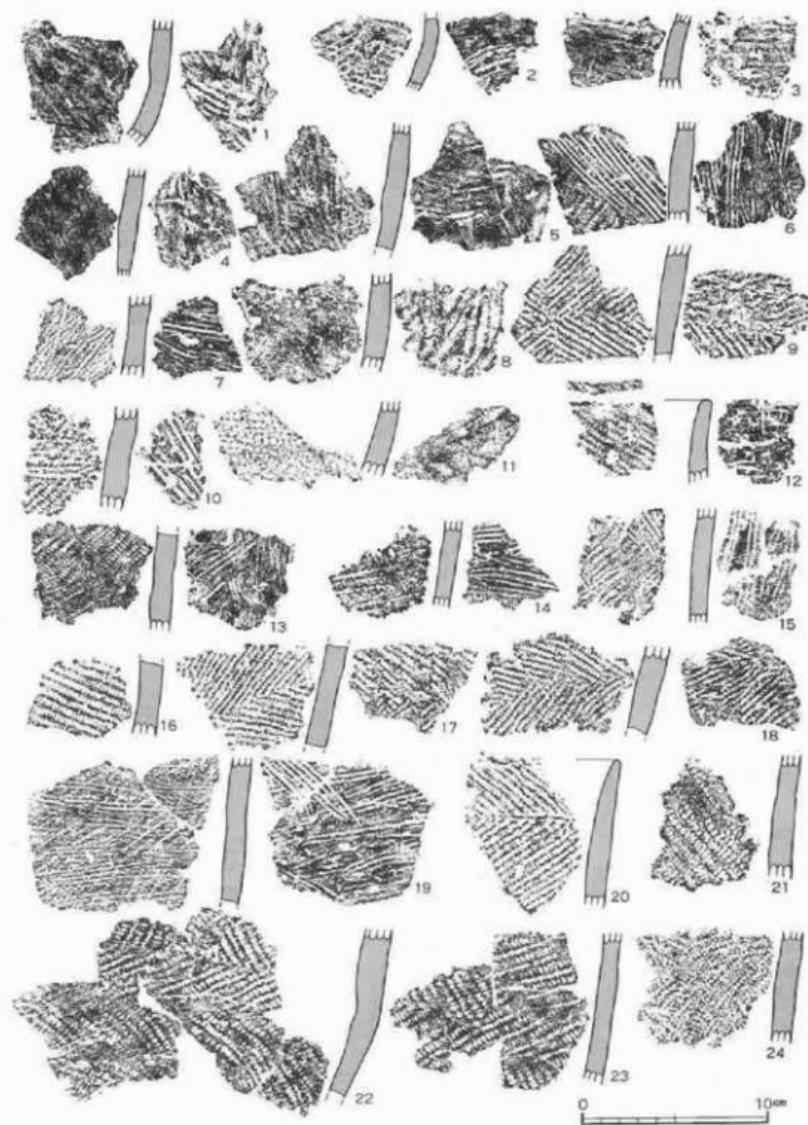


Fig. 29 VII群土器 (36)

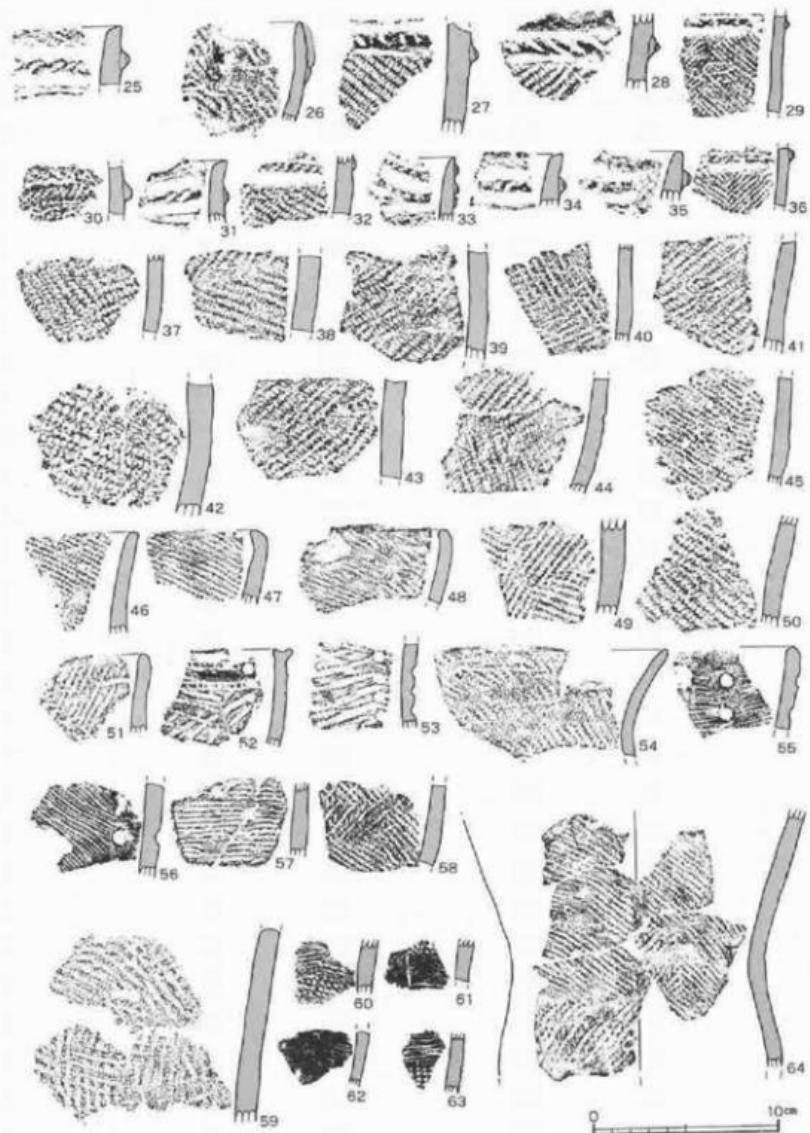


Fig. 30 四群土器 (%)

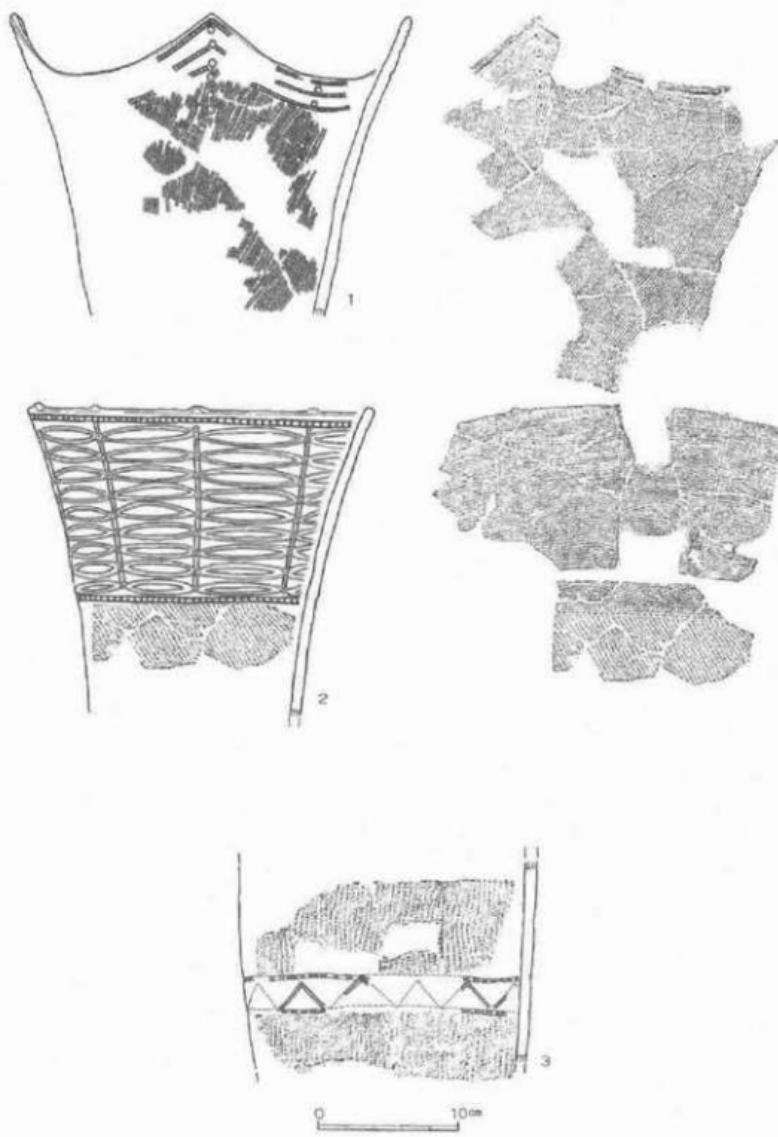


Fig. 31 江群土器 (3/4)

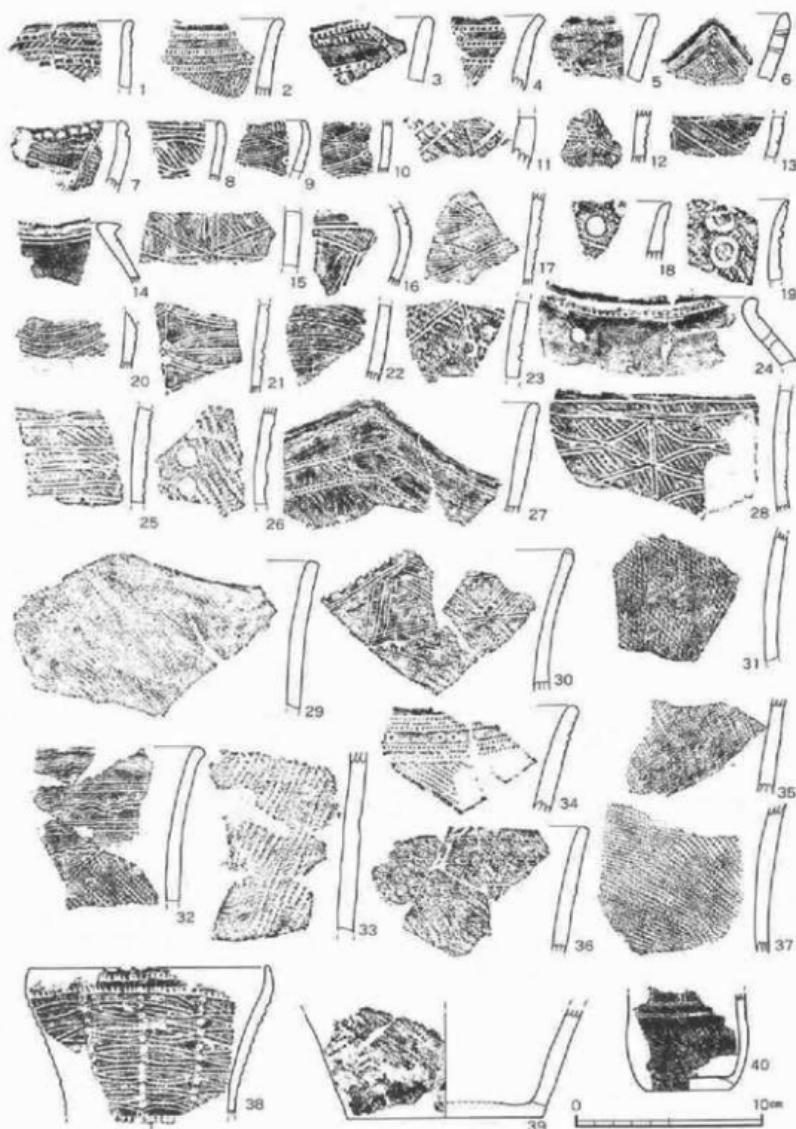


Fig. 32 江塘土器 (%)

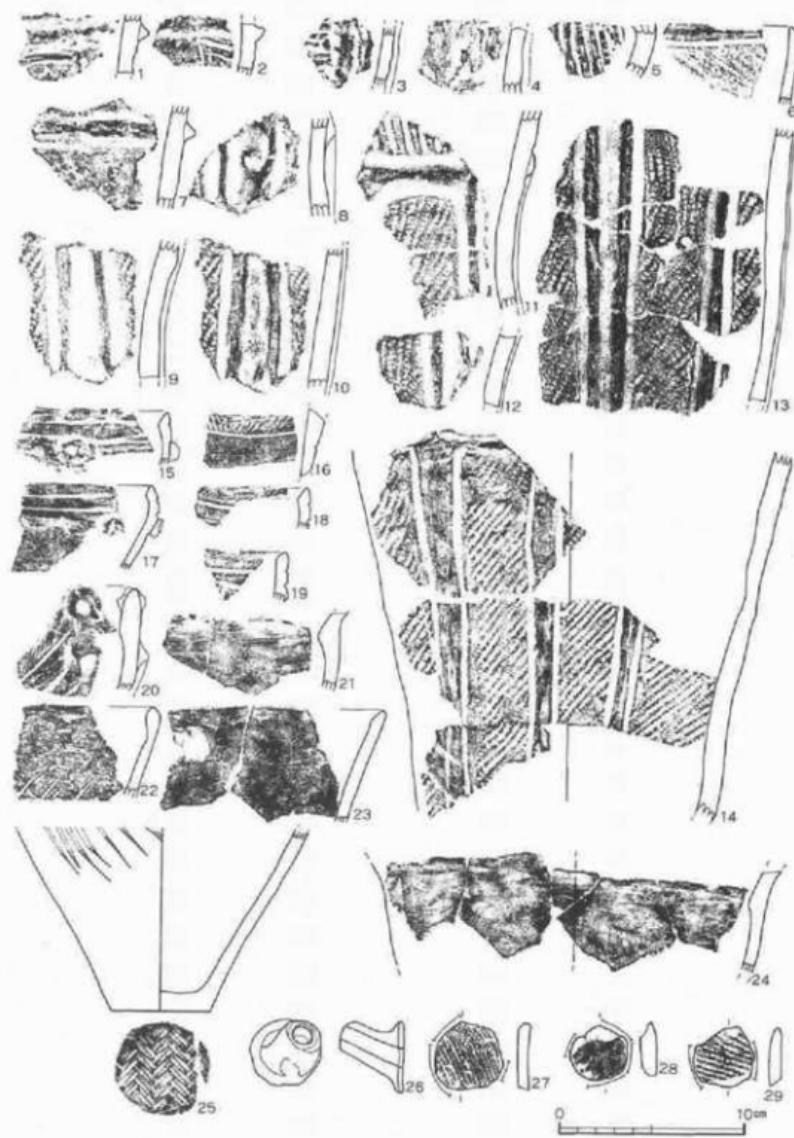


Fig. 33 X-XI群土器・土製円盤(片)

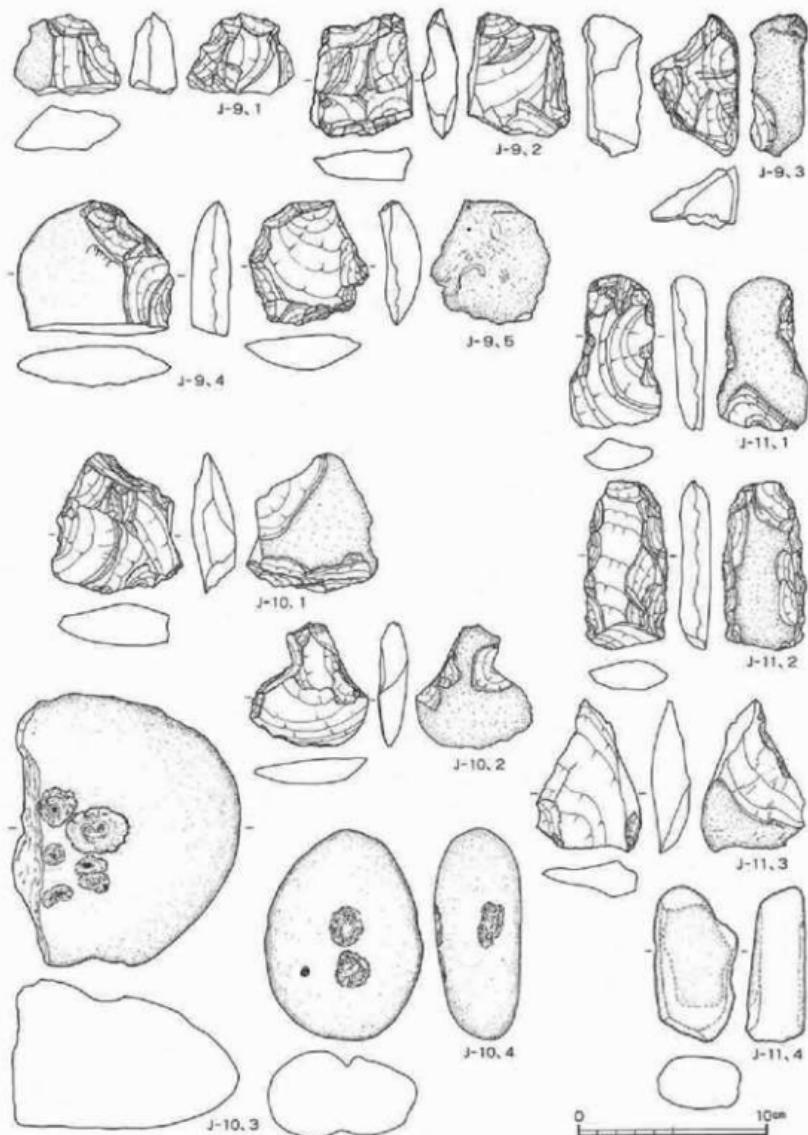


Fig. 34 住居址出土の石器 (J)

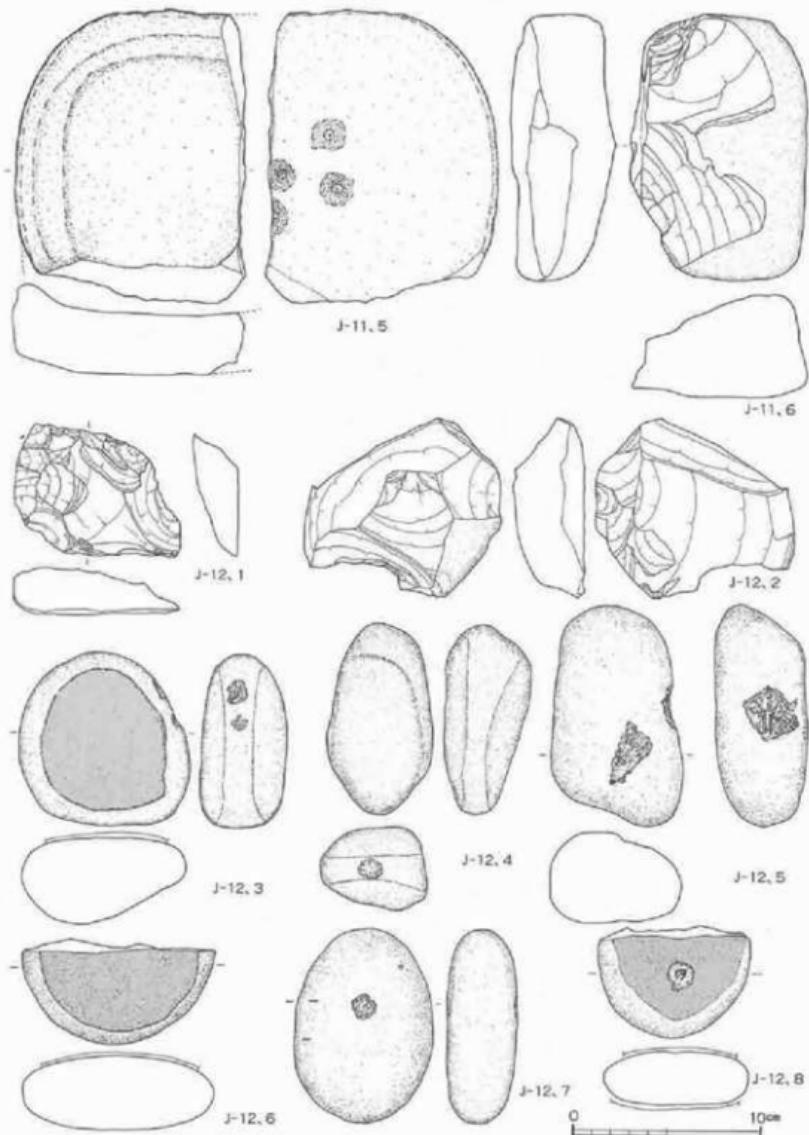


Fig. 35 住居址出土の石器 (1/2)

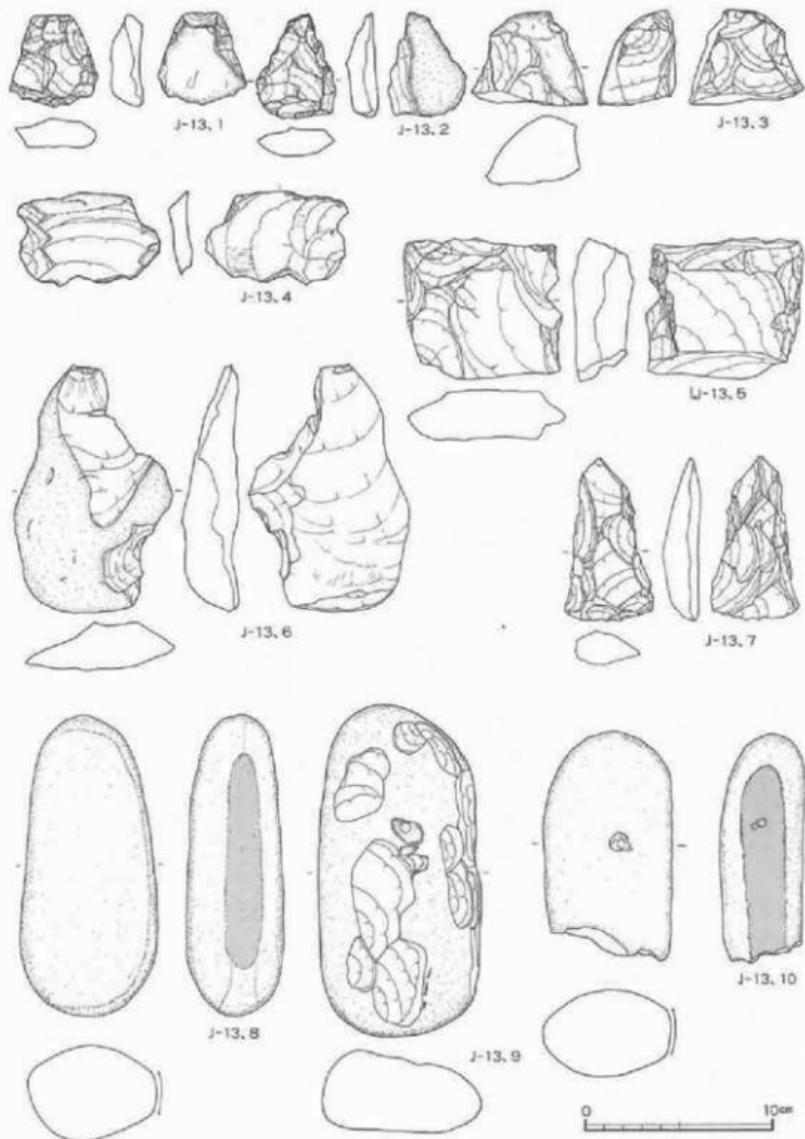


Fig. 36 住居址出土の石器(?)

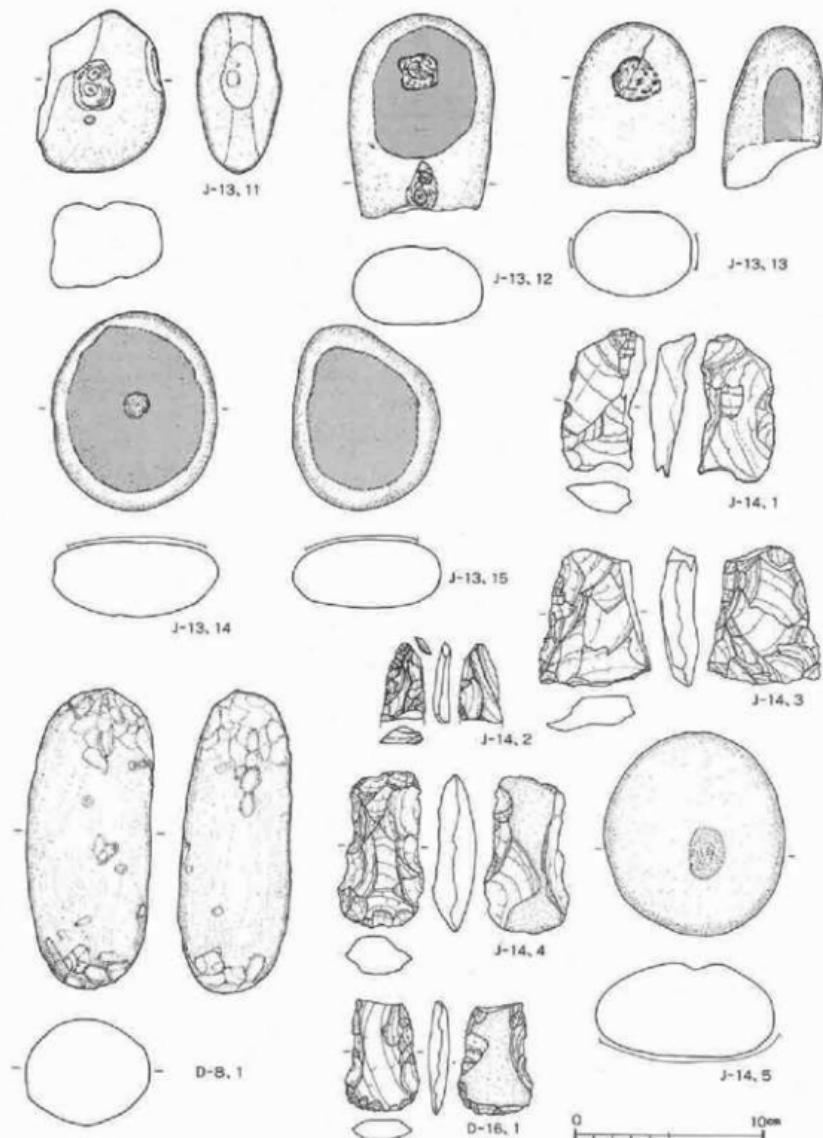


Fig. 37 住居址・土坑出土の石器 (1/6)

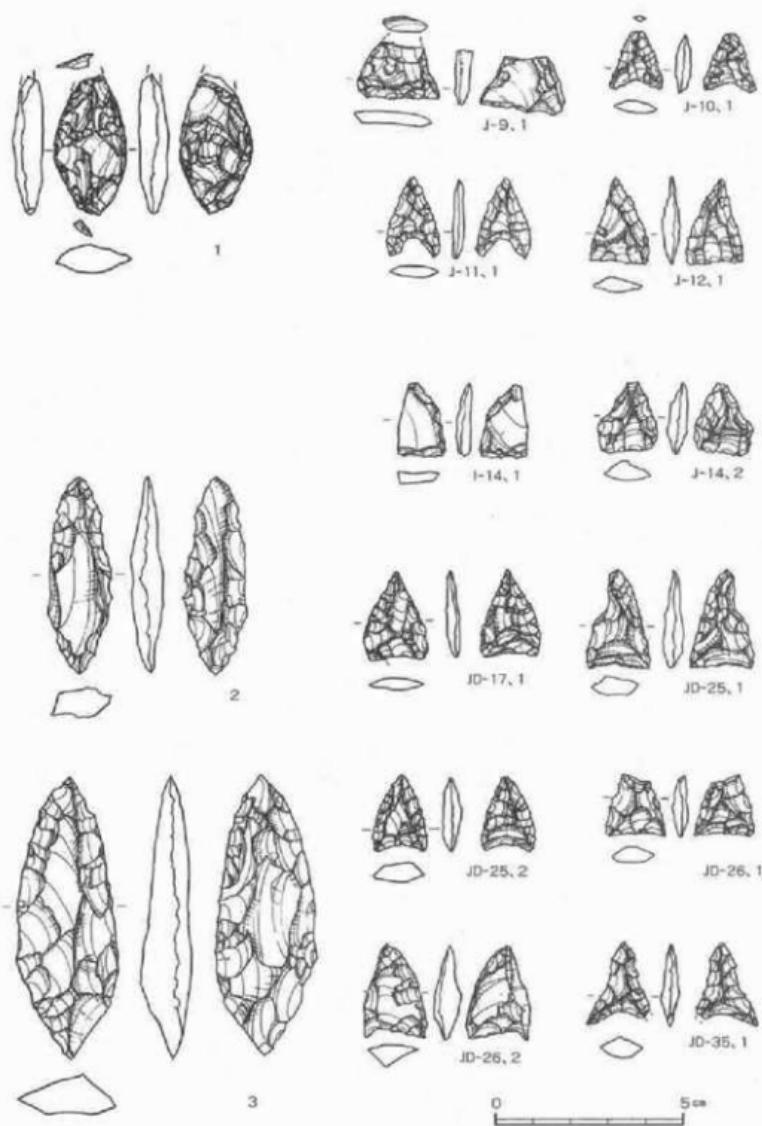


Fig. 38 尖頭器・石鏃 (2)

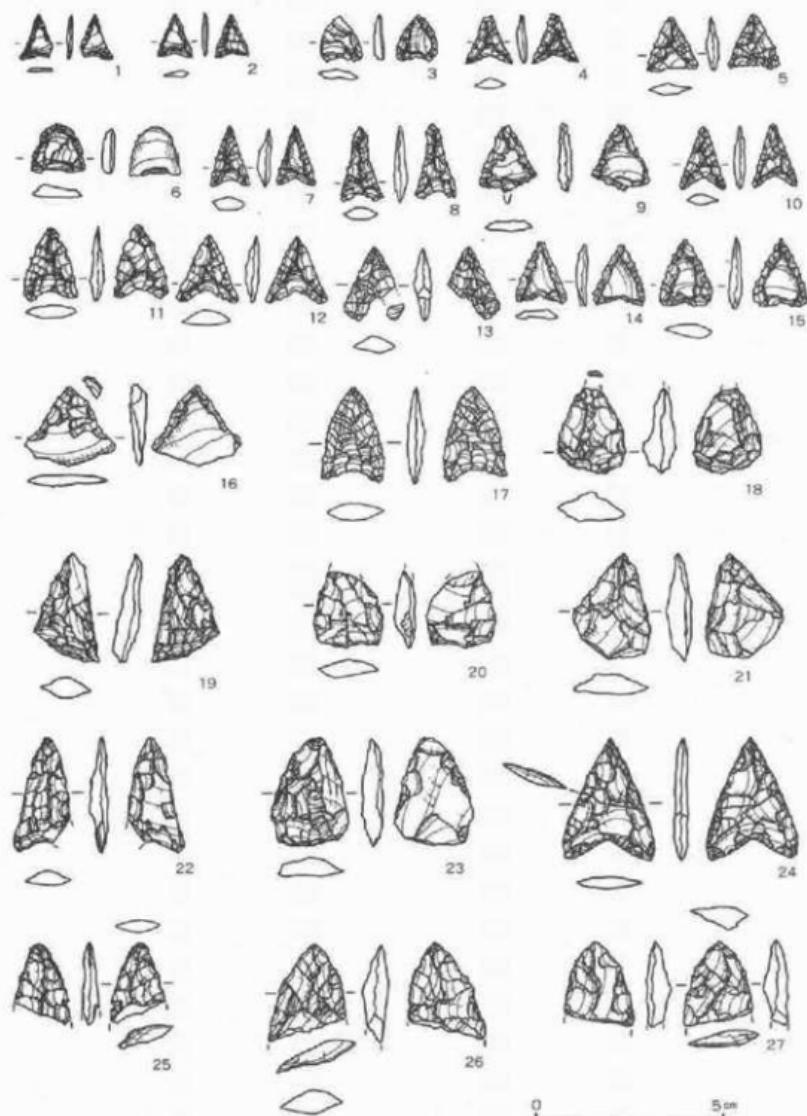


Fig. 39 石器 (%)

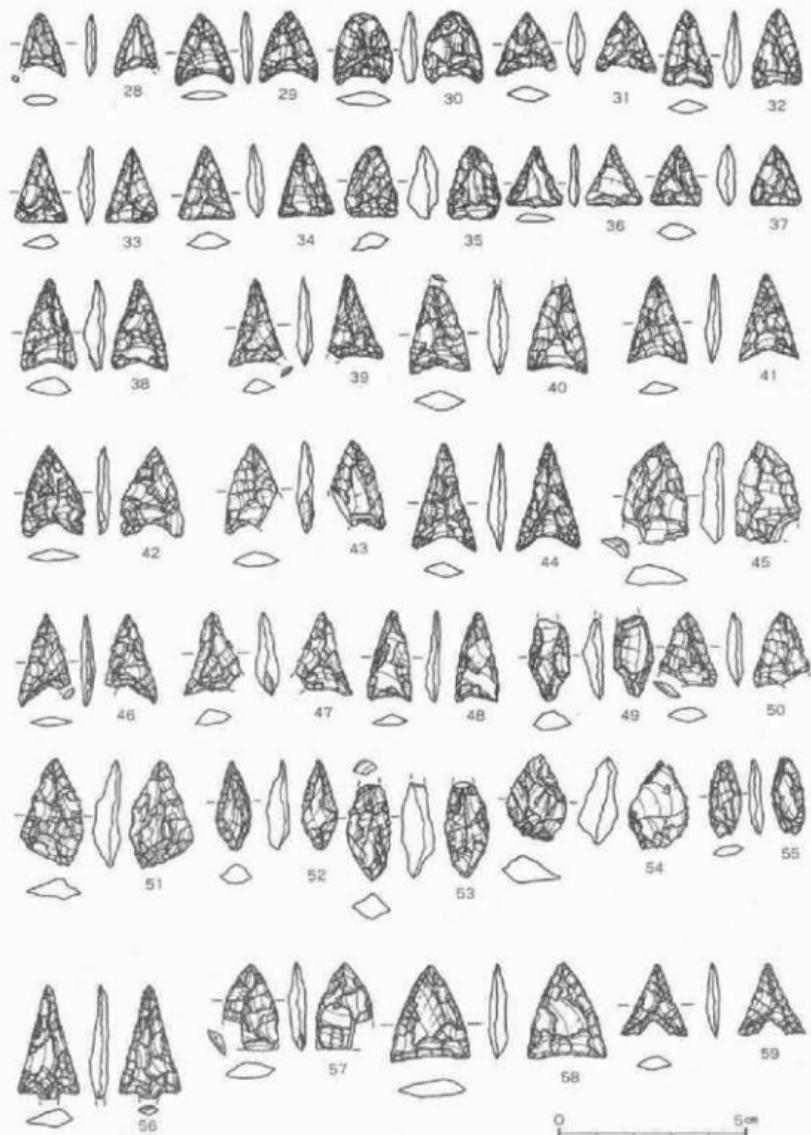


Fig. 40 石鱗 (%)

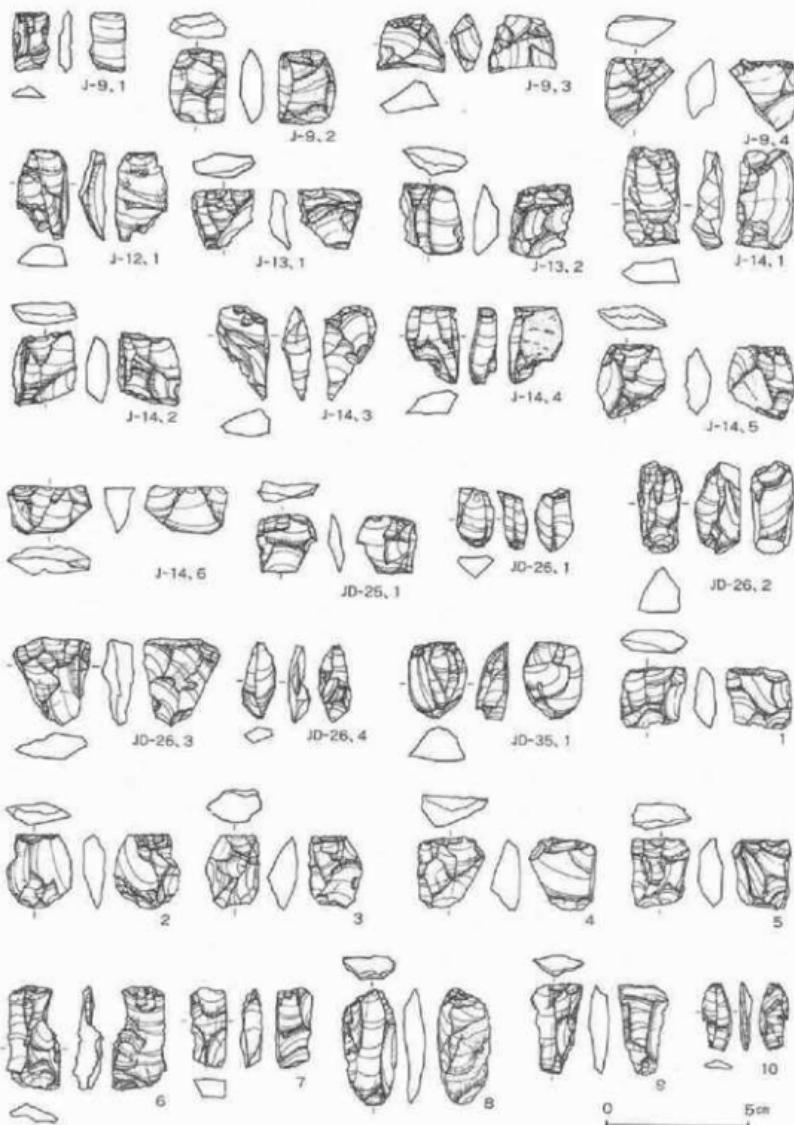


Fig. 41 ピエス・エスキュー (%)

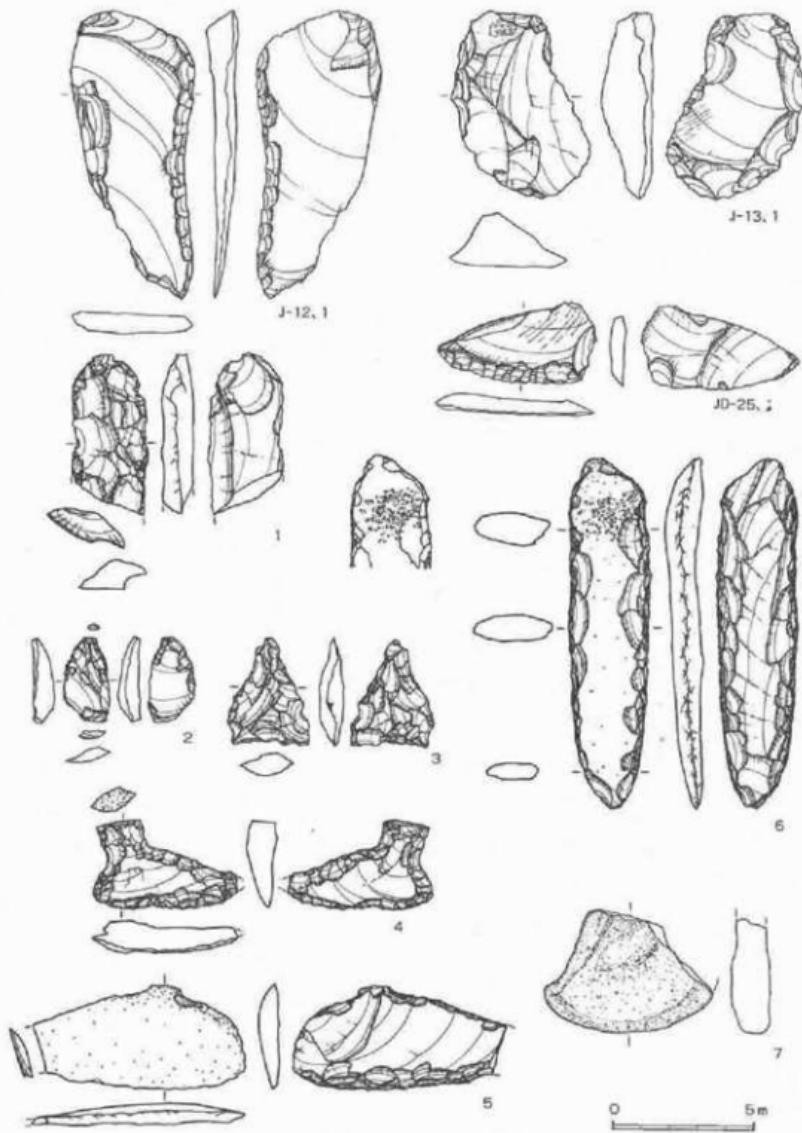


Fig. 42 スクレイパー・その他 (36)

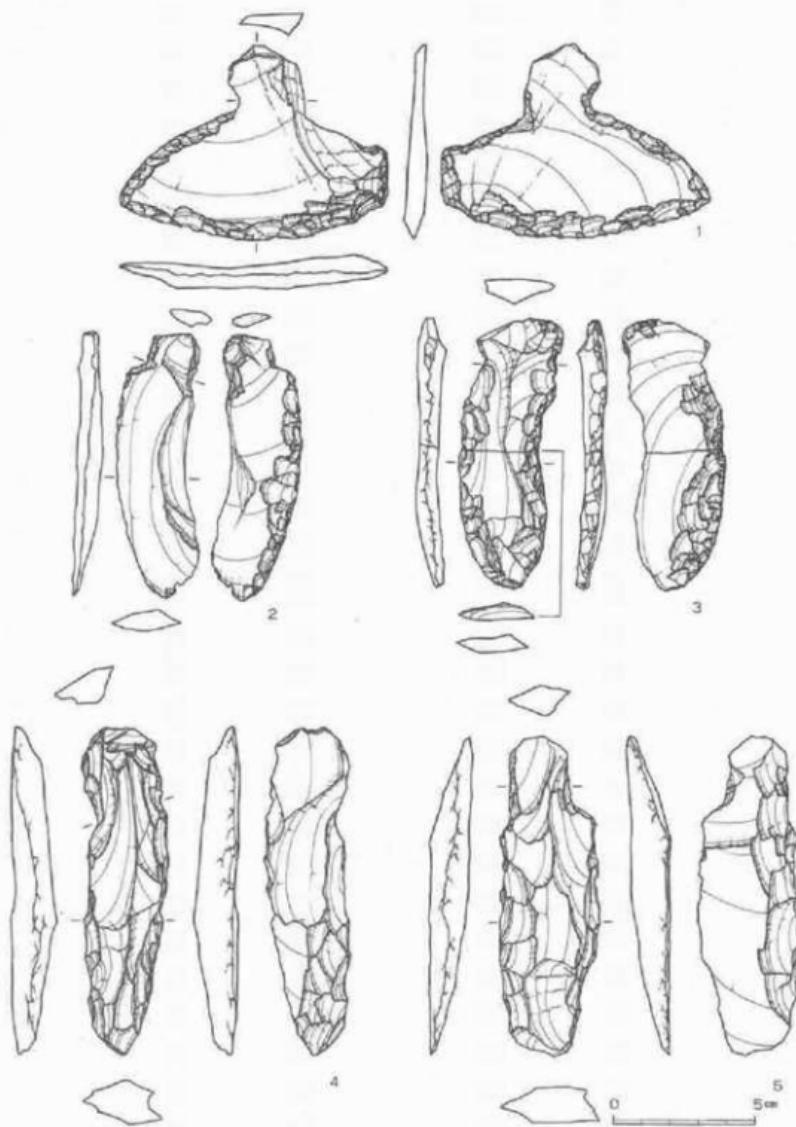


Fig. 43 石匙 (3/2)

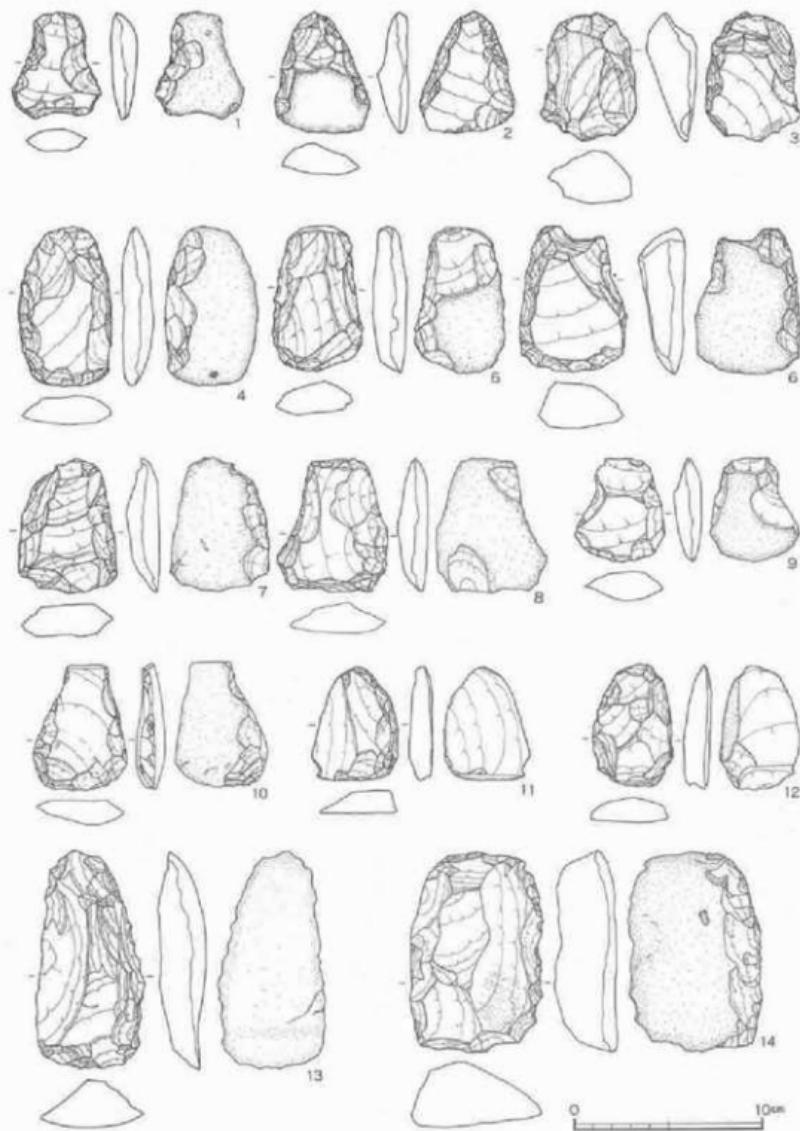


Fig. 44 打製石斧類 (石斧)



Fig. 45 打製石斧類 (3)



Fig. 46 打製石器類 (%)



Fig. 47 打製石斧類・石核・磨製石斧(3/5)・石皿(3/6)

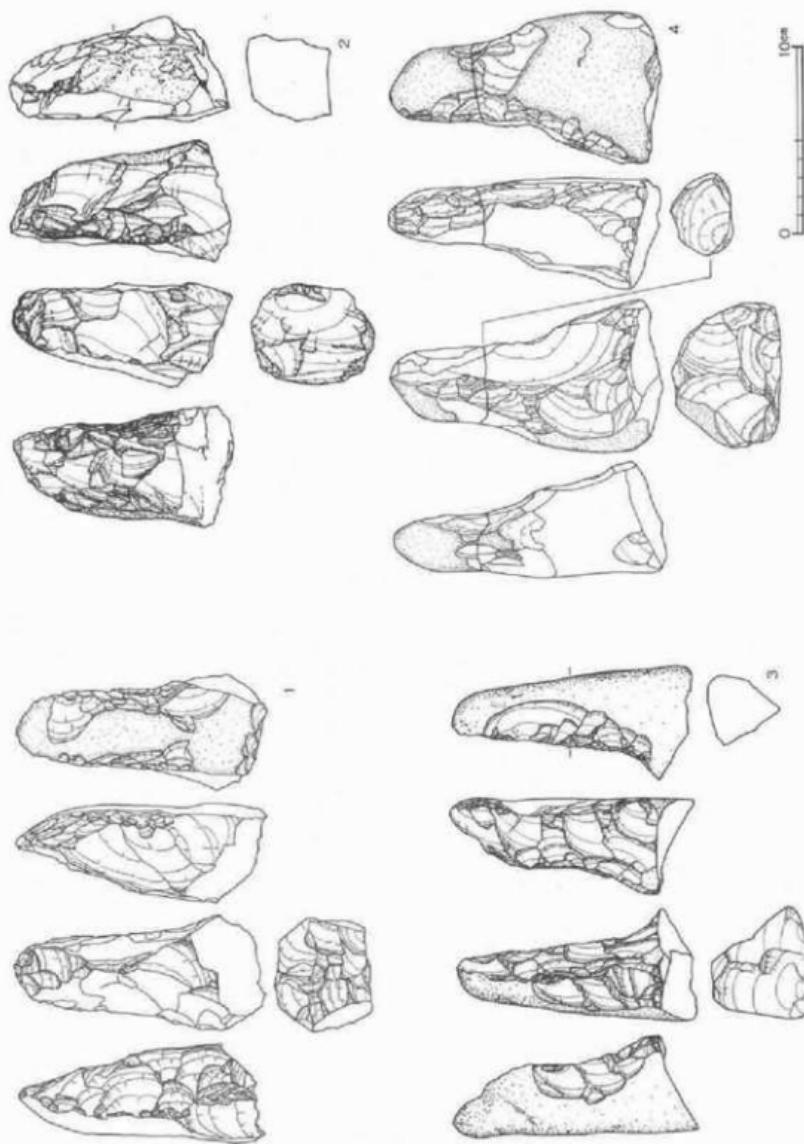


Fig. 48 三角锥形石器 (%)

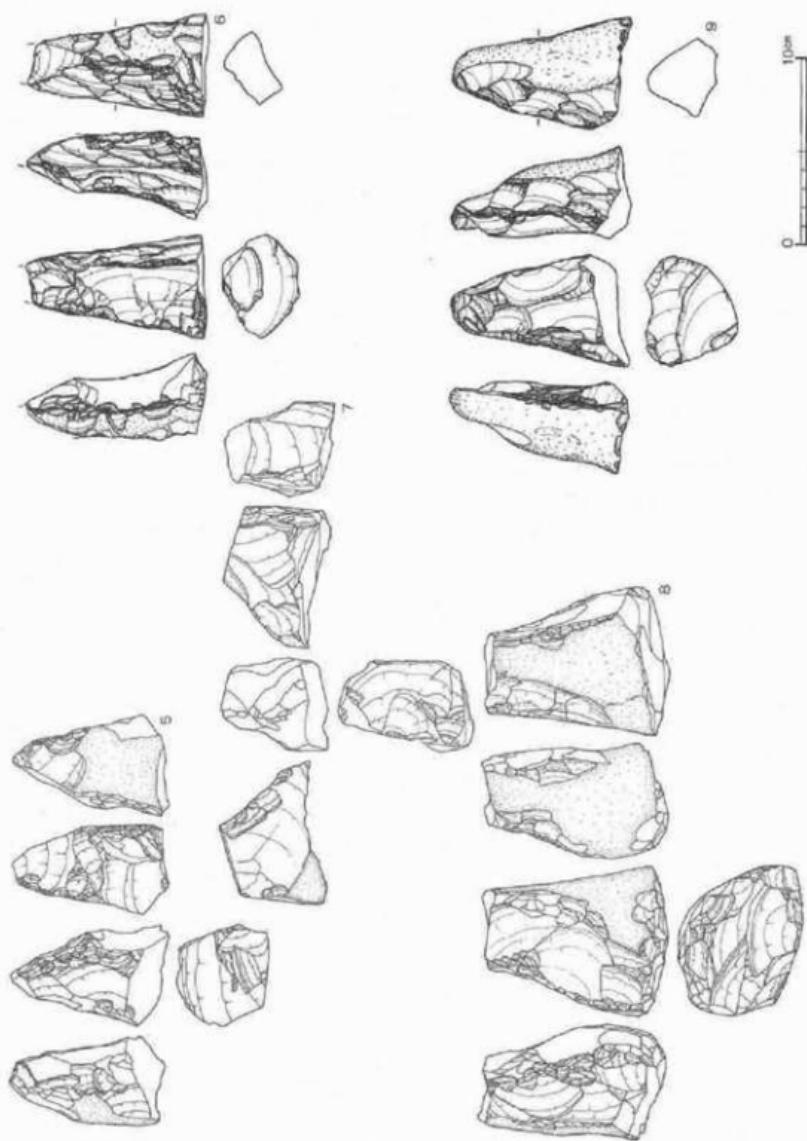


Fig. 49 三角锥形石器 (1/6)

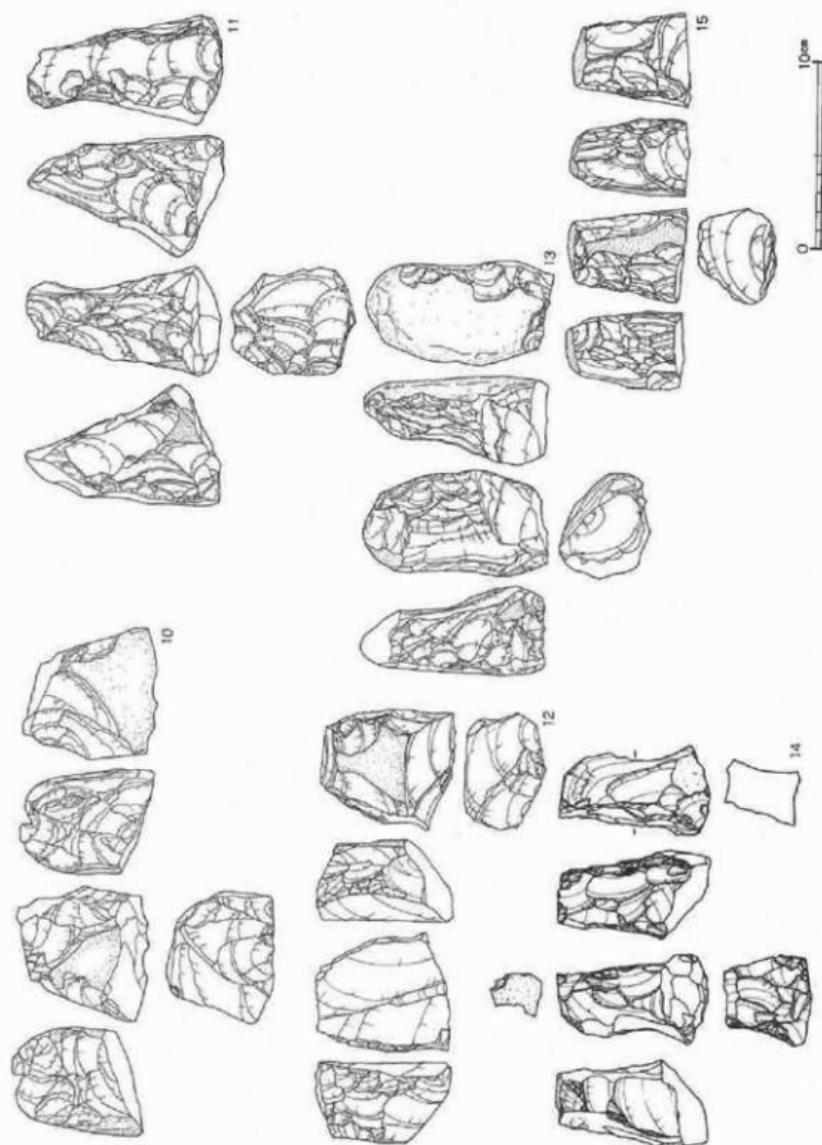


Fig. 50 三角锥形石器 (15)

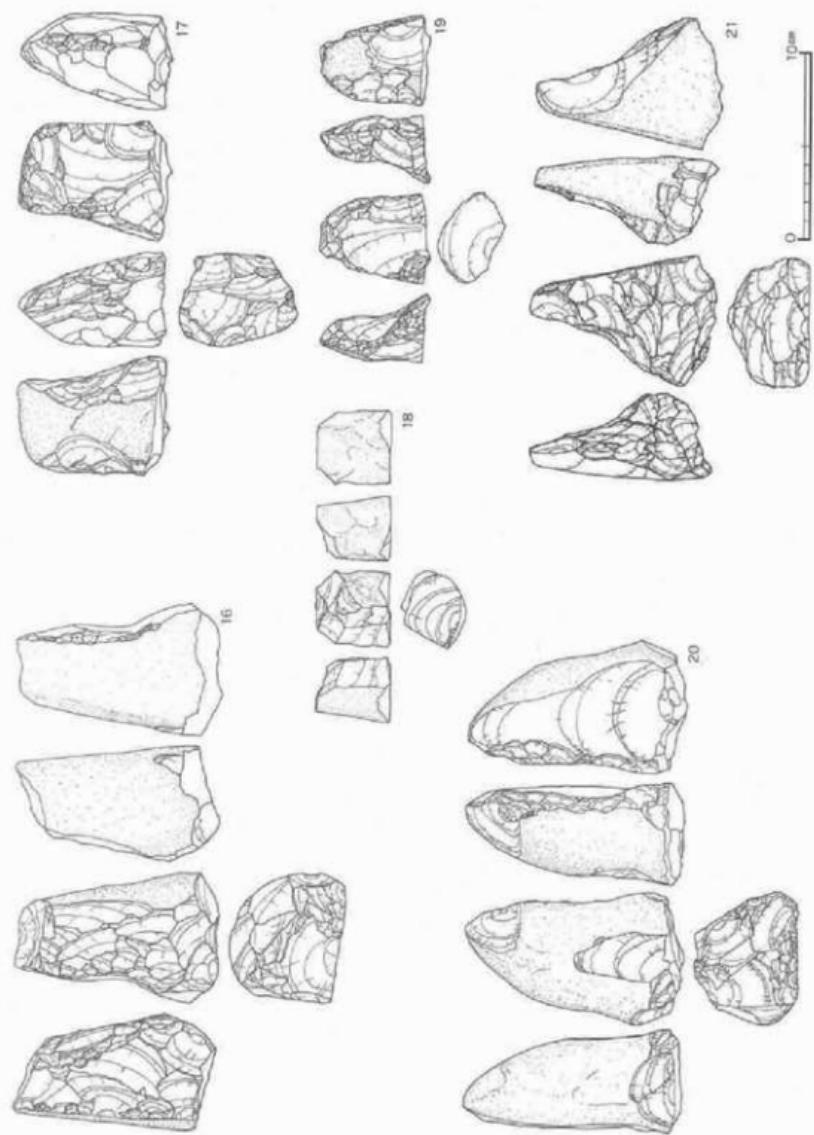


Fig. 51 三角錐形石器 (2)



Fig. 52 三角錐形石器 (2/6)

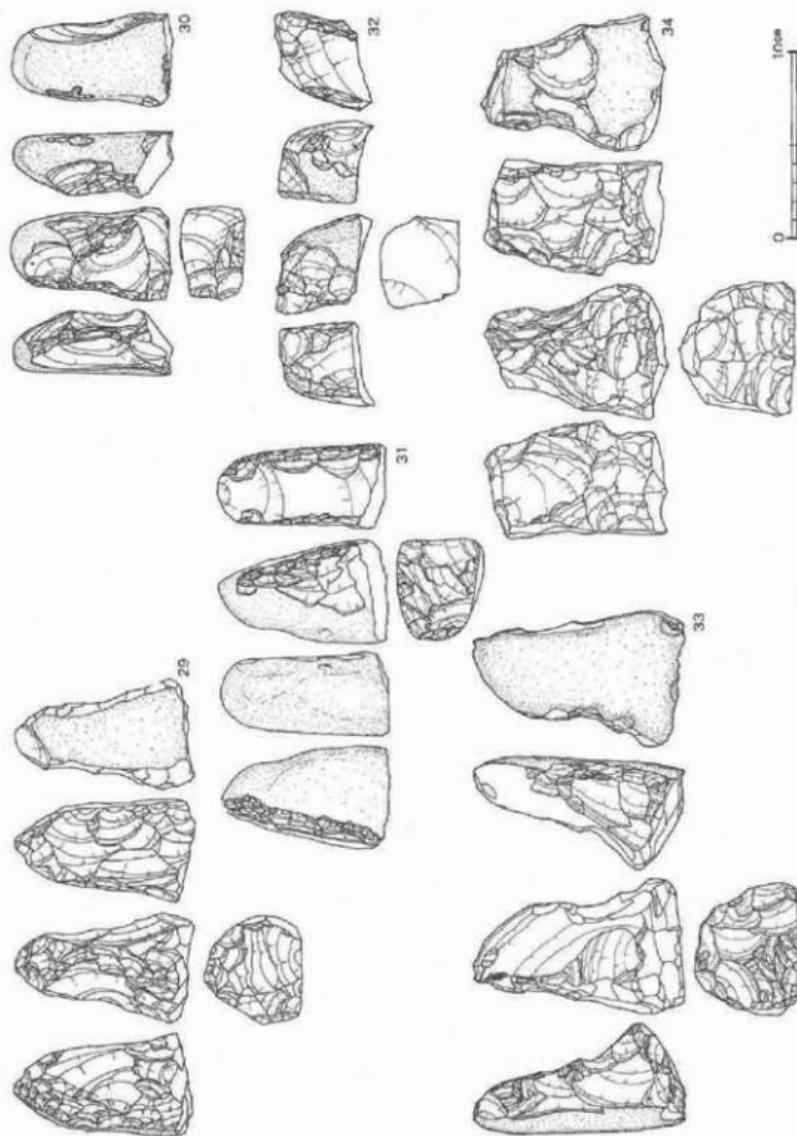


Fig. 53 三角锥形石器 (24)



Fig. 54 三角錐形石器 (36)

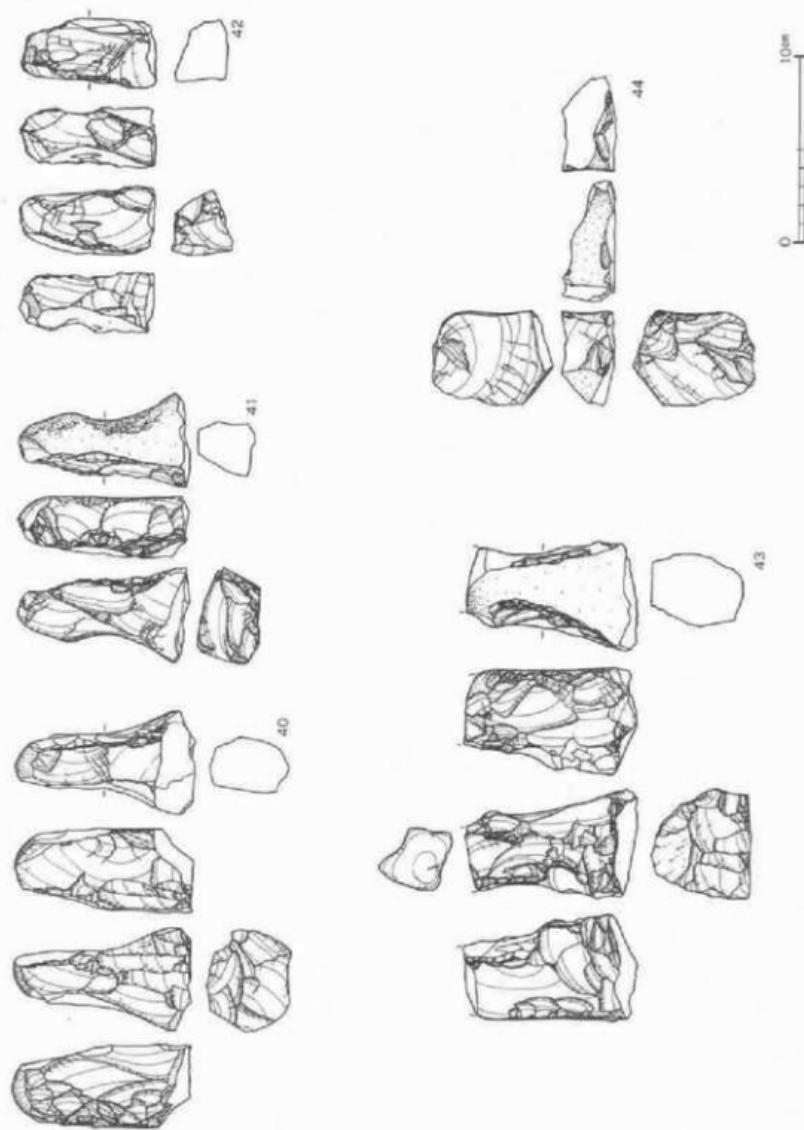


Fig. 55 三角錐形石器 (3)

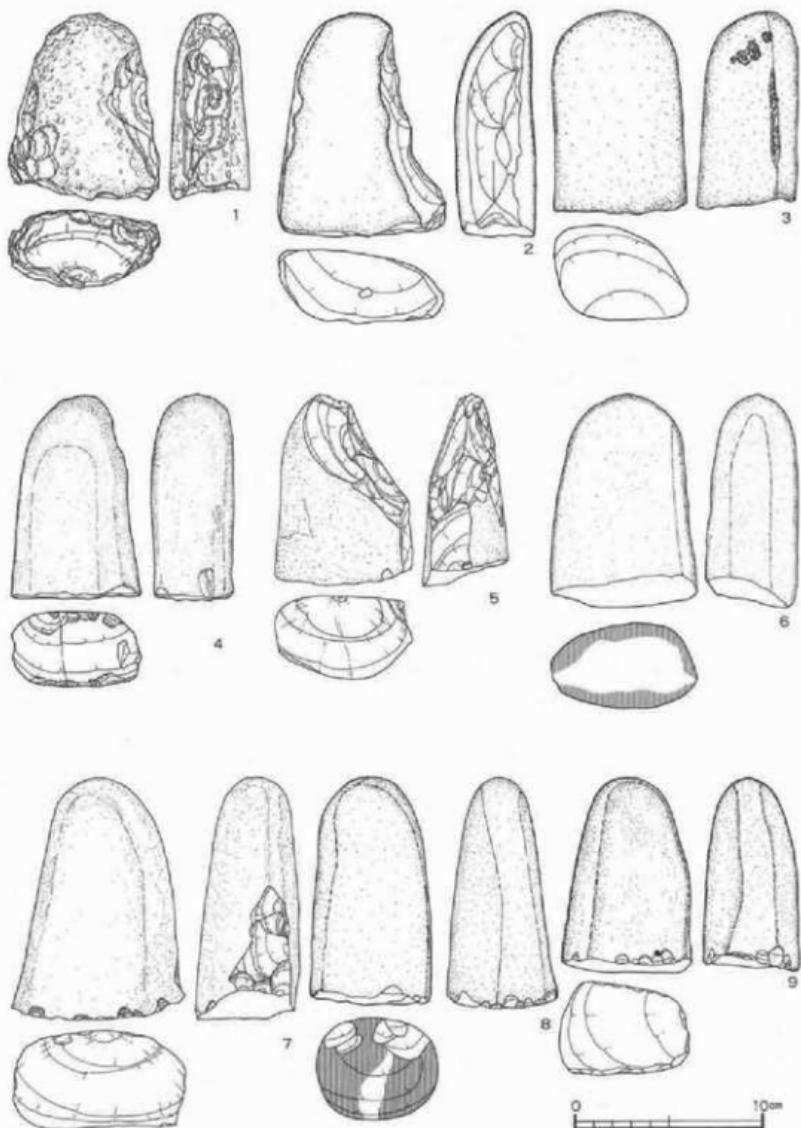


Fig. 56 スタンプ形石器 (3)



Fig. 57 スタンプ形石器 (3)

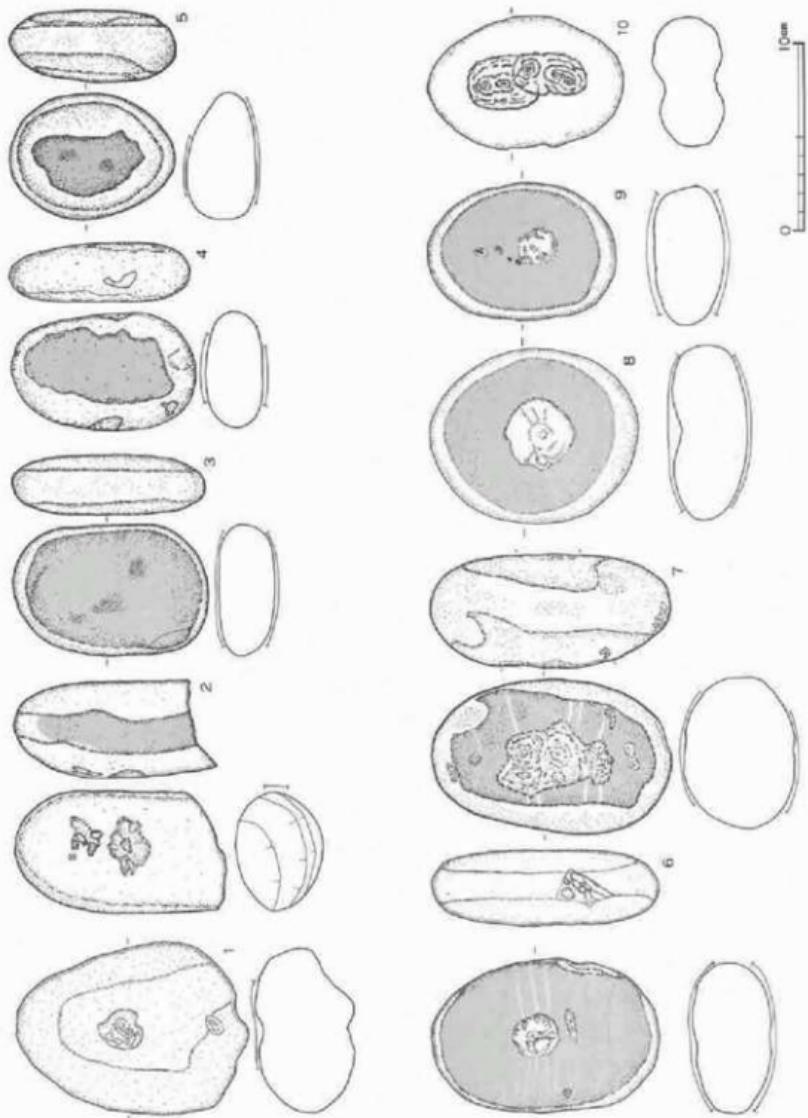


Fig. 58 磨石·凹石·缺石(36)

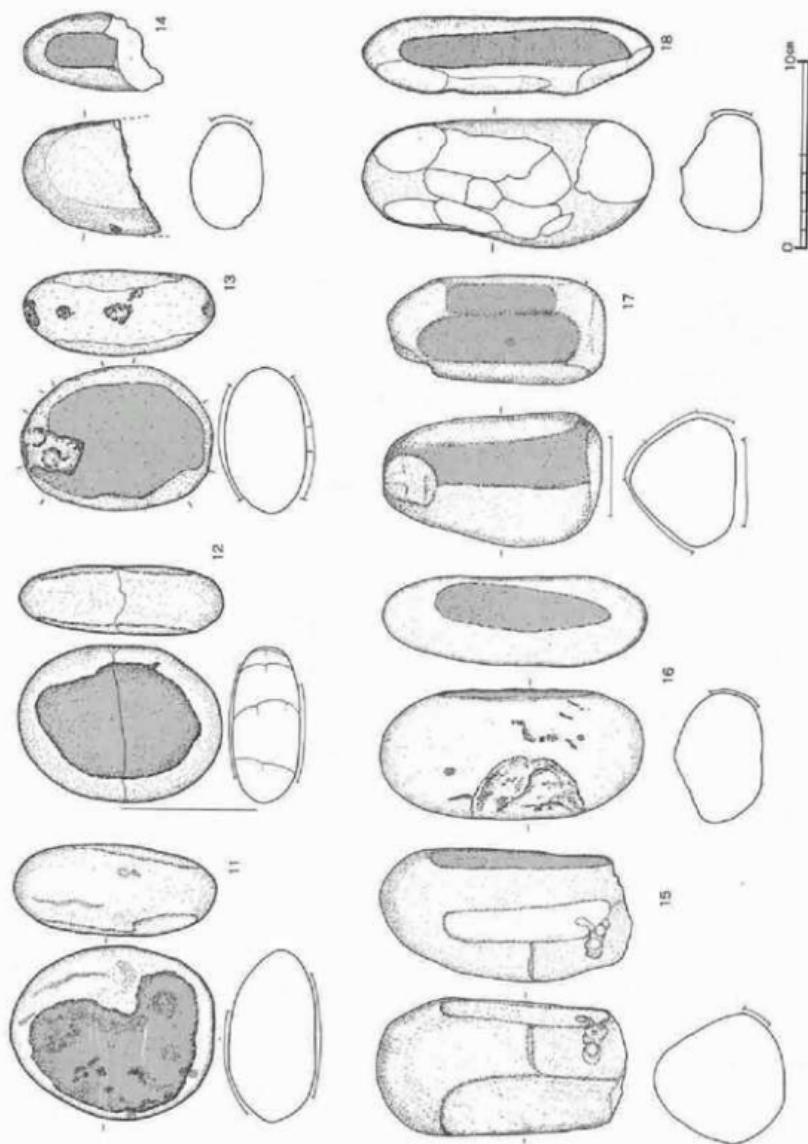


Fig. 59 磨石·敲石·特殊磨石 (1/6)

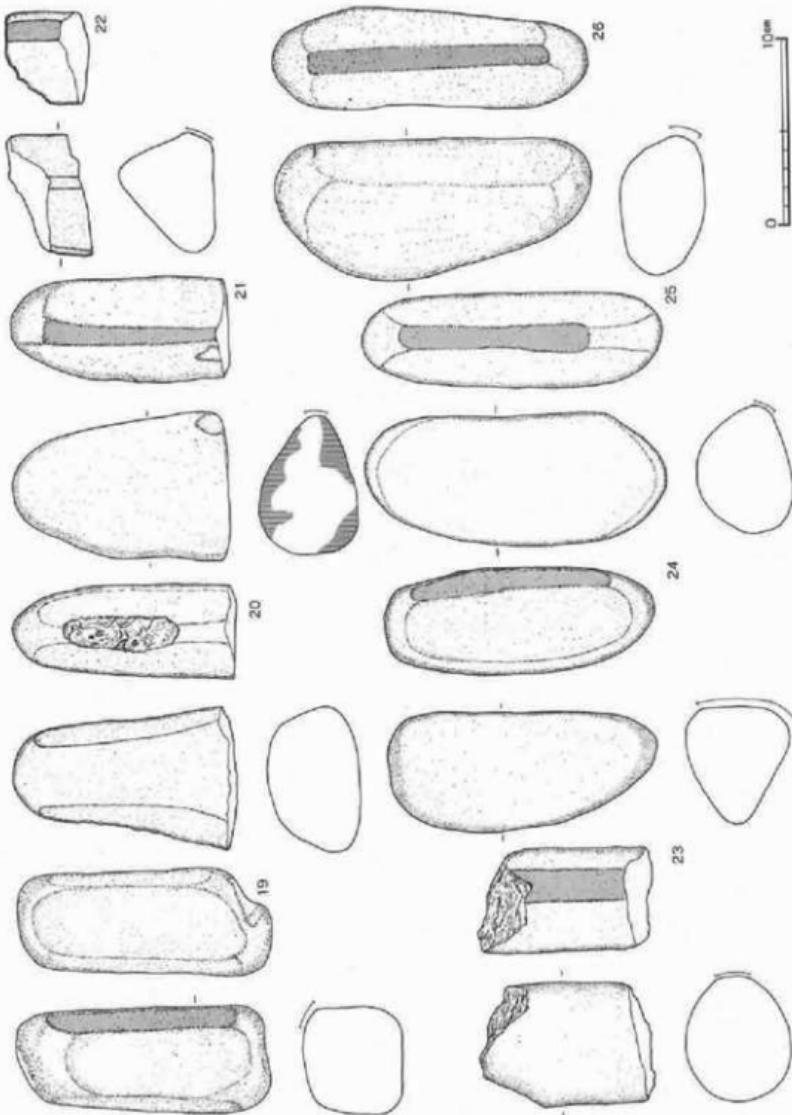


Fig. 60 特殊磨石・スタンプ形石器 (16)

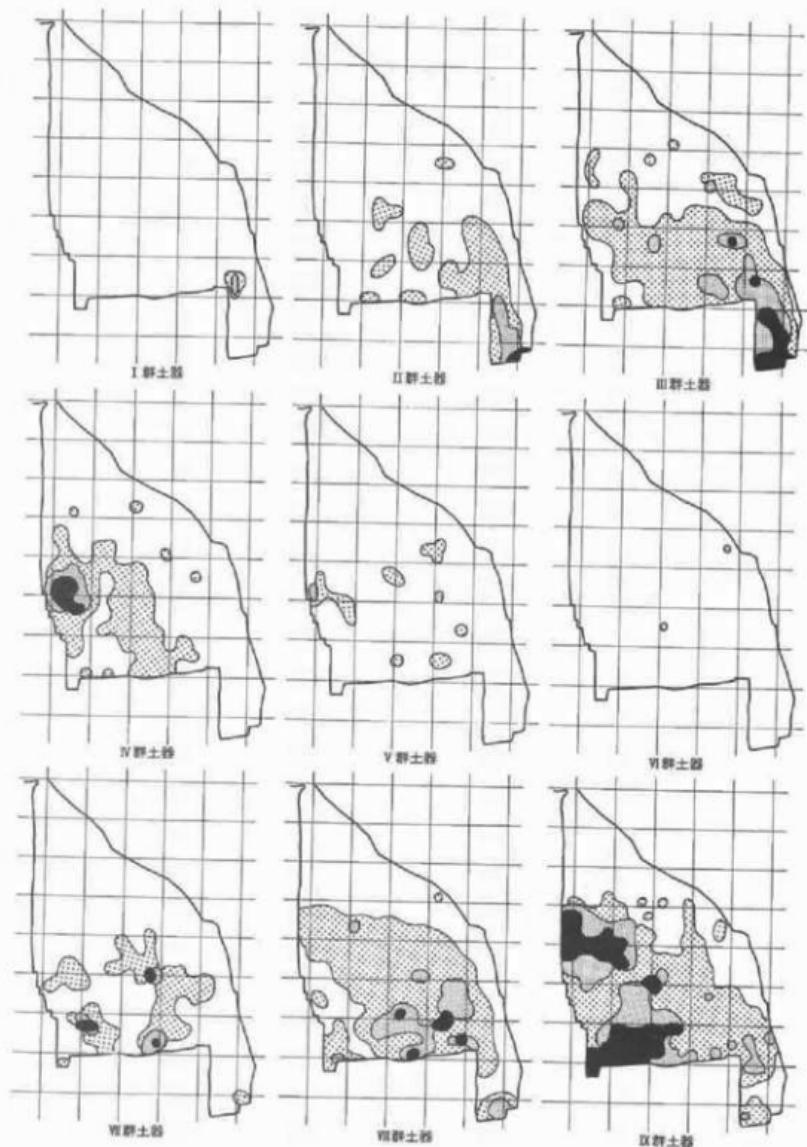


Fig. 61 縄文時代包含層分布図

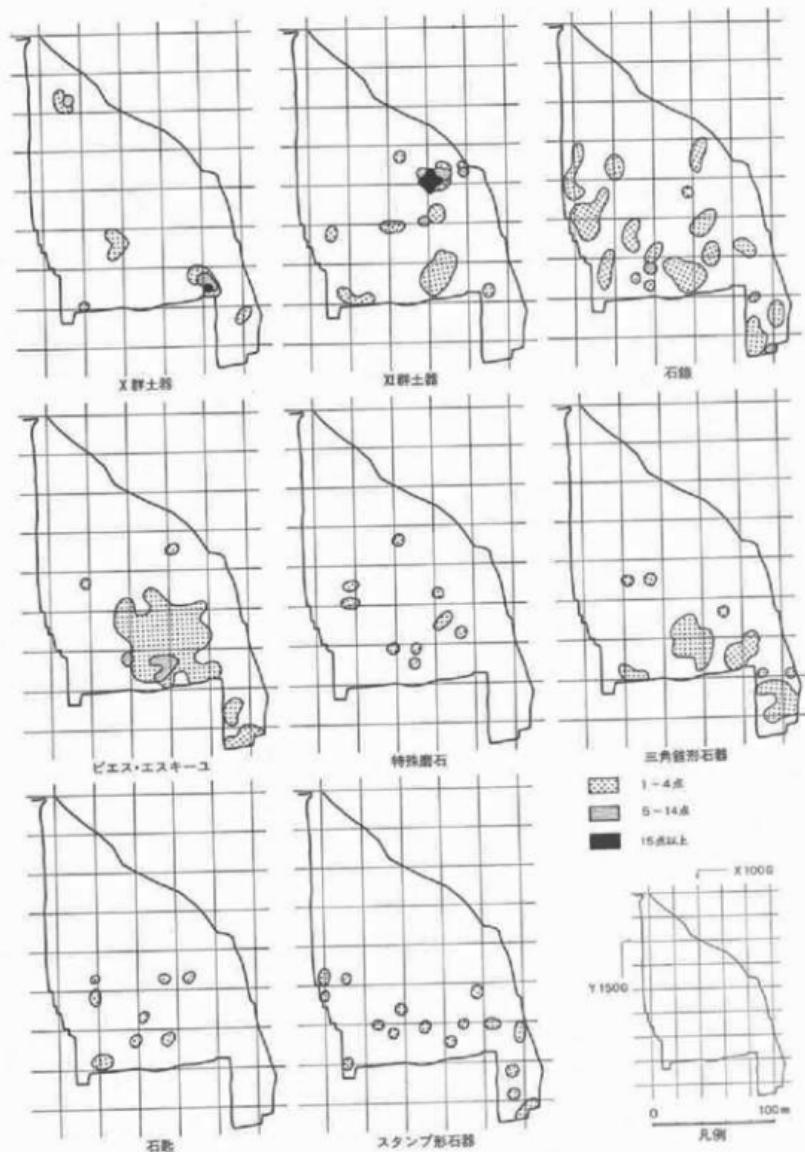


Fig. 62 縄文時代包含層分布図

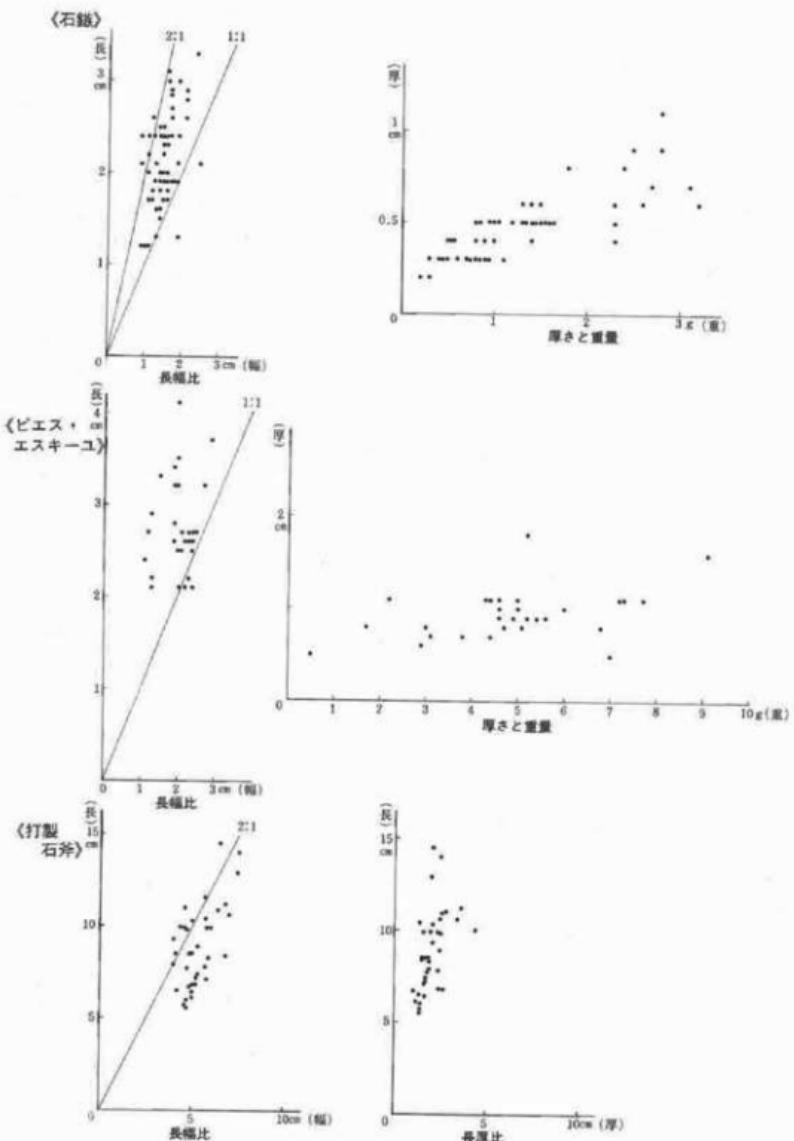


Fig. 63 石器法量相関図

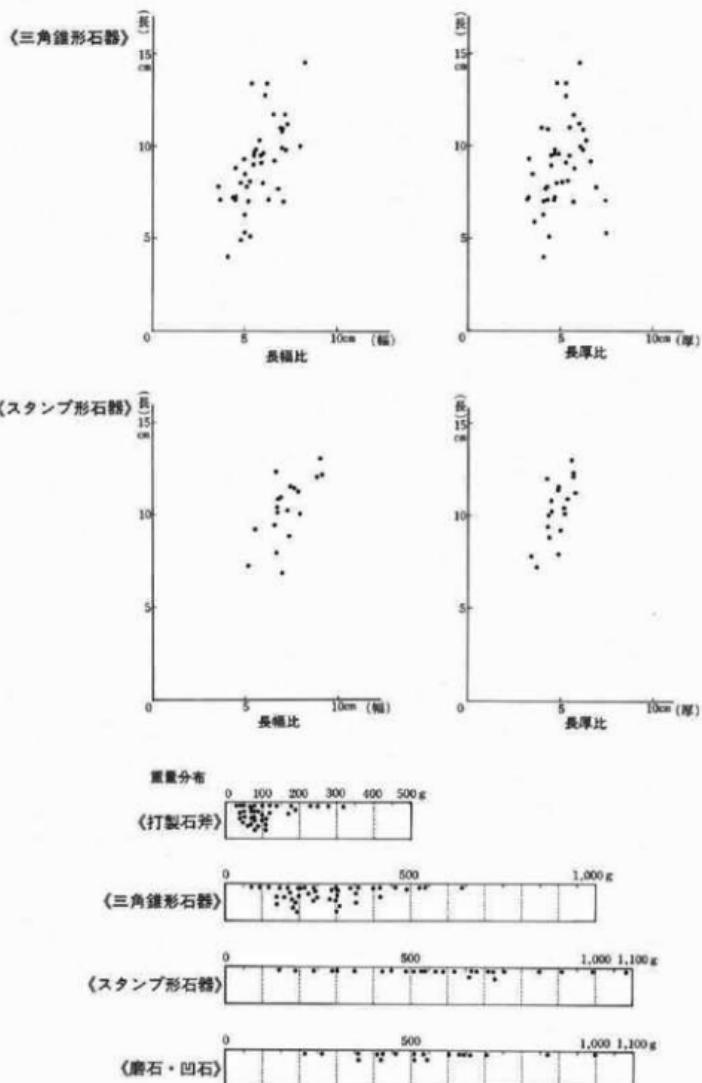
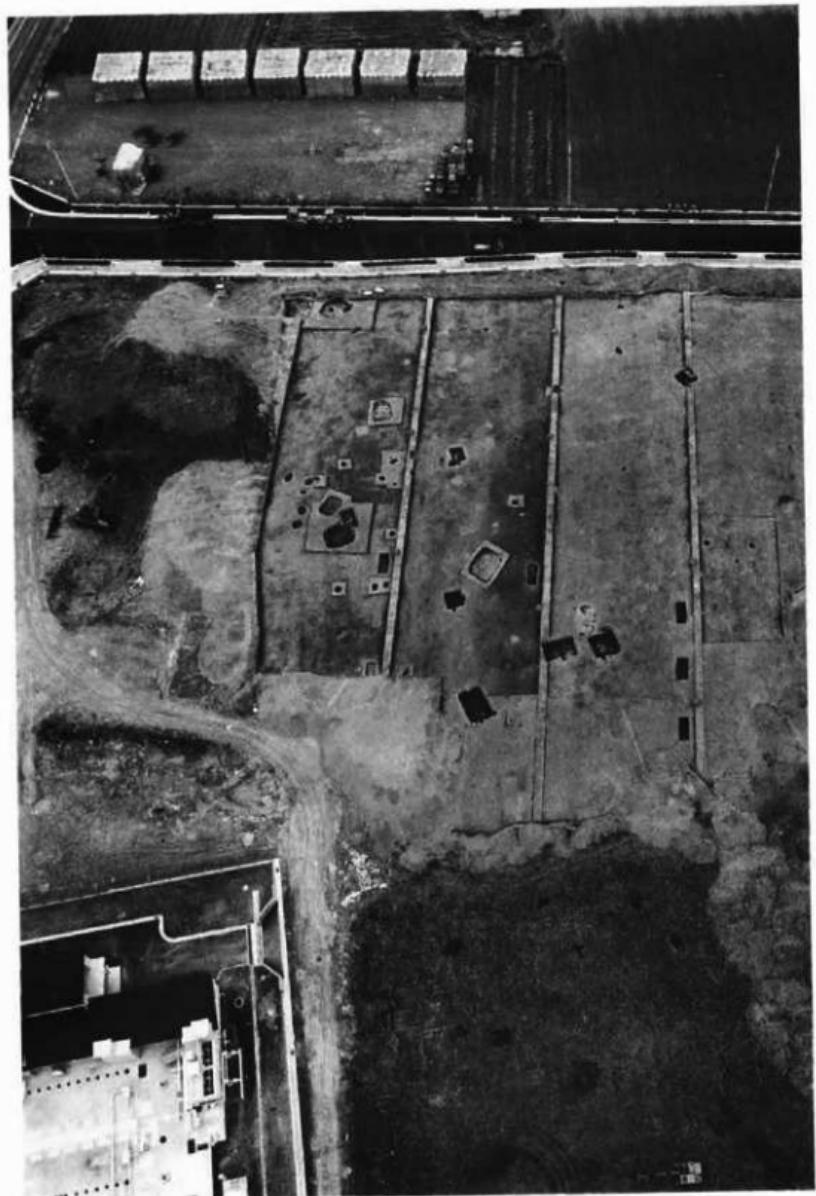


Fig. 64 石器法量相関図



下鶴谷遺跡全景（東から空撮）



住居址と土坑（西から空撮）



1. J-9号住居址（北から）



2. J-9号住居址遺物出土状態（北から）



1. J-10号住居址（北から）



2. J-10号住居址遺物出土状態（北から）



1. J-11号住居址（東から）



2. J-11号住居址（東から）



1. J-11号住居址埋設土器（南東から）。



2. J-11号住居址埋設土器(断面)(南から)



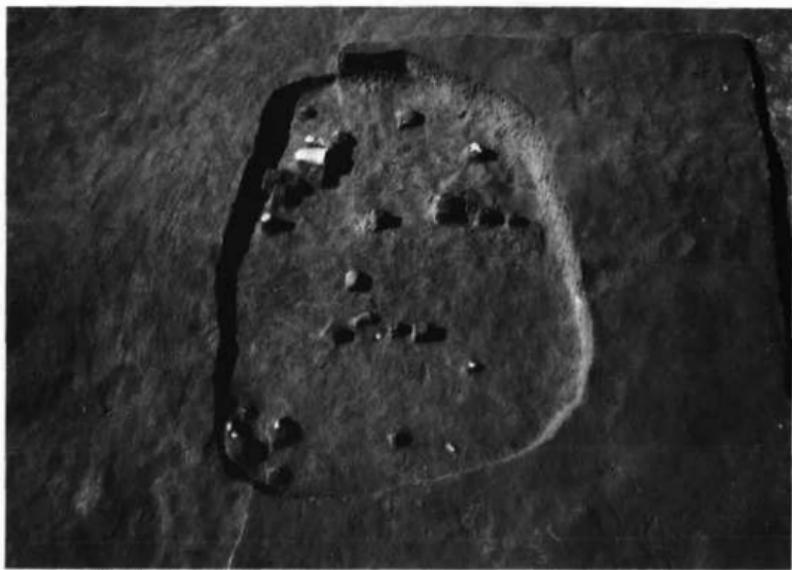
1. J-12号住居址（東から）



2. J-12号住居址遺物出土状態（東から）



1. J-13号住居址（東から）



2. J-13号住居址遺物出土状態（東から）



1. J-14号住居址（西から）



2. J-14号住居址遺物出土状態（西から）



1. J-9号住居址埋設土器（北から）



2. J-10号住居址埋設土器（南東から）



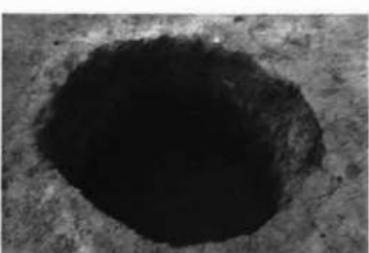
3. J-11号住居址埋設土器（北から）



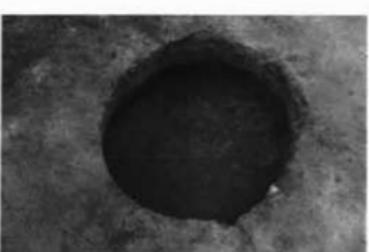
4. S-3号集石（東から）



5. JD-3号土坑（北から）



6. JD-19号土坑（東から）



7. JD-31号土坑（南から）



8. 繩文時代包含層遺物出土状態（東から）



J-9・10号住居址出土の土器



J-11号住居址出土の土器

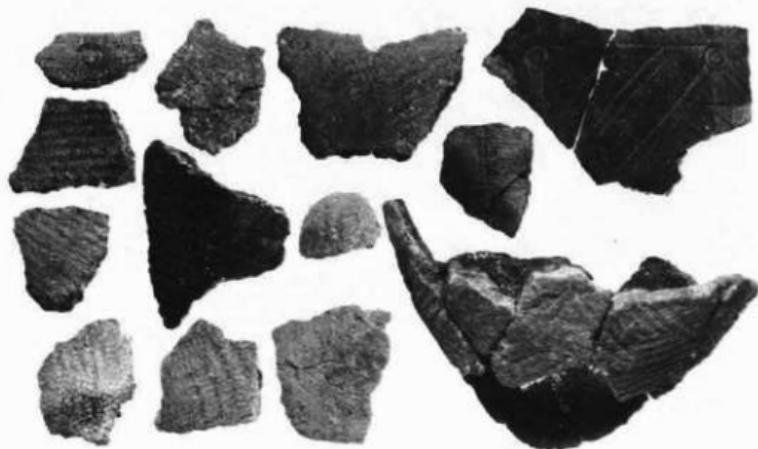


1. 青群土器

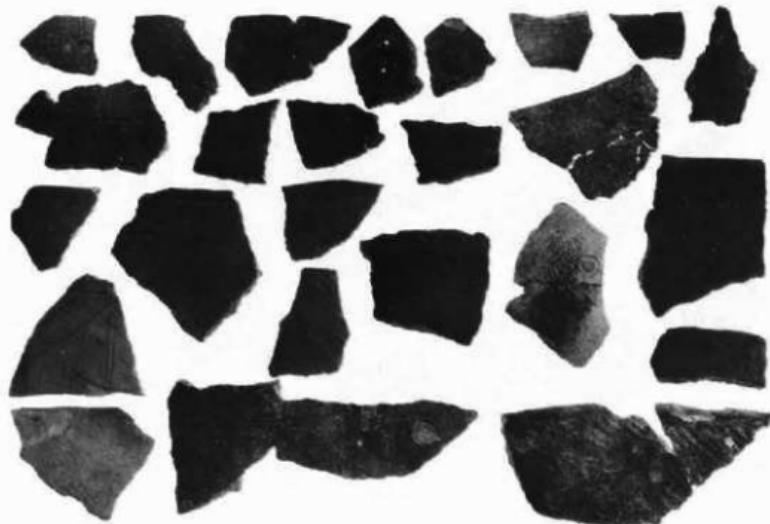


2. 展開ツク真

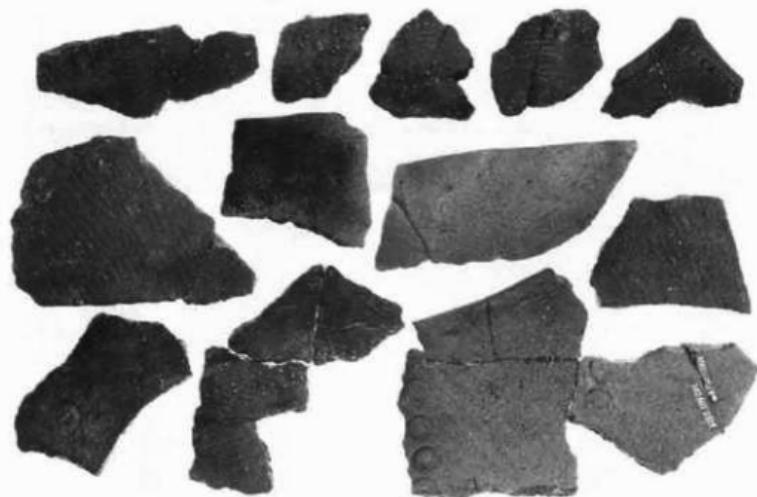




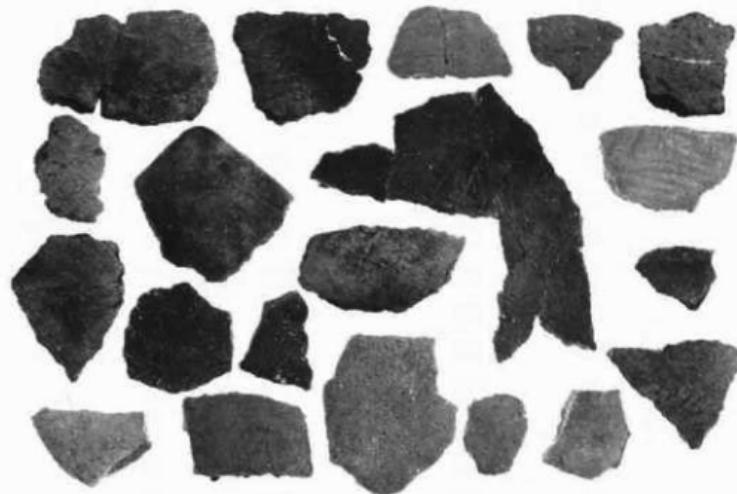
1. J-9・12~14号住居址出土の土器



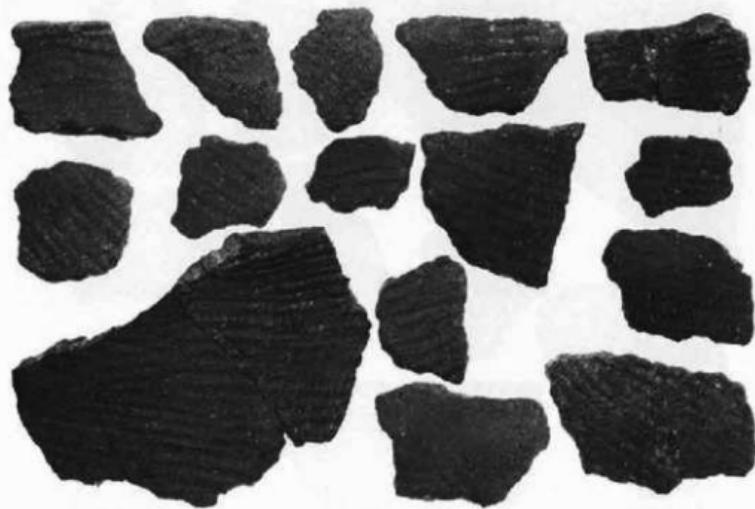
2. J-10号住居址出土の土器



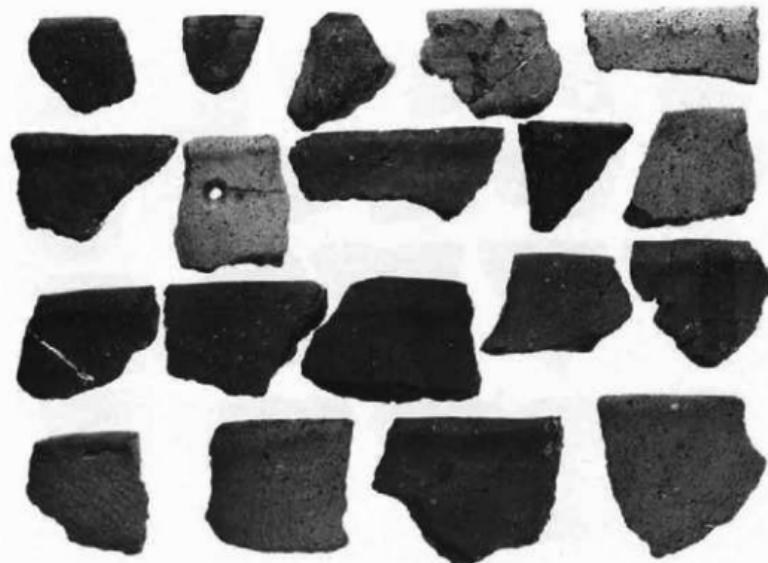
1. J-11号住居址出土の土器



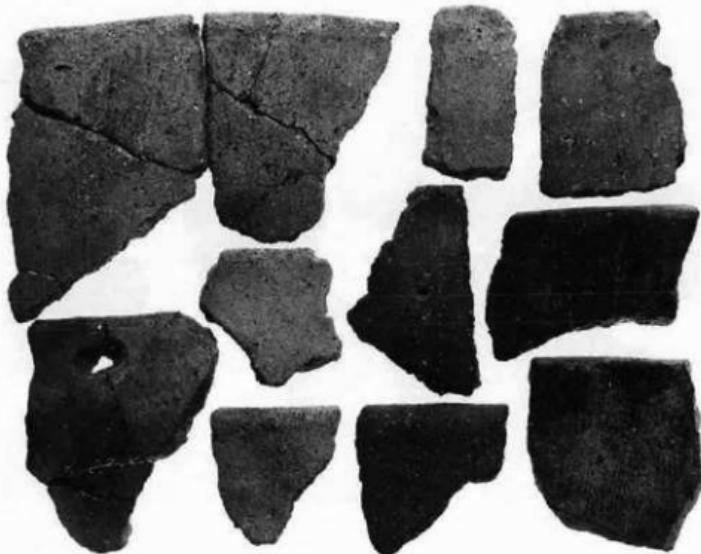
2. 土坑出土の土器



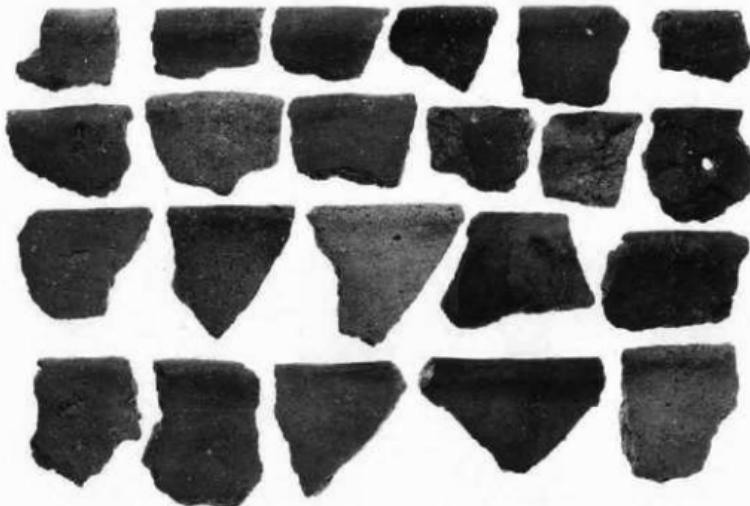
1. I群土器



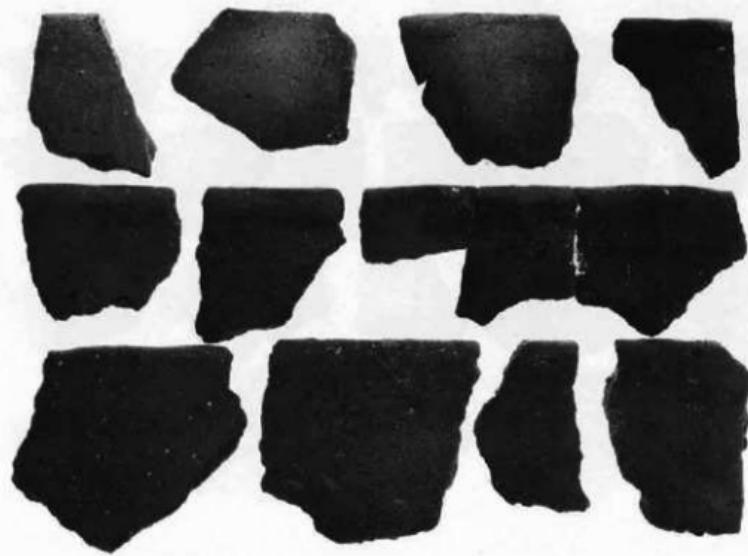
2. II群土器



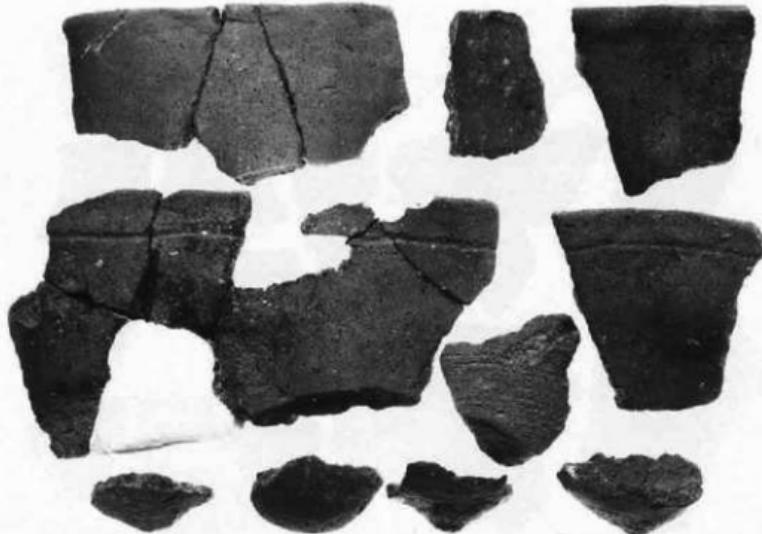
1. II群土器



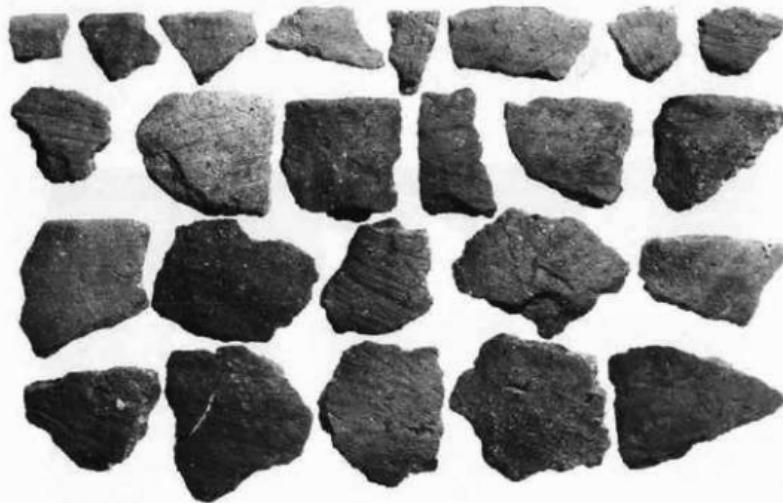
2. III群土器



1. III群土器



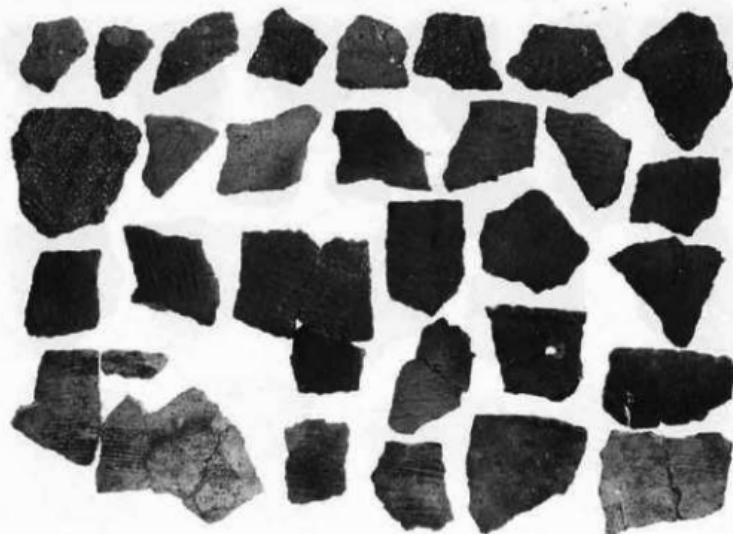
2. IV群土器



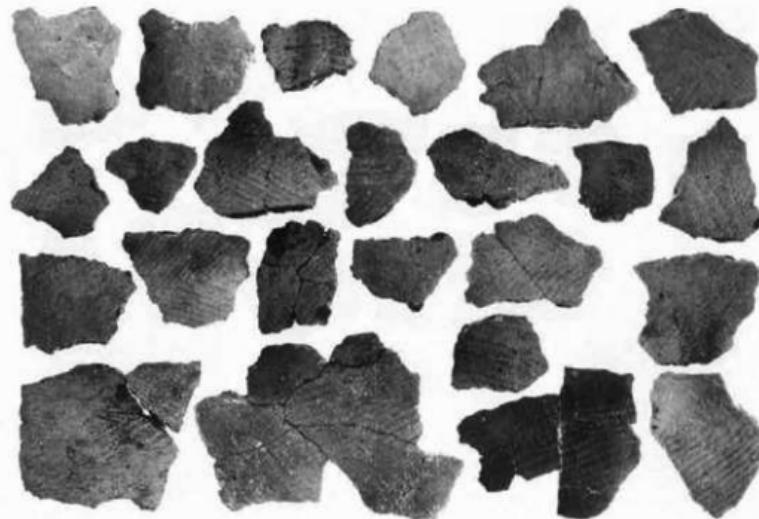
1. IV群土器



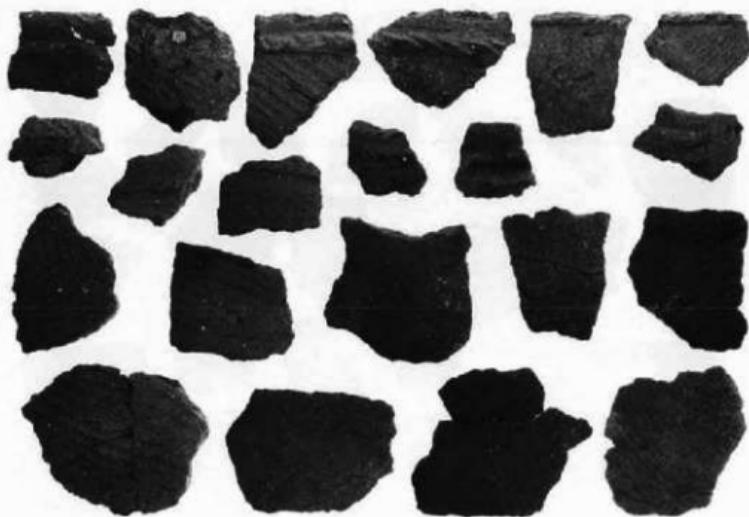
2. V・VI群土器



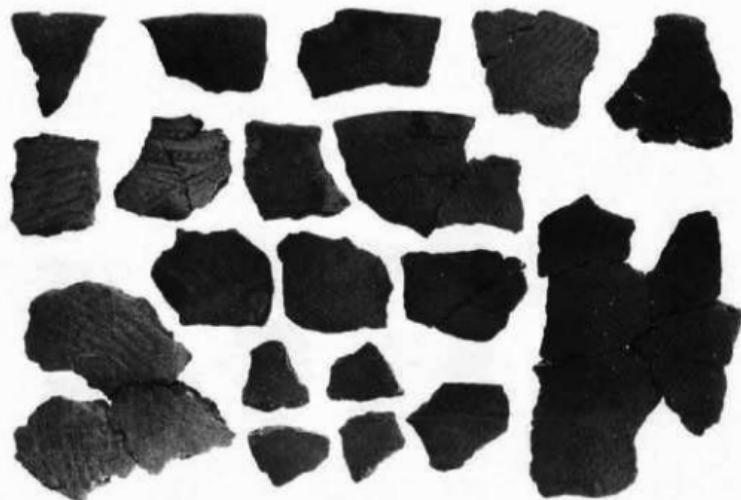
1. 陶群土器



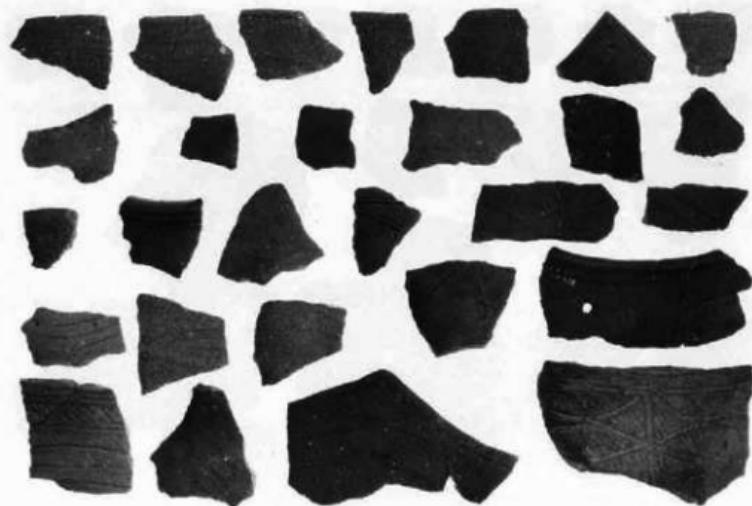
2. 陶群土器



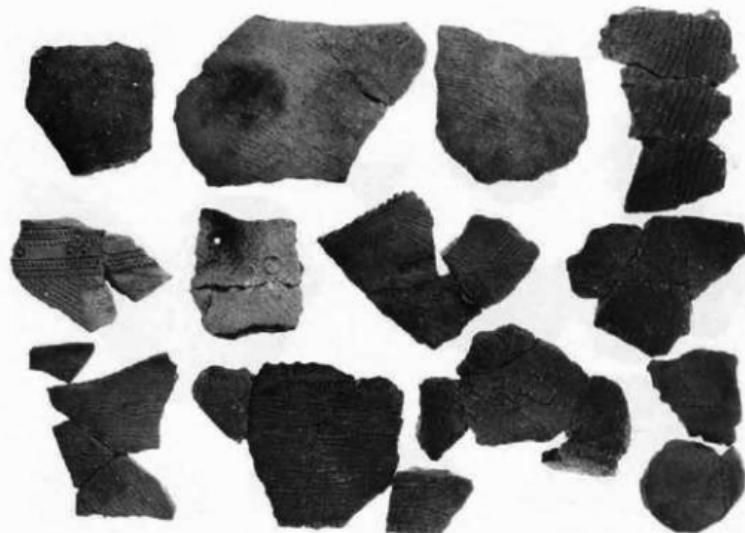
1. 雜群土器



2. 雜群土器



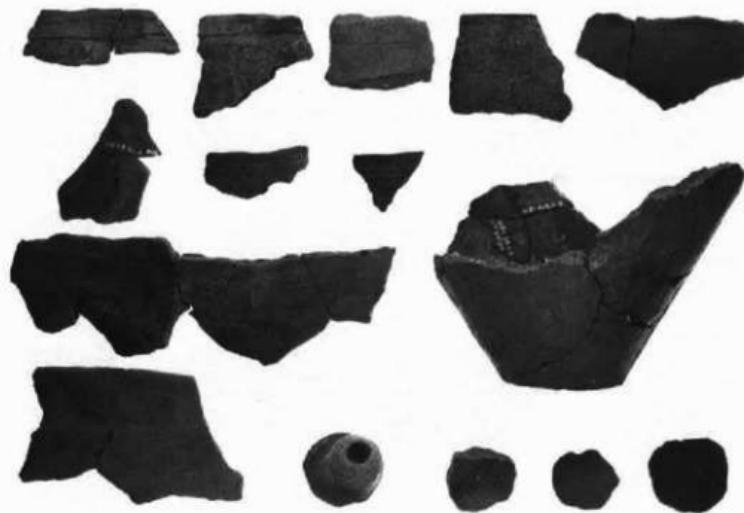
1. IX群土器



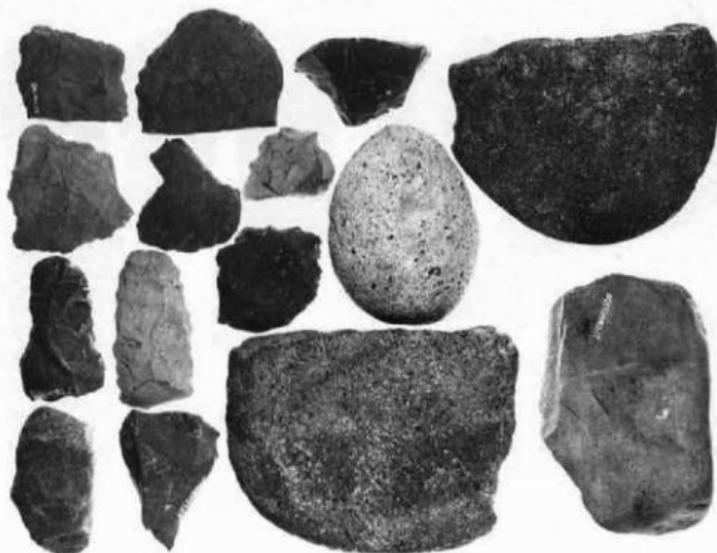
2. IX群土器



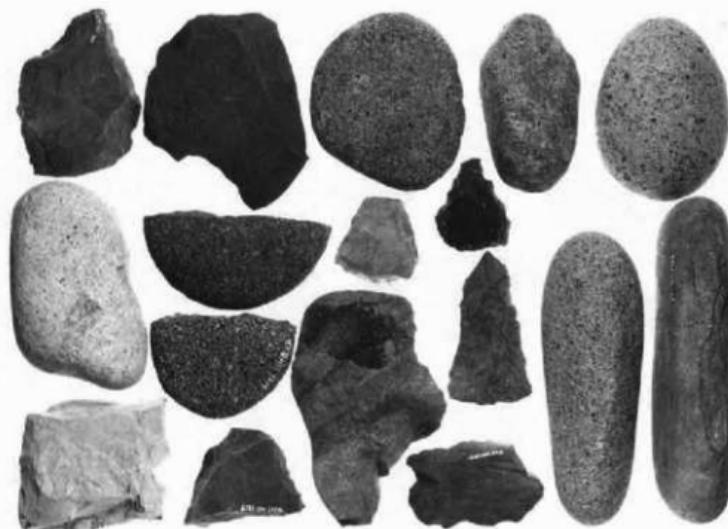
1. X群土器



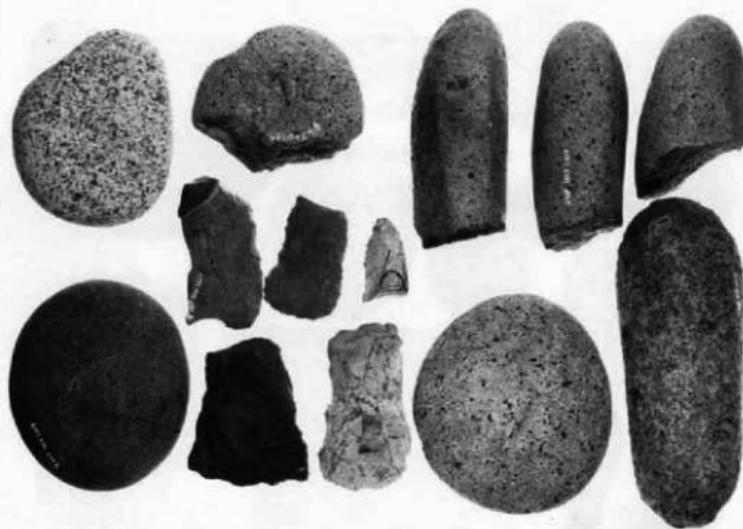
2. XI群土器・土製凹盤



1. J-9・10・11号住居址出土の石器



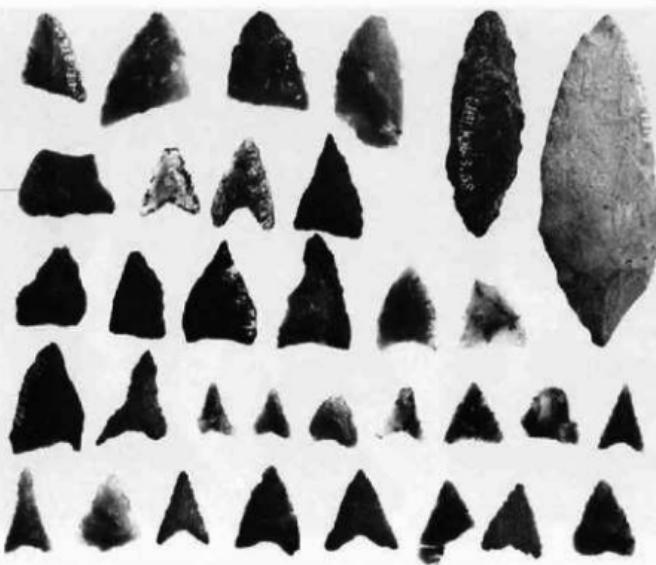
2. J-12・13号住居址出土の石器



1. J-13・14号住居址・土坑出土の石器



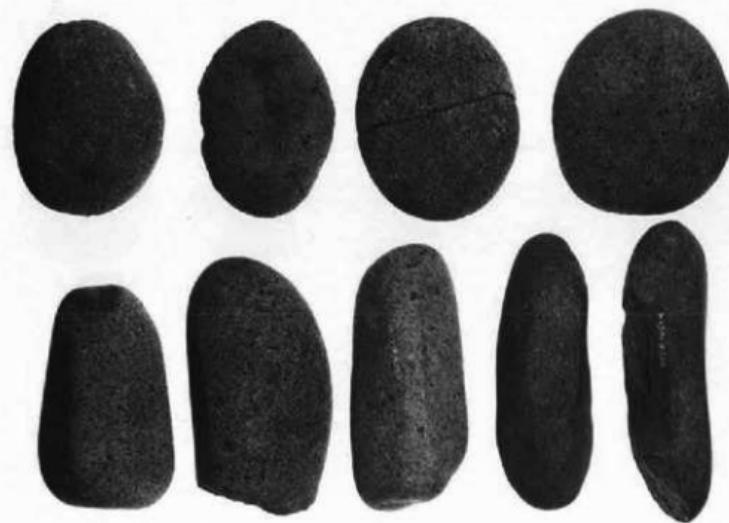
2. ピエス・エスキーウ



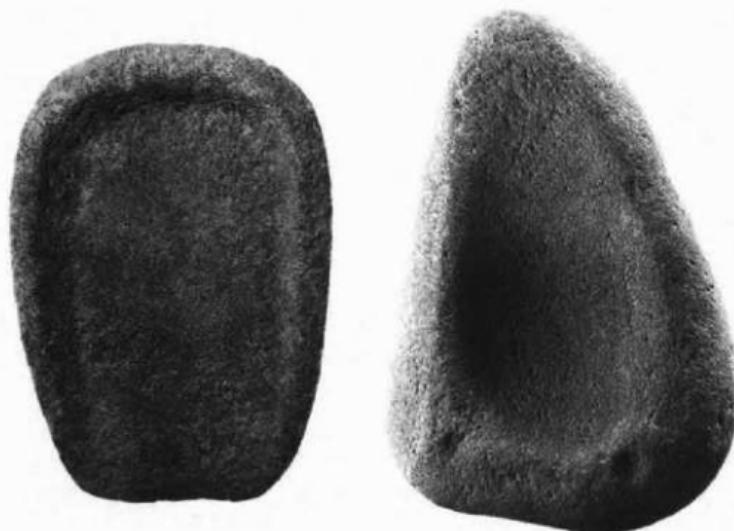
1. 尖头器・石鏃



2. 石鏃



1. 研磨石・特殊磨石



2. 石皿

調査要項

遺跡名称 柳久保遺跡群(やなぎくはいせきぐん)、下鶴谷遺跡(しもつるがいせき)

遺跡記号 60・61E1

遺跡所在地 群馬県前橋市荒子町宇下鶴谷1480-2番地ほか

調査期間 昭和60年7月15日～昭和60年11月5日

昭和61年5月12日～昭和61年6月9日

昭和61年9月21日～昭和61年11月15日

調査面積 8,630m²

開発面積 200,000m²

調査原因 住宅団地造成

調査依頼者 前橋工業団地造成組合 管理者 清水一郎

調査主体者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 関口和雄

事務局長 榎田紀雄 事務局次長 浜田博一 局員 松本 卓 諸田陽子

調査担当者 道藤和夫 前原 豊 福田瑞徳 関根吉晴 千田幸生 肥田順一

発掘調査参加者

天沼キヨノ	阿部シゲ子	阿部幸恵	青木一郎	青木芳子	天笠重子	新井ヒロ子
阿久沢福造	坂島義美	岩木 樹	石綿信雄	石間秀男	石間とく子	石川忠三
石井長太郎	井野尚史	井上茂兵衛	井上	坂島義美	石間こずえ	小渕丑子
飯島キク枝	飯島民斧	飯澤八重子	女星たま	女星太一郎	大沢スミ	大沢光子
落合高男	女屋千恵子	大田一郎	落合奈緒美	大沢一江	鹿沼豊子	鷲田さみ江
折原達子	大塚作一	小倉いぢの	小川俊子	加藤二生	鹿沼勝子	鹿沼仁衛
神山智子	神沢カヤ子	鹿沼勝江	鹿沼さとる	狩野周次郎	高坂ともと	小島勝一郎
神沢方子	木村廉子	木島みづ	久保田雅一郎	高坂幸太郎	小沼千恵	小堀キミ江
小尾政雄	小泉賀	高坂登美枝	高坂キヨ子	小菅将夫	高坂やす	高坂やすの
小屋とよ子	小屋はるこ	高坂かく	高坂とよ子	高坂花子	新保タマ子	霜田まつ子
高坂なみ	小屋ハル子	齊藤まさき	坂牧光江	佐鳥直子	新保幸永	新保永二
新保勝太郎	新保富恵	新保昌子	新保まつ	新保松乃	須藤理恵野	須藤ハツ江
新保隆	須藤幸恵	須藤カ津永	須藤寅次郎	須藤なを子	田中ツル	田中幹子
瀬下なほ子	関根あさ	瀬下千鶴子	武井美枝子	田村愛子	羽鳥ふみ子	中川保
田村よしの	田中光子	千明香樹子	渡木秋子	鳥山初枝	暮須賀もとめ	暮須賀エイ子
長岡徳治	内藤よし子	根岸容子	巾千恵子	林静枝	堀越うめ子	堀越豊
麻倉とみ	深町みね子	深澤みゆ子	星野ふじ	星野なか	真庭とし	宮川いち子
松本裕	松倉菊江	松倉リツ	松永シマ子	真庭卯平	山口さく枝	矢内三千代
村山ふで	村山若江	茂木順	諸田陽子	茂木智里	吉田光子	横沢信子
山田由美子	山田きく	湯浅満江	湯浅道子	吉田松枝		
吉田さだ子	六木木勝造	六木木もと				

柳久保遺跡群 V

昭和63年1月30日 印刷

昭和63年2月20日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4

TEL 0272-31-9531

印刷 ミヨン印刷株式会社





